阪大 NOW

―地域に生き世界に伸びる―

80th ANNIVERSARY 原点へ 未来へ 2011

OSAKA UNIVERSITY

OSAKA UNIVERSITY 4
2010/No.117

トピックス

平成22年度入学式挙行

クローズアップ

安全意識の根付いた大学を目指して…

大阪大学安全衛生管理部（D.A.S.H.）

2010 4月号
No. 117

目　次

トピックス …… 2
入学式告辞 …… 4
クローズアップ …… 8
役員室だより …… 12
ナウスペシャル …… 28
キャンパスニュース …… 30
記念講義 …… 50
表 彰 等 …… 55
人　　事 …… 60
訃　　報 …… 76
インフォメーション …… 78
海外拠点だより …… 84
海外レポート …… 86
交流協定大学 …… 90
クラブ＆サークル …… 91
トピックス …… 92

表紙写真：大阪府藤井寺市野中古墳
出土８号三角板革綴襟付
短甲　高さ51.6cm

大阪府には大仙陵古墳をはじめとする巨大な前方後円墳が多数存在します。なかでも大古墳が集中する大阪南部の古市古墳群中に所在する大阪府藤井寺市野中古墳からは、1964年に行われた発掘調査において11セットの甲冑が出土しています。一ヶ所での甲冑出土数としては、大阪府堺市黒姫山古墳につぐ数をほこります。なかでも襟付き短甲は数百点をこえる古墳時代の甲冑のなかでも、わずかに７古墳からしかみつかっていない貴重なものです。（文学研究科所蔵）

表紙デザイン：株式会社ココティエ

平成22年度入学式を挙行

平成22年度入学式が、４月５日（月）に大阪城ホールで挙行され、学部3,446名、大学院3,037名が大阪大学に入学しました。

入学者数が過去最大規模となったことに加え、同席を希望する保護者も多いことから同ホールでの開催となりました。

式では、新入生を代表して歯学部の木多佑歌さん、大学院薬学研究科の成井信博さんがそれぞれ宣誓を行いました。

続いて、鷲田清一総長から、「世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を紡ぎだすには、身の周りの小さな世界から視野を広げていかなければならない。」と告辞があり、学部長・研究科長等の紹介の後、平松邦夫大阪市長から、新入生に対して、「文化・コミュニケーションを大切にしながら、『いっしょにやりまひょ』の精神で、大阪大学発祥の地である中之島を核として、大阪市・大阪大学ともに成長できるようにがんばりましょう。」と記念講話がありました。

その後、入学を祝し本学混声合唱団が「大阪大学学生歌」を、男声合唱団がシュトゥンツ作曲「フライエ・クンスト」を、交響楽団がエルガー作曲「威風堂々」を演奏し、閉式となりました。

引き続いて、オリエンテーションが行われ、学生生活全般についての説明の後、本学応援団による新入生歓迎エールがあり、日程を終了しました。

（総務部総務課）

大阪大学

大阪城ホール
OSAKA-JO HALL

平成22年度 大阪大学入学式

平成２２年度大阪大学入学式総長告辞

まず、本日ここに集われた 3446 名の学部生、3037 名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。大阪を象徴する大阪城の、その満開の桜に包まれて、きょうここに入学式を挙行できることを、たいへんに嬉しく思います。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

みなさんはこれまでずっと勉学に励み、難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学ではこれをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていらっしゃることでしょう。けれども逆に、そして学部新入生の方々はとくに、大学に入るには入ったけれど、これから何をしたらいいのかよくわからないと、少々不安を抱いている方もおられることでしょう。勉強は何からとりかかったらいいのか、なれない土地でどんな生活が始まるのか、うまく友だちが見つかるだろうか、課外活動というのもいろいろありすぎて……というふうに、です。

「見る前に跳べ」ということばがありますが、わたしはみなさんに、まずは「跳ぶ」ことをお薦めしたいと思います。じっさい、「やりたい」ことは大学にいるあいだに変わってしまうかもしれません。いや、どんどん変わっていけばいいのです。何がほんとうに自分がしたいことかは、やってみなければ分からないからです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、自分の立っている場所からしか、見られないという限界がまずあります。次に、自分が習ってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、自分がなじんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を紡ぎだすためには、この小さな世界の襞をもっと大きく広げていかなくてはなりません。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるというのは、すでに知っている知識を量的に拡大するということではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。

こうした考えから、大阪大学では専門教育と並んで教養教育というものを重視しています。それも、初年次の教養教育のみならず、大学院での教養教育というものを重視しています。専門の研究をすればするほどより深い教養というものが必要になる、その理由について、まずお話ししておきたいと思います。

この科目の担当をしているコミュニケーションデザイン・センターで、以前、次のような授業がありました。BSE 問題、いわゆる狂牛病問題が起こり、米国産の牛肉の輸入停止を政府が決めたあと、しばらくして米国産の牛肉の輸入再開が問題になった頃のことです。全学の研究科から、専門を超えて大学院生がこのセミナーに参加しました。まず教員が「米国産の牛肉を輸入再開するためにはどのような条件を付したらよいか」という問題提起をし、それを受けて大学院生たちの長時間の議論が始まりました。BSE 問題はこれまでに知られていなかった問題ですから、それについての専門家はいませんでしたが、それに近い医学・生物学系の大学院生から BSE の原因についての病理学的な発言があり、それに対して同じ研究科の院生から異論も出ました。そういう議論の応酬にしばらく耳を傾けていた政治学・経済学系の院生はその両者に噛みつきました。米国産牛肉の輸入再開を論じるにあたっては、そんな原因論よりさらに重要なのは、日米の外交関係であり、貿易上の駆け引きである。そういう政治力学のなかでこの問題を考えないと結論は出ないと主張しました。するとこんどは歴史学や文化人類学を専攻している院生たちから、そもそも BSE 問題の根底には、人間が他の動物を飼育しそこから食肉を得るという食文化のあり方、大量の食肉を得るためにこれまた大量の穀物を動物に与え、ひいては肉骨粉という人工飼料を与えて、動物自身にカニバリズムを強いる、そのような人類の牧畜文明のあり方自体を問うべきだと主張しま

した。BSE 問題は病理学でも政治・経済論でもなく、さらにスコープを拡げて文明論の問題として論じないと、問題のほんとうの所在は見えてこないし、深まりもしないと言ったのです。この意見に対しては、そこまで問題を拡げると「輸入再開の是否」という目下の問題は先送りされるだけで、答えは出せなくなるとの反論も相次ぎました。こうして議論はどんどん厚みを帯びてゆきました。

その日、そのセミナーがどういう閉じ方をしたのかわたしは知りませんが、そしてこの問題はたんなる一例にすぎませんが、大学という場所で重要なことは、このように関心がそれぞれに異なる者たちがそれぞれの問題把握のコンテクストをぶつけあい、摺り合わせるというところにあります。ではなぜ、そのような複数のコンテクストの摺り合わせということが重要になってくるのでしょうか。

環境問題であれ、金融問題であれ、さらには医療や労働の問題、食品流通の問題であれ、いわゆるグローバル化が進行し、どのような局地的な問題にも世界システムの複雑な諸契機が絡まりあってくる時代には、国内問題であってもそこには国家を超えた政治・経済・文化の諸契機が見えない仕方で深く介入してきていており、一つのコンテクストから、いいかえると単一の視点からその構造を見透かせるような問題はこの時代にはほとんどないと言っていいからです。このように複雑な諸契機が錯綜していてすぐには解決への道筋が見えないような問題と取り組むには、したがって相当にタフな知性が求められます。無呼吸のままずっと潜水を続けるようなタフさがわたしたちの知性には求められるのです。

一般に、専門を究めるというのは、研究であれ業務であれ、より細かく精緻な領域に入ってゆくということです。みなさんも大学に入るときに学部を選び、大学に入れば専攻を選び、さらに専門の研究課題を選ぶというふうに、関心の対象をより狭めてゆかれるはずです。そうするなかで、そのごく限られた研究領域のなかで、世界の先端の研究水準というものを知り、それに合流し、さらにそれを凌駕することにますます向学心を燃え上がらせることでしょう。その筋のプロフェッショナルになろうとして、です。

けれども、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の知識だけではどうにもなりません。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。一つの理論を巨大な装置を用いて検証しようとするとき、一つの発見を医療の現場で活かそうとするとき、さらには一人の画家の仕事をまとめ展覧会を開こうとするとき、技術者や法律家、あるいは経理、調達、広報といった別のプロフェッショナルたちとチームを組まなくてはなりません。

別の領域のプロフェッショナルと同じ一つの課題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家（つまりそれについてのまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門についてイメージ豊かに説明することがまずは必要です。そして彼らにその気にならせねばなりません。そのためには、異なる分野のプロフェッショナルたちのこだわりをよく理解し、また深く刺激するような対話をできなければなりません。そうした技を身につけるためには、常日頃から、異分野の人たちと深く交わっている必要があります。将来、医師になろうとしている人、法曹界に進もうとしている人、教職につこうとしている人、研究者や技術開発者になろうとしている人たちが、同じ一つの問題について侃々諤々議論するトレーニングを、日頃よりしている必要があります。すでに述べたように、一つの包括的な視点からすべて論じきれるような問題は現実にはほとんどないのですから、自分の専門領域の、内輪の符丁でしか語れない人は、そもそも専門家としても失格なのです。

とすれば、専門家にはその知識が「知の総体」のなかでどのような位置を占めるか、いいかえると、みずからの知を社会のより大きな枠組みのなかにいかにマッピングできるかが、強く問われることになります。自分が何を知っていて何を知らないか、自分に何ができて何ができないか、それを見通せていなければなりません。そしてそのうえで、異領域の異なる思考方法、異なる言語を相互に翻訳できる

ような資質というものが求められるようになります。

このような要請に応えられる知性を磨いてゆくのに必要なのは、まずは〈複眼〉を身につけるということです。一つの問題をさまざまの方向から照射し、問題を立体的に浮き彫りにしてゆける能力です。多くの学問が古来磨いてきたそれぞれに異なる問題設定の仕方を知っておくこと、あるいは異文化に学ぶこと、歴史に学ぶことも、いま自分の立っているここととは違う別の場所から、いまここを見つめなおすことにつながります。そのような〈複眼〉のなかでこそ、世界はある奥行きをもって浮かび上がってくるのです。

そして世界をこの奥行きに沿って見つめることができること、それがじつは「教養」があるということなのです。みなさんが入ってこられた大学というところも、そのためにあります。大学にはみなさんがおそらくはまだ知らないさまざまな知識が膨大に蓄積されています。宇宙についての、自然についての、社会や文化、そしてそれらの歴史についての知識です。その大学で、過去の思想ともう一度対話しなおしたり、自分とは異質な他者のものの見方、感じ方に学んだりしながら、自分の世界を広げてゆくこと、そしてこれまで当たり前のように見てきた世界をもっと別な視点から捉えなおすことで、世界を広げてゆくことが大学での勉学ではもっとも重要なことなのです。先ほども言いましたが、大学では、これまで知りたいと思ってきたことを知るだけでなく、そんな問いが存在することを夢にだに思わなかった問いにふれること、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれることが何よりも大事なのです。

そういう勉学のなかでこそ、「教養」のもっとも重要なはたらき、つまり、「価値の遠近法」を身につけることが可能になります。「価値の遠近法」とは、なくてはならないもの、絶対に見失ってはならないものと、あってもよいけどなくてもよいものと、端的になくてよいもの、そして最後に絶対にあってはならないこと。この四つを、どんな状況にあってもそのつど区分けできるということです。

不確定なこと、分からないことが充満する世界、正解のない世界のなかで重要なことは、すぐには分からない問題を手持ちの分かっている図式や枠に当てはめて分かった気にならないことです。分かっていることよりも分かっていないことをきちんと知ること、分からないけれどこれは大事ということを知ることが重要なのです。別の言い方をするならば、思考にためをつくること。つまり、メディアが流す情報を鵜呑みにするのではなく、またそこで煽られる「世情」(popular sentiments)に流されたり、それに感情的に反応したりするのでもなく、〈複眼〉で世界を見、ああでもない、こうでもないと根気よく考えつづけ、他の眼をもった人とも議論しながら、「公論」(public opinion)というものの形成に加わってゆけるということが、「教養」があるということのなのです。

人間性と人文学的教養、この二つを英語では humanity、そして humanities と、同じ言葉で表現します。単数と複数の違いがあるだけです。世界のあちらこちらで生活している人びとのローカルな諸問題が、国境を越えて否応なく世界各地で発生している諸問題にじつは見えない形で絡まっているようなこのグローバル化の時代にこそ、わたしたちは民族や国民を超えた「人間性」というものについて、そしてさらには「地球」(globe)というよりもむしろ「世界」(world)について学び、考え、語りだす必要があります。

「人間性」について、そして「世界」について語りだすときのその杖になるのが「教養」です。そしてその教養に栄養を提供しつづけてきたのが基礎科学といわれるものです。そういう意味では、大学で専門を究めることと教養を磨くこととは別のことではありません。みなさんには、大学でさまざまの基礎科学を学び、眼から鱗が落ちるような経験をたっぷりしていただきたいと思っています。

大阪大学は 6 年前の国立大学法人化以後、以上のような意味での深い「教養」を備えた人のことを“ a man of good sense ”と呼び、そういうグッド・センスを持ち合わせた卒業生を送りだせるような教育に力を入れてきました。ここでいうグッド・センスのセンスとは「感覚」や「感受性」(sensibility)のみを意味するのではありません。英語で「コモン・センス」(常識)といわれるときのセンス、つまり日本語の「見識」にあたるもの、さらにフランス語で「ボン・サンス」(良識)といわれるときのサンス、つまり日本語の「理性」や「判断力」にあたるものを含みます。そういうグッド・センスを持ち合わせるがゆえに「あいつは信用できる」「あいつにまかせておけば大丈夫」と世間から言ってもらえる人、つまりは社会から厚い信頼を寄せられる人を育て、送りだそうと、大阪大学はこれまで教養教育に力を入れてきました。

このグッド・センスを、前総長の宮原秀夫先生は常日頃、「賢くあれ、みっともないことはするな」と表現されていました。さらに歴史を遡れば、その「賢くあること」、「みっともないことはしないこと」を、18 世紀、19 世紀の大

坂の町人はいまよりもいっそう強く心がけていました。いまから286年前に、五同志とよばれる五人の商人たちが資金を募り、学者を招いて、町人みずからのために創った「懐徳堂」という学問所がそのための場所であり、天保年間の1838年に開かれ、のちに福沢諭吉をはじめとして明治期の日本国家を担うことになる人材を数多く輩出した「適塾」という私塾もまたそうした場所でした。わたしが今日申し上げたあの「教養」を身につけ、磨いていくために大坂の町人が創ったこの二つの学問所を、大阪大学はその精神的な源流としております。大阪大学のこの源流については、4月16日の共通講義「知性への誘い」であらためて詳しくお話しさせていただくこととして、「賢くあること」「みっともないことはしないこと」、その精神を、大阪大学がみなさんとともにしっかり受け継いでいきたいと強く念じていることを、この入学式においてみなさんにたしかに伝えておきます。

大阪大学にはもちろん、塞いで見える部分もありますが、それ以上にいまさまざまな輝きがあります。直近の事例だけに例を限るとしても、文化功労者をはじめとして毎年数々の表彰を受けておられる先生方の高度な研究活動、このたび阪大ホームページの運営スタッフが受けた「だれもが使えるウェブコンクール」での表彰、大阪大学と産業界、地域社会との厚い連携のなかで生まれた中之島における「21世紀懐徳堂」という社会人教育の活動へのメセナアワード2009の授与、そして昨年の全日本落語選手権での大賞受賞や、中国語、トルコ語での全国学生弁論大会での受賞、囲碁やかるたでの全国トップでの闘いなど、課外活動における学生諸君の活躍ぶり……というふうに、いま大阪大学は研究のみならずあらゆるセクターでとても輝いています。その輝きをこんどはみなさんが放ってくださることを念じて、わたくしからの告辞とさせていただきます。

安全意識の根付いた大学を目指して・・・
大阪大学安全衛生管理部（D. A. S. H.）

Department for the Administration of Safety and Hygine Osaka University

Concept

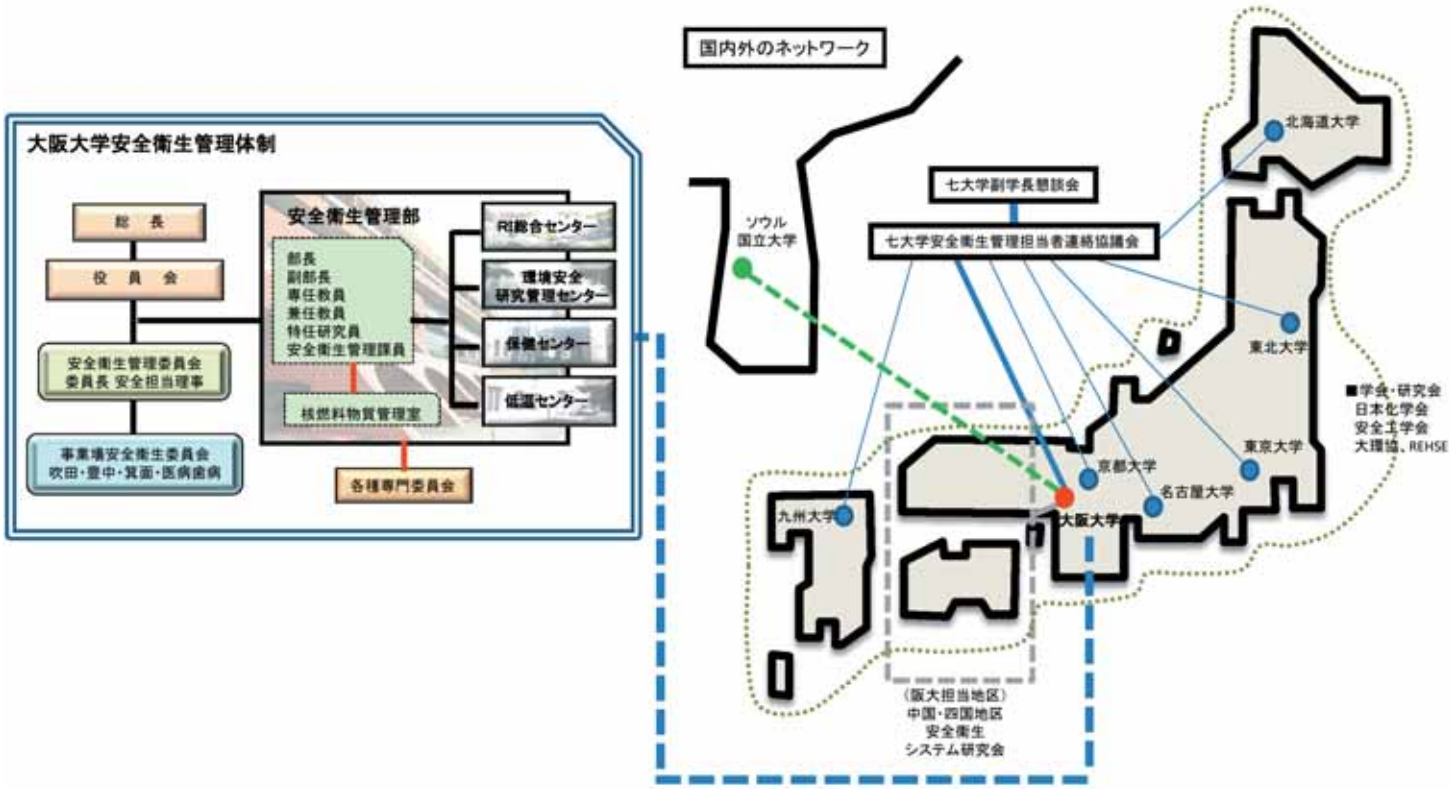
国立大学法人化に伴い、大学における安全と衛生の管理が全学統一的に行われるようになりました。大阪大学では各研究室の自主管理をベースに全体的な調整を安全衛生管理部が行うという体制で大学の安全衛生を維持しています。研究はオリジナリティが命であり、そのため、学内には研究者の数だけ研究分野が存在することになります。研究室は個々の研究分野のプロフェッショナルであり、己の研究における危険を熟知しているのも各研究室です。そこで大阪大学では、それぞれの研究室が安全衛生を自主的に管理すること、そして、安全衛生管理部が各研究室での管理状態を全学統一基準で確認することで、極めて広い範囲の研究分野の安全と衛生をカバーしています。各研究室と安全衛生管理部の両者の活動が存在して初めて、安全で快適な大学の教育・研究環境が確保されると考えられます。

～素晴らしい研究成果を、そして素晴らしい人材輩出を～

安全意識の根付いた大学の構築、そして、大学構成員の安全と、大学の組織としての安全を作り上げるため、構成員と共に今後も努力をしていきます。

◆大阪大学安全衛生管理体制

大阪大学の安全衛生管理体制は、安全衛生を専門に行う部門として「安全衛生管理部」を組織し、定期巡視、事故時の対応、事故情報の収集、各種法令対応業務、そして安全衛生に関する教育を行っています。この安全衛生管理部は教員と職員の融合組織となっており、学内の様々な場所、状況に対応できる組織を作っています。この管理部と各センター組織、専門委員会などと共同で学内での安全衛生活動を行っています。



安全衛生管理体制と国内外のネットワーク

◆全国及び国外組織との連携

近年、大学の安全は日本全国の大学で情報共有、検討され、議論される時代です。七大学間での安全衛生管理担当者連絡協議会の発足を始めとし、各地区における担当者会議等が積極的に開催されています。その他、日本化学会や安全工学会における活動に加えて、大学等環境安全協議会や、研究実験施設・環境安全教育研究会（REHSE）など、研究会の発足も含め、様々な活動が行われています。また、国外においても韓国やアメリカなどの大学で同様の活動を行っており、これら国外での活動の情報も収集し、検討されています。大阪大学安全衛生管理部では、これらの会議等に積極的に参加し、大学での合理的な安全衛生管理を検討しています。

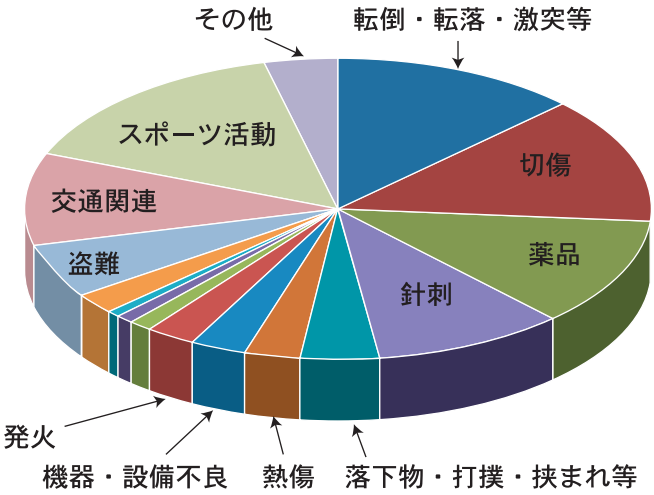
◆定期巡視システムの運営

大阪大学では安全活動として、各部署における自主的な管理を推進し、その管理状況を安全衛生管理部がチェックするという定期巡視システムを構築しています。この自主管理を行うための基準を統一するために、安全衛生管理チェックシートを導入しています。このチェックシートで文系、理系を問わずすべての部署が統一基準で自主管理が行えるように工夫されています。この基準に加えて各研究部署に特化した安全対策を盛り込み、各部署における自主管理活動としています。

定期巡視の様子

◆事故情報の収集とフィードバック

安全衛生管理部では学内で起きた事故事例を収集しています。収集した情報は、どこで、どのような状況で事故が起きるのかを解析することで、再発防止策を検討する材料とし、全学にフィードバックしています。また、この情報は統計・分析などの学術研究にも活用し、様々な視点から事故の分析を行う材料としています。大学で起きる事故には専門分野は違えど、共通の背景要因が潜んでいることが多く、多数の事故の解析を行うことで見えてくる要因があります。安全衛生管理部では今後も再発防止のために、事故情報の収集と解析を継続していきます。



全学の事故傾向

◆安全教育の推進

安全衛生管理部では、教育機関としての特性を生かすべく、安全・衛生に関する教育面にも力を入れています。大学内での安全活動の理念、方法を説明する講習会や、安全衛生集中講習会を春季、秋季の年２回開催し、期間中は１週間に渡り、化学物質の取扱、酸欠事故防止、高圧ガス取扱、レーザーなどの危険作業の安全講習に加え、メンタルヘルスやフィジカル面での健康管理、事故情報から解析される事故発生のメカニズムや、定期巡視の視点から見られる学内の安全管理について、など様々な講習を開催しています。心に響く講習会を目指し、いかに自分のこととして認識してもらうか、ということを念頭に今後も内容の充実を図ります。その他、学生対

引火実験をまじえた体感型安全教育

象の講義、不定期に各部局で行われる講習会等への講師派遣等も行っています。大学における安全をより合理的に、そして効率のいいものに昇華するためには構成員の安全意識の向上が不可欠と考えられます。そのための教育を様々な形で今後も実行していきます。

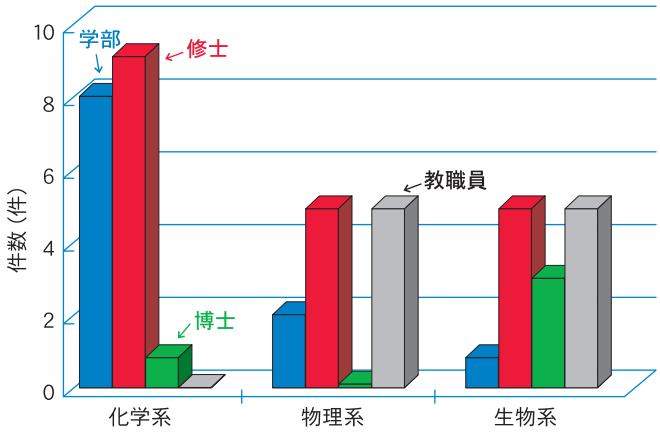
◆教育教材の開発

安全衛生管理部では教育に関する取り組みとして、安全テキスト、ビデオ（DVD）の作成を行っています。実際の事故事例を交えて、危険作業、その安全対策についての解説を行ったテキストに加え、“目で見る”危険行動、安全対策を実現するために、関係する部局と協力しながら、DVDを作成しています。また、同様に“目で見る”危険行動、安全対策に加え、危険を体感する、ということを目的として、安全講習会時には目前での引火実験などを行い、その場で危険をイメージしやすい工夫などを行っています。こうした教材は今後も開発を続けていきます。

安全衛生管理部で開発した安全教育教材

◆環境安全化学研究室

安全衛生管理部では管理、教育に加えて、「研究」としての活動を行う環境安全化学研究室を立ち上げています。学生・教職員に対する安全衛生教育、講習を通した大阪大学の安全風土の醸成を行うと共に、広く科学技術の安全に寄与する研究を行っています。化学的な根拠に基づいた安全教材の開発や、学内における事故の分析から、傾向を探り、再発防止策についての検証、そして、学内のみならず、日本、世界の大学内の事故に関する調査研究を行い、様々な分野での事故からの共通の要因を探り出すことで、より安全な研究・実験操作の提言、指導を行っています。



同じ理系でも化学、物理、生物系で傾向が異なることが分かります。物理や生物系では薬品を道具やツールのひとつとして使用する傾向があるため、薬品自体の有害性についての認識が不十分なのではないか？と考え、「非化学系のための化学講習会」の立案、実施等を行っています。

事故情報の解析例：薬品による事故の専攻による分類

◆防災訓練の実施

大阪大学では毎年、防災訓練を実施しています。訓練は、各地区の消防本部とも適宜、合同で企画・実施しています。例えば、平成20年度の訓練では、東海、近畿、及び四国の広い範囲で震度６弱の地震が発生した場合を想定し、避難訓練、災害対策本部設置訓練、初期消火訓練、応急救護訓練等を行いました。また消防本部の隊員の協力の下、はしご車救助訓練、放水訓練、応急救護所（エアーテント）設置訓練、トリアージ（治療を優先すべき患者の選別）訓練等も行っており、有事に際しての対策に努めています。

箕面市消防本部と共催で実施した防災訓練

◆AEDの設置

大阪大学では、学内における活動中に起こりえる心臓突然死に備えるため、近年、駅や空港などの公共施設でも設置が進んでいるAED（自動体外式除細動器）の導入を率先して行っています。学内主要箇所を始め、スポーツ活動を行う施設など、現在、各キャンパスに計70か所を超える場所に設置を行っています。同時にAEDの使用方法を含めた救命救急訓練の実施にも力を入れており、各消防本部の協力の下、救急救命体制の充実に努めています。

ＡＥＤの設置例

◆資格取得の推進

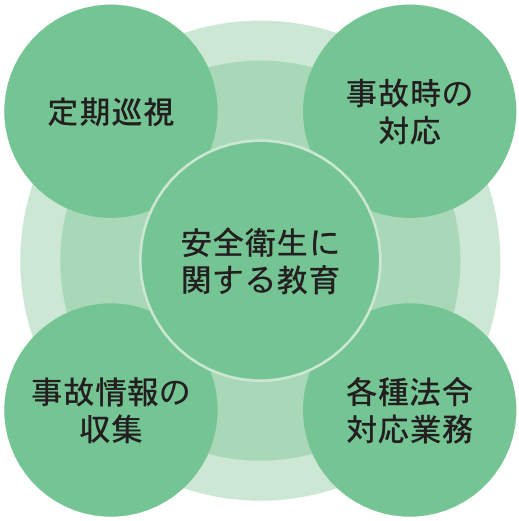
安全衛生管理部では、衛生管理者免許など、安全衛生に関する資格の取得を推進しています。国内には様々な危険作業に対する法規制があり、その作業を遂行するに当たって多くの資格があります。資格の取得はその危険作業を行える許可を得るだけでなく、根本として何が危険な作業なのか、ということを知ることができるため、安全意識の向上という教育面としても有効に働くものです。

◆その他、安全衛生管理部の業務

大学においても、薬品、高圧ガスの取扱いや、バイオハザード物質の取扱い、高圧容器の取扱いなど、特殊作業を行う場合、数多くの法規制が関係します。それら法令に関する情報管理や届出対応など様々な関連業務を行っています。

- 安全衛生ガイドラインの策定
- 各種マニュアルの作成
- 事業者の報告義務等の履行
- 事業場安全衛生委員会等の開催運営
- 各種法令対応管理：
  - 労働安全衛生法　関連機器・施設届出
  - 高圧ガス保安法　関連施設・機器類届出
  - その他安全衛生関連法規の対応、届出
- リスク対策、喫煙対策、流行性疾患対策
- 防災対策
- 核燃料・核原料の管理（核燃料物質管理室）
- 安全協議会の主催、参加、取りまとめ等

七大学安全衛生管理担当者連絡協議会
中四国地区大学安全衛生システム研究会
大学等環境安全協議会
日本化学会、安全工学会
研究実験施設・環境安全教育研究会等



大阪大学安全衛生管理部(D. A. S. H.)
http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/anzen/index.html

役員室だより

2010.4　Vol.35

大学の動き

経営協議会

平成21年度第4回経営協議会を3月26日(金)に、中之島センターで開催しました。学外委員9名、学内委員14名が出席し、2時間にわたり審議、意見交換が行われました。最後に3月末で6年間の任期が満了される委員の方々から、大阪大学に対する要望や委員在任中の感想などが述べられ、鷲田清一総長からお礼の言葉をお返ししました。委員のみなさま、6年間本当にありがとうございました。

なお、旧委員及び新委員は次の方々です。また、平成22年度経営協議会の開催日程は下記のとおりです。

◎新旧委員

(旧委員)

氏　名	職　名
鷲　田　清　一	総長
西　田　正　吾	理事・副学長（総合計画担当）
小　泉　潤　二	理事・副学長（教育・情報担当）
西　尾　章治郎	理事・副学長（研究・産学連携担当）
土　井　健　史	理事・副学長（評価担当）
門　田　守　人	理事・副学長（財務及び病院担当）
月　岡　英　人	理事・副学長（人事労務担当）
髙　杉　英　一	理事・副学長（広報・社学連携担当）
辻　　毅一郎	理事・副学長（国際交流担当）
中　尾　敏　充	法学研究科長
東　島　　清	理学研究科長
小　林　資　正	薬学研究科長
相　本　三　郎	蛋白質研究所長
林　　紀　夫	医学部附属病院長
〔学外委員〕	
猪　木　武　徳	国際日本文化研究センター所長
金　田　嘉　行	ソニー株式会社社友
鎌　倉　利　行	弁護士
河　田　悌　一	日本私立学校振興･共済事業団理事長、前関西大学学長
川　名　紀　美	ジャーナリスト
城　野　政　弘	福井工業大学学長
津　田　和　明	サントリーホールディングス株式会社社友
寺　田　千代乃	アートコーポレーション株式会社代表取締役社長
豊　島　久真男	(独)理化学研究所研究顧問
中　村　邦　夫	パナソニック株式会社代表取締役会長
野　村　正　朗	(財)りそなアジア・オセアニア財団理事長
堀　井　良　殷	(財)大阪21世紀協会理事長
森　　詳　介	関西電力株式会社取締役社長
山　西　弘　一	(独)医薬基盤研究所理事長

(新委員)

氏　名	職　名
鷲　田　清　一	総長
西　田　正　吾	理事・副学長（総合計画担当）
小　泉　潤　二	理事・副学長（教育・情報担当）
西　尾　章治郎	理事・副学長（研究・産学連携担当）
土　井　健　史	理事・副学長（評価担当）
門　田　守　人	理事・副学長（財務及び病院担当）
尾　山　眞之助	理事・副学長（人事労務担当）
髙　杉　英　一	理事・副学長（広報・社学連携担当）
辻　　毅一郎	理事・副学長（国際交流担当）
中　尾　敏　充	法学研究科長
馬　場　章　夫	工学研究科長
平　野　俊　夫	医学系研究科長
岸　本　忠　史	核物理研究センター長
福　澤　正　洋	医学部附属病院長
〔学外委員〕	
猪　木　武　徳	国際日本文化研究センター所長
大　竹　伸　一	西日本電信電話株式会社代表取締役社長
河　田　悌　一	日本私立学校振興･共済事業団理事長、前関西大学学長
川　名　紀　美	ジャーナリスト
小　林　栄　三	伊藤忠商事株式会社代表取締役会長
近　藤　純　子	東洋炭素株式会社代表取締役会長
城　野　政　弘	福井工業大学学長
角　　和　夫	阪急阪神ホールディングス株式会社代表取締役社長
中　村　邦　夫	パナソニック株式会社代表取締役会長
野　村　正　朗	(財)りそなアジア・オセアニア財団理事長
馬　場　明　道	兵庫医療大学副学長
堀　場　　厚	株式会社堀場製作所代表取締役会長兼社長
森　　詳　介	関西電力株式会社取締役社長
山　西　弘　一	(独)医薬基盤研究所理事長

◎開催日程

第１回	平成22年６月７日（月）	第３回	平成22年12月６日（月）
第２回	平成22年９月24日（金）	第４回	平成23年３月18日（金）

２０１０年の主な取組事項（「大阪大学活動方針２０１０」から）

□大阪大学のリソースを生かした言語教育と国際教育の実現のため教育改革を推進する。

□大阪大学独自の教養教育と高度教養教育の構築に向け、また大学院高度副プログラムの充実と副専攻制度の新設に向けて取り組みを進める。

□グローバル30プロジェクトによる英語コースの開設を契機とした英語による授業科目、短期留学受入れプログラムならびに短期学生派遣プログラムの充実化を全学的に進める。

□科学研究費補助金、大型プロジェクト研究費等の獲得をめざした企画強化と全学的な支援体制の確立、および研究力のさらなる向上に資する支援組織の強化を図る。

□テクノアライアンス棟の完成を期した産学連携活動を強化する。とくに産学連携活動の組織体制の一層の強化を図ると同時に、協働研究所構想等の新たな企画の具体化を推進する。

□中之島センターの将来構想をまとめるとともに、21世紀懐徳堂の「21世紀の懐徳堂プロジェクト」への参加を支援する。

□部局の広報と大学の広報や室との連携を強化し、大学活動の情報を収集するとともに、集積した情報を外部に迅速に発信する。また、大学構成員への直接的で迅速な広報を行う。

□海外教育研究センターをハブとした重点的交流推進校のネットワーク構築に努め、それに基づく学生・教職員交流の促進を図る。

□財務基盤の安定化のため、平成21年度より開始した「大阪大学未来基金（大学）」の拡充を図る。さらに、大阪大学に自らの寄付金により後進を育てるという文化を定着させる。

□キャリア形成支援等による女性研究者の活躍促進、および障害者雇用推進のための職域拡大等に努め、より一層多様な人材の活用を推進する。

□特例職員制度を導入し、法人化後における新たな業務量増加等への対応を図る。

□標準化・IT化・一元化をベースに定型業務の効率化を図ることにより、部局および本部において重要施策や企画業務に投入しうる人的・財政的余力を生み出し、大阪大学の教育・研究・社会貢献活動の格段のレベルアップを可能にする事務体制と業務手法を確立する。

□環境・省エネルギーに配慮したキャンパス整備を推進するとともに、外国人研究員宿舎やテクノアライアンス棟、免疫学フロンティア研究センター棟などの整備を通じて、大阪大学の教育・研究・社会貢献の活動のさらなる強化をめざす。

□部局の達成状況評価等は、部局の活動状況の点検・評価に役立てるとともに、大学執行部との対話のツールとして活用し、大学運営に活かす。

□リスク情報を一元管理するとともに、蓄積した事例を基にリスク対応のための啓発活動を行う。また、キャンパス内ハラスメントの防止対策と相談窓口の充実を図る。

□最新の情報通信技術の活用により、先進的な情報システムを整備するとともに、より高度の情報セキュリティを確保する。

4月からの新体制

総長補佐　7名

大竹文雄（社・教授）　木下タロウ（免・教授）　杉本孝司（言・教授）　中田一博（接・教授）
馬場章夫（工・教授）　東島清（理・教授）　福澤正洋（医・教授）

総合計画室　10名

○西田正吾（理事・副学長）　中村春木（蛋・教授）
中岡成文（文・教授）　三成賢次（法・教授）
滝澤温彦（理・教授）　猿渡勝次（企画部長）
井上克郎（情・教授）　猿渡政範（財務部長）
天野敦雄（歯・教授）　西川和慶（施設部長）

教育・情報室　12名

○小泉潤二（理事・副学長）　竹村治雄（サ・教授）
三原健一（言・教授）　平沢安政（人・教授）
藤田喜久雄（工・教授）　菊野亨（情・教授）
宮崎純一（医・教授）　藤井勝博（情報推進部長）
小林傳司（CSCD・教授）　尾藤広幸（学生部長）
工藤眞由美（文・教授）　細戸康治（図・事務部長）

研究・産学連携室　10名

○西尾章治郎（理事・副学長）　正城敏博（先・教授）
大坊郁夫（人・教授）　星野俊也（国・教授）
池道彦（工・教授）　米田悦啓（生・教授）
北岡良雄（基・教授）　鈴木達也（研究推進部長）
萩行正憲（レ・教授）　林正一郎（不正使用防止計画推進室長）

評価室　10名

○土井健史（理事・副学長）　村上伸也（歯・教授）
川端亮（人・教授）　東野輝夫（情・教授）
水谷規男（司法・教授）　八木康史（産・教授）
青島貞人（理・教授）　猿渡勝次（企画部長）
山中伸介（工・教授）　高田則明（評価課長）

財務室　9名

○門田守人（理事・副学長）　吉川秀樹（医・教授）
高木信二（経・教授）　狩野裕（基・教授）
尾崎雅則（工・教授）　山根聡（世・教授）
松浦善治（微・教授）　猿渡政範（財務部長）
中谷和彦（産・教授）

人事労務室　10名

○尾山眞之助（理事・副学長）　小川一夫（社・教授）
大屋幸輔（経・教授）　南埜宜俊（工・教授）
棟居快行（司法・教授）　大野ゆう子（医・教授）
岡村康行（基・教授）　後藤宏平（総務部長）
金倉譲（医・教授）　綿谷茂一（人事課長）

広報・社学連携室　10名

○髙杉英一（理事・副学長）　永田靖（文・教授）
青江秀史（司法・教授）　望月正人（工・教授）
小川哲生（理・教授）　猿渡勝次（企画部長）
宇野公之（薬・教授）　尾藤広幸（学生部長）
橋爪節也（博・教授）　喜田一也（広報・社学連携事務室長）

国際交流室　8名

○辻毅一郎（理事・副学長）　仁平卓也（生物・教授）
山内直人（国・教授）　鈴木睦（言・教授）
河原源太（基・教授）　菊野亨（情・教授）
近藤滋（生・教授）　亀岡雄（国際部長）

○印は室長

各室の検討状況

総合計画室

第2期中期目標・中期計画

文部科学大臣から3月29日に本学の中期目標が提示され、それに基づく中期計画を文部科学省へ提出し、3月31日に文部科学大臣の認可を受けました（大阪大学ホームページに掲載　http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho）。

平成22年度計画

平成22年度の本学年度計画については、各部局の年度計画を踏まえて、総合計画室の下に設置した平成22年度計画作成ワーキングが中心となってとりまとめ、3月31日に文部科学省へ提出しました（大阪大学ホームページに掲載　http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/nendo.html）。

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、3月の役員会で次の事項が承認されました。

・微生物病研究所附属生体応答遺伝子解析センターの設置（平成22年4月1日）※平成27年3月31日まで
・留学生センターの改組【「留学生センター」→「国際教育交流センター」】（平成22年4月1日）
・コミュニケーションデザイン・センターの改組（平成22年4月1日）
・金融・保険教育研究センターの設置期間の延長（平成23年4月1日）※平成28年3月31日まで
・知的財産センターの設置（平成22年4月1日）※平成28年3月31日まで

平成２１年度定額配分の実績報告

施設マネジメント委員会では定額配分（約4億5千万円）により予算を確保し、計画的・効率的な教育研究環境の改善に取り組んでいます。

平成21年度実施項目

〔安全・安心に資するもの〕
（医保）校舎外壁タイル注入補修・目地設置工事　他

〔学生・教職員サービス等に資するもの〕
（核物）共同利用研究員宿泊所全面改修工事　他

〔バリアフリー対策〕
（理）E棟トイレ改修(身障者対応等)工事
（電顕）トイレ改修(身障者対応等)工事
他

〔緊急営繕等〕
排水管補修、漏水補修等緊急修繕

平成22年度については、各部局からの全要望事項について施設キャラバンでヒアリングと現地調査を行った上①老朽化の度合い、②教育・研究活動への影響、③安全安心確保の評価項目を3段階評価し、その結果を基に総合評価を行い、基本的に評価の高い事項から順に実施する予定です。

室員等の交替

4月1日付けで

・室員

青　江　秀　史（高等司法）	→	中　岡　成　文（文）
佐古田　三　郎（医）	→	天　野　敦　雄（歯）
堀　井　俊　宏（微）	→	中　村　春　木（蛋）

・施設マネジメント委員会委員長

堀　井　俊　宏（微）　→　三　成　賢　次（法）

教育・情報室

室員の変更

本室員であった関昭裕学生部長の4月1日付転出に伴い、尾藤広幸新学生部長が室員に加わりました。教育・情報室ではこの他に室員の変更はありません。

卒業式と入学式の実施

平成22年3月23日(火)に平成21年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式、4月5日(月)に平成22年度入学式が、それぞれ大阪市中央区の大阪城ホールで執り行われました。卒業式・大学院学位記授与式では学部生3,435名が卒業し、修士学位が2,092名、法務博士（専門職）が88名、博士学位が571名に授与されました。入学式では学部学生3,446名、大学院生3,037名の入学を祝いました。当日は学生の家族を含めて、それぞれ1万人近くが一堂に会する盛大な式典となり、大阪大学としての一体感を確認することになりました。卒業式・入学式の詳細については、本誌の2、42ページに掲載されています。

入学試験

平成22年2月25日－26日に前期日程試験、3月12日－14日に後期日程試験を実施し、3月8日と22日に合格者の発表を行いました。大阪大学全体での志願者は13,994名で、昨年に続き全国立大学中で最多となりました。新型インフルエンザに対応するための追試験の準備を含め、入試にともなう多大な業務に従事された教職員の皆様に感謝します。

学際融合教育支援システムの運用開始

平成22年4月から、学際融合教育支援システムの運用を開始しました。本システムは、特別経費を受けた学際融合教育研究センターにより開発されたものです。学生向けとしては、大学院高度副プログラム等の学際融合教育プログラムの中から、学びたい「知」や将来の進路等の希望に合わせて受けるべき教育プログラム・授業科目をガイドするとともに、学生の教育プログラム受講申請を可能とする機能を持ちます（授業科目の履修登録は、従前どおりKOANで行います。）。また、教職員向けとしては、大阪大学及び他大学の研究科の授業科目の中から、適切な授業科目により新たな教育プログラムを開発することを支援する機能を持ちます。学生・教職員の方々が本システムにアクセスし、有効に活用されることを望みます。

URL：https://idiscp.osaka-u.ac.jp/gakusai/
（学生・教職員ともに、阪大個人IDによるログインアクセスとなります。）

学生関係施設等の整備・充実

本学の学生生活環境の向上を図るため、平成21年度大学基盤推進経費を投入し、課外活動施設や学寮等の補修・改修及び備品の更新、並びに学生への貸出物品の整備等を実施しました。詳細については、本誌の41ページに掲載しています。

研究・産学連携室

研究・産学連携室は、西尾章治郎理事・副学長を室長とし、大坊郁夫教授、池道彦教授（＊）、米田悦啓教授、北岡良雄教授、萩行正憲教授、星野俊也教授（＊）、正城敏博教授、鈴木達也研究推進部長、林正一郎不正使用防止計画推進室長（＊）を室員とする新しい体制となりました（＊は新任。平成22年4月～）。平成22年度は、下記項目を中心に研究と産学連携の一層の活性化を図ります。構成員各位のご協力をお願いします。

大阪大学グラウンドプラン、大阪大学活動方針２０１０に掲げる研究推進および産学連携に関する諸事項の遂行

科学研究費補助金、大型プロジェクト研究費等の競争的資金獲得増を目指した企画強化及び支援体制整備並びに産学連携活動の組織体制を一層強化します。

各種大型研究プロジェクトによる拠点形成等の促進と強化

平成21年度に引き続き、世界トップレベル研究拠点（WPI）プログラム、先端融合領域イノベーション創出拠点事業、グローバルCOEプログラム、最先端研究開発支援プログラム等の推進をはかるとともに、本学の研究者が世界をリードする卓越した研究活動に集中できるように組織的な事務・技術支援体制を強化して参ります。

戦略的な受託研究・共同研究への対応による外部資金の拡大

共同研究講座制度の活用、技術交流会の活性化、企業との連携協定による産学連携研究の促進、産業界がキャンパス内に大学と連携して構築する先進的な産学連携活動の拠点「大阪大学テクノアライアンス棟（平成23年4月供用開始予定）」の基本コンセプトの確立及び管理運営体制の構築を進めて参ります。

部局横断型研究の企画、大型競争的資金獲得の推進

新たに「研究企画ワーキング・グループ支援プログラム」により、部局横断的、研究分野横断的な研究を推進するとともに、本学の幅広い研究分野・特色を活かした基礎的・基盤的研究を集中的に推進する「最先端ときめき研究推進事業」に取り組みます。

産学官連携の推進

平成20年4月に設置した産学連携推進本部の活動を核とし、全学的な産業界との多様な連携を推進し、社会と世界の発展に寄与するイノベーション創出に強力に取り組みます。また、大阪駅北地区の再開発事業、彩都、関西バイオクラスターをはじめとする地域との連携を強化することにより、「地域に生きる」をモットーに地元密着型、地域産業振興に資する地元ならではの特色ある産学連携活動を展開して参ります。さらに、グローバルな視点で、本学の海外教育研究センターを核として国際的な産学連携活動にも積極的に取り組んで参ります。

教育研究高度化のための支援体制整備事業

教育研究高度化のための支援体制の構築及び人材育成の観点から支援者のキャリアパスに配慮した雇用・育成方策の検討を行います。また、大型教育研究プロジェクト支援室に新たに統括マネージャーとして池田雅夫特任教授に着任いただき、全学的な教育研究プロジェクトの支援及び新規の大型教育研究プロジェクトの獲得支援を進めます。

評価室

第２期中期目標期間の始まりにあたって

平成22年度から国立大学法人の第２期中期目標期間が始まりました。

しかしながら、国立大学法人評価については、今年度は、第１期中期目標期間（平成16～21年度）の終了時評価（確定評価）を受ける必要があるため、引き続き全学的なご協力をお願いします。

なお、第２期中期目標期間の評価の観点等としては、第１期中期目標期間と同様に基本的には以下の視点等が重視されています。

Ⅰ　法人化を契機としていかに各法人の改革と新生が図られたかが重要であり、具体的な視点は次のとおりです。

①個性豊かな大学、国際的にも存在感ある大学を目指した教育研究活動等が積極的に展開されていること

②学長のリーダーシップの下、機動的・戦略的な運営が実現されていること

③国民や社会に対する説明責任を重視した社会に開かれた大学運営が行われていること

Ⅱ　教育研究の評価の視点は、次のとおりです。

①教育の質的な向上を図るとともに、教育の受け手である学生の立場に立った教育機能の強化という視点

②研究においては、学術的な視点とともに、社会、経済、文化への貢献という視点

大阪大学内の組織評価は、第１期に引き続き実施をして参ります。また、第２期からは、より部局の実状を踏まえた組織評価としていきたいと考えています。

評価室長　土　井　健　史

平成２２年度からの体制

「評価室」は、次のメンバーで運営されます。

土井　健史　理事　評価室長	
川端　　亮　教授（人間科学研究科）	八木　康史　教授（産業科学研究所）
水谷　規男　教授（高等司法研究科）	東野　輝夫　教授（データ管理分析室長・情報科学研究科）
青島　貞人　教授（理学研究科）	猿渡　勝次　企画部長（本部事務機構）
山中　伸介　教授（工学研究科）	髙田　則明　企画部評価課長（本部事務機構）
村上　伸也　教授（歯学研究科）	

大学機関別認証評価結果の公表

平成21年度に受審した大学機関別認証評価の結果が公表され、**「大阪大学は、大学設置基準をはじめ関係法令に適合し、（独）大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている。」**との認定を受けました。評価結果は、次頁のとおりです。

これに伴い、同機構より本学に対して、適格認定証が交付されました。

評価結果の全文及び自己評価書は、本学ホームページに掲載しています。（HPアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/hyouka_02）

適格認定証

認定マーク

Ⅰ　認証評価結果

大阪大学は、大学設置基準をはじめ関係法令に適合し、大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている。

主な優れた点として、次のことが挙げられる。

○大阪外国語大学との統合を活かして、人間科学研究科グローバル人間学専攻、言語文化研究科言語社会専攻などを開設して、国際化に対応した教育・研究を推進している。

○WebCTを利用した自習システムのほか、図書館にコンピュータ室、グループ学習室やラーニング・コモンズなどを整備して、時間外の学習を支援している。

○高度教養教育を行うコミュニケーションデザイン科目やダブル・メジャーを目指した高度副プログラムを開設し、大学院教育の実質化に努めている。

○文部科学省教育GPにおいて平成20年度に2件、文部科学省特色GPにおいて平成16年度に1件、文部科学省現代GPにおいて平成17年度に1件、平成18年度に1件、平成19年度に1件、文部科学省大学院GPにおいて平成19年度に6件、平成20年度に4件、平成21年度に2件、文部科学省「「魅力ある大学院教育」イニシアティブ」において平成17年度に10件、平成18年度に3件、文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」において平成19年度に1件、文部科学省「先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム」において平成18年度に1件、文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム（戦略的国際連携支援）」において平成17年度に1件、文部科学省「専門職大学院等教育推進プログラム」において平成19年度に1件の取組が採択されており、特色ある取組を展開している。

○文部科学省グローバルCOEプログラムにおいて平成19年度に7件、平成20年度に4件、平成21年度に1件の取組が採択されており、特色ある取組を展開している。

○大学独自の奨学金制度「教養教育奨学金」を設けて、優秀な学生の経済的支援を実施している。

○文部科学省学生支援GPに平成19年度に採択された「市民社会におけるリーダーシップ養成支援－「阪大スタイル」育成プログラムの開発－」では、大学祭で研修に参加した学生が中心となって企画したイベントや3泊4日の合宿研修を実施し、「市民社会でのリーダー」養成を目指している。

○教養教育において優れた授業を実践した教員などを表彰する制度を設け、表彰された教員の模擬授業を公開し、授業方法を本にまとめてFDの教材にするなど、教育の質の向上に努めている。

○大学の公式ウェブサイトには、基本的な情報がわかりやすく整理されており、求める情報へのアクセスが容易である。

○評価室で自己評価を適切に実施し、大学として更なる改善に向けて必要な事項を的確に把握している。

主な改善を要する点として、次のことが挙げられる。

○学士課程の1つの学部の3年次編入及び大学院課程の一部の研究科においては、入学定員超過率が高い、又は入学定員充足率が低い。

財務室

平成２１年度予算補正（第２次）

財務室において策定した平成21年度予算補正（第2次）案が、2月22日の役員会で承認されました。

その概要は、補正予算第1次の収入見込額に比して、約5億円の減収となることなどに対して、補正を行ったものであります。

平成２２年度予算について

国立大学法人大阪大学予算編成方針案、平成22年度収入支出予算案が、2月22日の役員会で承認されました。

予算編成方針については、第二期中期目標期間における学内の予算の在り方等に係る基本方針を示しているものであり、その方針に基づいて収入支出予算を作成しています。

国立大学法人大阪大学予算編成方針

国立大学法人大阪大学（以下「本学」という。）の使命は、「地域に生き世界に伸びる」というモットーのもと、ハイレベルな研究、専門性の高い教育を実施するとともに、地域、国際的な文化機関としての役割を果たし、また、社会から真に求められる幅広い人材を育成するなど分野を問わず着実に教育・研究を遂行していくことにある。

本学の予算は、これらの教育研究等の活動を確実にし、かつ、更なる挑戦的な発展のために資するものであり、各部局等に配分・執行されるものであっても、大阪大学全体としての資源投資であることを構成員が理解・認識した上で編成されるものである。

一方、国から措置される運営費交付金は、第一期中期目標期間に引き続き、第二期中期目標期間も厳しい状況であり、より効果・効率的な予算配分や経費節減等の努力が求められている。

第二期中期目標期間における予算の編成を行うに当たり、限りある財源の中で、中期目標、中期計画及び大阪大学活動方針等（以下「中期目標等」という。）を確実に実現し、阪大スタイルの確立を期すため、以下の予算編成方針を定める。

1．予算編成理念

（1）大阪大学の教育研究等活動の更なる向上に資する予算とする。
（2）予算編成に当たっては、中期目標等を十分踏まえた立体的なものとする。
（3）予算の効率的な執行、各事業の個性ある発展を促す観点から、その執行状況について検証し、その結果を可能な限り次年度予算へ適切に反映させる予算を目指す。
（4）予算区分を明確にし、教職員が理解しやすい予算とする。

2．具体的な方針

（1）本学の教育研究等活動の財源としては、①運営費交付金、②自己収入（附属病院収入を除く学納金等）、③附属病院収入、④競争的資金などの外部資金であるが、それぞれ運営費交付金及び自己収入は本学の維持・運営、附属病院収入は各附属病院の一般診療の実施、競争的資金などの外部資金は本学の重要プロジェクトの実施、間接経費は本学全体の戦略的な事業の実施及び部局の運営のための予算とする。
（2）運営費交付金のうち特別経費で要求する事業は新たな教育研究事業を実施する上で、①国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実、②高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実、③大学の特性を生かした多様な学術機能の充実、④産学連携機能の充実に向けた基礎・基盤的な事業であり、学内予算で措置する事業及び競争的資金などの外部資金で措置する事業とを明確に区分した予算とする。
（3）本学の予算は、収入予算と支出予算とする。
収入予算は、①運営費交付金収入、②授業料、入学料及び検定料収入、③附属病院収入、④産学連携等研究収入などに区分し、支出予算は①人件費、②物件費、③産学連携等研究費などに区分する。
（4）支出予算のうち、人件費については、常勤教職員に係る「役員人件費」、「教員人件費」、「職員人件費」、「退職手当」に大別し、物件費については、教育研究等を行う上での部局基盤的な経費として、各部局固有の教育研究等の実施に必要な「管理運営経費」、教員の基礎・基盤的な教育研究の実施に必要な「教育研究基盤経費」、附属病院の一般診療に係る「診療経費」及び本学の重要プロジェクトの推進の基礎・基盤的な「概算要求事項経費」、教育研究等のさらなる発展等のために必要な「戦略的経費等」などに大別した予算とする。

(5) 戦略的経費等については、次のとおりその目的を明確にし、各々の目的に該当する事業に対して充当する予算とする。

①大学基盤推進経費
大阪大学の教育研究等の機能維持や向上のためあるいは新事業の導入を目指して、総長自らの考えに基づき機動的に措置される経費。

②教育研究等重点推進経費
大阪大学の将来の方向性を見据えた上で、本学の教育研究等の発展に寄与する全学的・部局横断的な事業、あるいは単独部局であっても将来の新展開を目指した事業に対して措置する経費。

③全学強化経費
大阪大学の教育研究等の機能強化や発展に必須な全学的な事業であり、大学運営組織の各室又は全学委員会等が企画・統括するものに充当する経費。

④全学維持経費
大阪大学の教育研究等の根幹において、全学共通の運営や教育研究等の維持に経常的に必要なものに充当する経費。

⑤法人本部等経費
各室等の諸活動や運営に必要なものに充当する経費。

3．毎事業年度の予算配分基本方針は、別途定める。

平成22年度　収入支出予算

（単位：千円）

区　　分	予　算　額	備　　考
収　入		
運営費交付金	49,891,496	
授業料、入学料及び検定料収入	13,343,204	
附属病院収入	29,995,203	
雑収入	1,083,772	
計	94,313,675	
寄附金収入	3,597,546	
産学連携等研究収入	23,060,637	
版権及特許権等収入	65,387	
計	26,723,570	
施設整備費補助金	7,599,199	
国立大学財務・経営センター施設費交付金	122,000	
長期借入金	1,419,130	
計	9,140,329	
合　　計	130,177,574	
支　出		
人件費	46,954,210	
役員人件費	216,981	
教員人件費	28,537,940	
職員人件費	14,408,858	
退職手当	3,790,431	
物件費	49,502,918	
管理運営経費	8,014,994	
教育研究基盤経費	6,911,301	
診療経費	18,407,777	
事項指定経費	541,271	
個別収入対応経費	1,408,537	
概算要求事項経費	10,475,636	
戦略的経費等	3,743,402	
計	96,457,128	
寄附金支出	3,567,546	
産学連携等研究費	20,947,184	
版権及特許権等経費	65,387	
計	24,580,117	
大型特別機械整備費	150,000	
病院特別医療機械整備費	373,960	
施設整備関係経費	8,616,369	
計	9,140,329	
合　　計	130,177,574	

平成２２年度教育研究等重点推進経費及び全学強化経費の執行計画について

財務室では、平成22年度教育研究等重点推進経費及び新たな区分としての全学強化経費について学内公募を行い、申請のあった事業に対して、書類審査、ヒアリング等を経て、執行計画案が3月24日の役員会で承認されました。

教育研究等重点推進経費の採択事業の詳細は以下のとおりです。

部　局　名　等	事　　項　　名
附属図書館	開館サービス充実による主体的な「学び」環境の整備
附属図書館	学生用図書の体系的・継続的な整備経費
医学系研究科（医学科）	β／γ放射線測定システム
工学研究科	フォトニクスｅラーニングコース構築
工学研究科	3次元スキャナー装置の導入による創造性教育支援の拡張
工学研究科	サステイナビリティ学エクステンションの実施
工学研究科	新規元素分析システムへの更新
基礎工学研究科	基礎工学部国際棟（シグマホール）改修に関連するAV設備の整備
微生物病研究所	SPF動物実験飼育用給排気システム一式
産業科学研究所	コバルト60密封RI線源の更新
蛋白質研究所	生体超分子複合体構造解析のための実験室系X線回折装置の最高性能化
接合科学研究所	高輝度X線透過型溶接接合機構4次元可視化システム一式
サイバーメディアセンター	総合情報通信システム（ODINS）推進費
核物理研究センター	E949検出器輸送据付経費
レーザーエネルギー学研究センター	ヘリウム回収配管敷設工事
環境安全研究管理センター	大阪大学化学物質管理支援システム（OCCS Ⅱ、OGCS）に係る管理運営経費
サスティナビリティ・デザイン・センター	大阪大学環境イノベーション教育研究推進事業
大学教育実践センター	新型授業開発プロジェクト及び基礎セミナー拡充経費
免疫学フロンティア研究センター	免疫イメージング技術開発における生体内の免疫反応可視化のための設備
医学部附属病院	医学部附属病院管理用設備
歯学部附属病院	看護体制並びに教育支援体制の充実に係る経費
教育・情報室	入試広報の充実による志願者確保策と教育環境の向上
研究・産学連携室	競争的資金獲得等支援経費
広報・社学連携室	対話プログラム「ラボカフェ」の実施
産学連携推進本部	バイオメディクス（株）を相手とする知的財産の裁判に必要な弁護士費用等
安全衛生管理部、工学研究科、理学研究科	核燃料物質の円滑管理のための廃棄物貯蔵庫の整備
安全衛生管理部	衛生管理者免許取得支援経費
本部事務機構（学生部）	学生寮住環境改善経費（3－2）
本部事務機構（学生部）	吹田地区陸上競技場・体育管理棟設備の更新
本部事務機構（研究推進部、国際部等）	研究支援等に係る人件費
執行計画額	合計　812,596千円

財務室によるヒアリング風景

全学強化経費の採択事業の詳細は以下のとおりです。

部　局　名　等	事　　項　　名
附属図書館	電子的情報基盤資料経費
教育・情報室	平成22年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント研修（教育・情報室主催）
国際交流室	3キャンパスにおける外国人留学生・外国人研究者対象支援サービスの向上、並びに受入教職員の負担軽減を図るためのサービスシステムの改善
情報基盤推進本部	全学IT認証基盤整備・拡充
情報基盤推進本部	学務情報システムの整備
情報基盤推進本部	全学規模e-Learning（教育支援情報基盤）環境整備事業Ⅱ
情報基盤推進本部、事務改革推進本部	事務基幹系システム維持経費（旅費・謝金システム新規導入経費含む）
海外拠点本部	海外拠点本部運営経費
研究倫理審査委員会	研究倫理審査委員会実施経費
多様な人材活用推進委員会	大阪大学「研究支援員制度」の雇用経費について
施設マネジメント委員会	キャンパスマスタープランに基づくリーディングプロジェクト
施設マネジメント委員会	施設情報管理システム保守費
不正使用防止計画推進室	競争的資金等ハンドブック作成費
執行計画額	合計　911,559千円

第2回教員向け財務関係説明会について

平成22年3月18日(木)にコンベンションセンターにおいて「第2回教員向け財務関係説明会」を開催しました。

本説明会は、次期中期目標期間における学内予算の在り方などを教員に広く理解してもらうことを目的としたものであり、教員を対象としたものとして、昨年9月に開催した教員向け財務関係説明会に引き続き、第2回目として実施しました。

当日は、130名を超える出席者があり、①平成22年度運営費交付金について、②次期中期目標期間における学内予算の在り方及び予算の編成方針について、平川財務課長、長谷財務室員から説明が行われた後、活発な意見交換が行われ、門田理事の閉会の挨拶により説明会が終了しました。

また、説明会後に実施したアンケートでは、約6割の教員から今後も開催を希望する旨の意見があり、今後においても教員向け説明会を実施する方向で検討していく予定です。

第2回教員向け財務関係説明会参加者

説明をする長谷財務室員

人事労務室

特例看護職員に係る特別賞与に関する改正

本学では、平成18年度から特例看護職員制度（多様なライフスタイルに対応するため、退職時に退職手当を支給せず、その代わりに毎年の賞与の支給時期に特別賞与を支給する任期の定めのない常勤看護職員の制度）を導入しています。

このたび、導入後丸4年が経過し、多くの者がこの制度の適用を受けていること等から、特別賞与額を職務の級に応じて段階的に支給するとともに、大学が特に必要と認めた者については、退職時に退職手当を支給する職員（退職手当規程の適用を受けることとなります。）に移行することができるよう、関係規程を改正いたしました。（移行については、試行的に実施。）

これにより、多様なライフスタイルにより対応できるものと考えております。

業務効率化のための電動アシスト付自転車を導入

本部事務機構においては、学内移動に費やす時間（コスト）の業務効率を目的として、電動アシスト付自転車を20台導入しました。

本部事務機構所属の職員は、各部局担当者との打ち合わせや施設等の見廻り等で広大なキャンパス内を移動することが多くなりがちなため、今回の導入により、「移動時間の短縮」、「環境に優しい」、「健康にも良い」と、“一石三鳥”の効果が見込まれます。

特例職員採用試験（第１回）の準備状況等

既にお知らせしている（2009年12月号参照）とおり、本学では、今年度から特例職員制度（退職時に退職手当を支給せず、その代わりに毎年の賞与の支給時期に特別賞与を支給する任期の定めのない常勤職員の制度）を導入いたします。

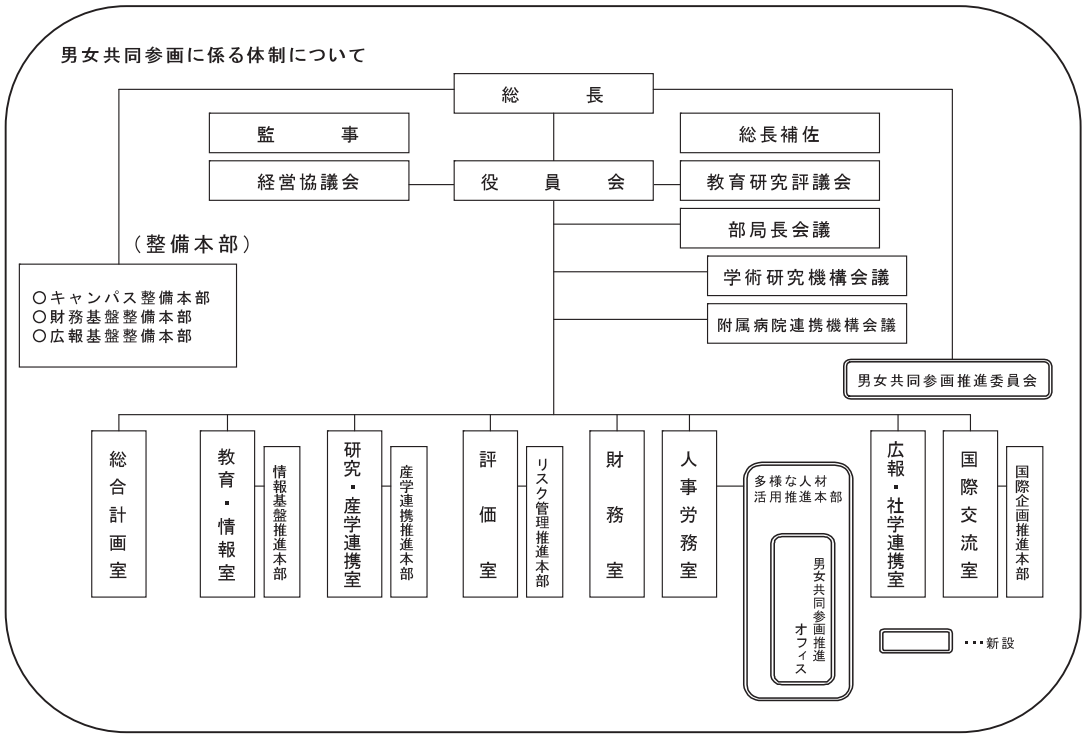
このたび、その採用試験（第1回）を4月17日(土)に実施することとし、その要項を学内に公表したところ、多くの応募がありました。今後、選考の上、10月1日から採用する予定です。

男女共同参画推進体制について

本学では、これまで男女共同参画の推進という観点から、学内環境の整備、啓発活動、支援相談等のシステムの構築を進めてきましたが、今後更なる強化を図るため、新たに3つの組織をたちあげました。

まず、総長を委員長とし、部局長会議構成員が委員を務める「男女共同参画推進委員会」を平成22年1月に設置することにより、男女共同参画推進のための施策をダイレクトに学内に伝達することができるようになりました。また、平成22年4月から「多様な人材活用推進委員会」の後継組織として人事労務室長を本部長とし、各室から選出された教員等で構成する「多様な人材活用推進本部」、さらに「女性研究者デザイン・キャリアラボ」の後継組織として、「男女共同参画推進オフィス」を設置しました。これら3つの組織を機能させ、多様な人材の活用を通じて、これまで以上に、本学の教育・研究の質を一層向上させることを目指します。

事務担当は、**総務部 多様な人材活用推進支援室**が担当します。



広報・社学連携室

平成２２年度の活動について

新たに第２期中期目標・中期計画期間のスタートとなる本年、下記の主要な事項を中心に、21世紀懐徳堂の活動の推進や社学連携活動の拠点としての中之島センターの在り方を検討し、また、大阪大学のさらなるブランド力の強化に向け、様々な情報発信体制を強化していきたいと考えています。

(1) 21世紀懐徳堂の機能強化
- 学内の各部局において実施されている社学連携活動の情報を積極的に収集し、21世紀懐徳堂が、大阪大学のポータルとして機能するよう連携協力を強化する。

(2) 中之島センター
- 社学連携の拠点として、21世紀懐徳堂事業の活動の場としての積極的な活用につとめ、また、大阪市等との連携プロジェクトをさらに推進し、中之島地区の活性化の一役を担う。
- 中之島センターの在り方、有効活用策について、キャンパスイノベーションセンターの状況を見据えつつ、将来計画の検討を進める。

(3) 社学連携事業の推進
- 関連地域、自治体、同窓会などの様々なセクターとの連携をさらに強化する。

(4) 広報ネットワークの充実
- 既設の「広報ネットワーク」の活性化をはかり、広報強化策と部局広報とのネットワーク強化による情報の集約化と効果的な発信の方策を検討する。

(5) ホームページの更なる充実
- 情報発信者の利便性向上に向けてホームページのシステム内における入力環境の整備を目指す。

第５回ホームカミングデイの開催について

平成22年５月１日(土)に第５回ホームカミングデイを開催します。

今年は、本学法学部を卒業され、現在株式会社三井住友銀行顧問であり、また（財）大阪大学後援会の理事長でもある西川善文様に、在学中の思い出なども交えてお話いただく講演会を開催する予定です。

当日は、各学部の同窓会もいくつか企画されています。詳細は、ホームページ等でお知らせする予定です。

昨年のホームカミングデイの様子

阪大ニューズレター　No．４７を刊行

阪大ニューズレターNo．47を刊行しました。

今回の総長カフェは21世紀懐徳堂ライブの名前のとおり、大阪北天満フェニックスホールで行われた、石黒　浩教授（基礎工学研究科）とのライブ対談を掲載しています。

「人とかかわり、考え続けて生きる。」ことについて、それぞれのお考えが垣間見えます。

また、留学生と留学生に関わる方々から、生の声をインタビューした特集が掲載されています。大阪大学の取り組みや今後の方向、様々なかたちで来日した留学生の生活、留学生に関わる日本人学生の感想など、みなさんに本音で語っていただきました。普段では少し離れて感じる事柄ですが、この記事を読んでいただくと少し身近に感じていただけるのではないでしょうか。

国際交流室

グローバル30：平成21年度の成果

グローバル30（G30と略記）事業の第1年目が早くも終わろうとしています。ここでは、平成21年度の成果の概略を紹介します。

英語コースの開設準備

学部英語コース「化学・生物学複合メジャーコース」、大学院英語コース「統合理学特別コース」および「国際物理特別コース」は平成22年10月、学部英語コース「人間科学コース」については平成23年4月の開設へ向けて着々と準備が進められています。
学部英語コースの実施上、様々な課題があり、一つ一つクリアしてゆかなければなりませんが、特にインターナショナルカレッジ機構については教育・情報室が中心となり、専門的立場からその構想の検討を進めています。

「国際教育交流センター」の設置

G30事業により留学生センターは発展的に改組され、4月から、大学の国際教育交流に関する企画運営に参画し、留学生の受入と本学学生の海外留学促進に寄与することを目的とした「国際教育交流センター」となりました。センターには、企画・調査、日本語教育研究、交流アドバイジング研究、短期留学プログラム開発研究の各チームが置かれ、従来は国際部学生交流推進課にあった「サポートオフィス」がセンターに併設となりました。

センターは、今後、G30学部英語コース学生に対する柔軟で効果的な日本語教育を行い、全学レベル及び部局ごとの短期受入・派遣プログラムの実施を支援するとともに、加速度的な増加が予想される外国人研究者・留学生へのサポートに対応することになります。

また、21年度の事業費で留学生の現況を調べるためアンケート調査を実施し、その結果はいずれご紹介したいと思います。

「サポートオフィス」の強化

平成19年度の試行実施に始まったサポートオフィスは、21年10月にICホール2階に移動し、感じのよいオフィスとなりました。新たにカストロ特任准教授、田中特任助教が就任し、事務職員とともにビザ取得関連の手続の支援、住居・宿舎手配の支援など、学内の様々なニーズへの対応の充実化に意欲的に取り組んでいます。オフィスを関係者に活用いただくため、全学的な説明会を複数回開催しましたが、延べ220名以上の教職員が参加しました。また、留学生、外国人研究者向けに、ガイドブック「来日編」、「暮らし編」、教職員向けに「外国人留学生・研究者受入ハンドブック」を作成・配付しましたが、ハンドブックは約1000部が既に配布ずみです。今後、関係の方々の期待に応えられるようなサービス提供に一層努めたいと考えています。その他、本年度の事業として、留学生・外国人向けコミュニティサイト（Global Campus Net: GCN-Osaka）を改造し、住宅をリクエストするシステムが組み込まれるなど、サービス機能が向上しました。

ICホール2階サポートオフィス

キャンパスの国際化の促進：英語化による対応範囲の拡大

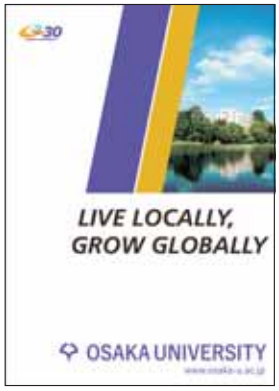
学内各所でまだ英語での対応が不十分のところが多々見受けられます。21年度は以下に述べるような、外国人学生の学習支援体制などの充実が図られました。

①学務情報システム「KOAN」の英語での対応が4月から可能となります。
②Web願書受付システムが開発され、短期プログラムの出願がWebベースでできるようになります。
③附属図書館関連情報、安全の手引き、部局ホームページなどの英語化が進展し、本部からの発出文書の英語化についても対応を進めています。

対外広報・外国人学生向けパンフレット等の制作

大阪大学で現在提供されている外国人学生のための教育プログラムの一覧（International Programs at a Glance）、短期留学プログラムの概要紹介冊子、ポスター、外国人留学希望学生に大阪大学のイメージを伝えることを主眼とした広報 DVD、仮想講義形式をベースとした英語特別コースの紹介 DVD などが、多言語・多メディアで制作されました。これらは大変評判がよく、インターネットやホームページにも掲載しています。今後、海外での留学説明会等でこれらが活用されることを期待しています。

海外からの留学希望者向け広報 DVD ケースの表紙



大阪大学紹介ポスター（サイズ A0 版）

国際プログラム紹介パンフレット韓国語版

国際プログラム紹介パンフレット中国語版

海外における留学生リクルート活動

中国、タイ、ベトナム、米国、東欧各国で留学希望者対象の説明会を開催し、延べ 1,000 名の参加を得ています。また、特に北米、欧州及びアジアの協定大学に対しては、G30 で開設する英語コースだけではなく、理工系短期留学生受入プログラムである FrontierLab@OsakaU を重点的に広報しました。本学の研究教育環境の魅力を積極的にアピールし、短期留学生受入数の増加に貢献しています。

また、これらの活動を通し地域ごとの留学生の動向が把握されつつあり、さらに本学と学術交流協定・学生交流協定締結を希望する大学が多いことも明らかになっています。

上海教育研究センターがオープン

本誌 12 月号で準備状況をご紹介しましたが、G30 事業における海外大学共同利用事務所には認定されず、同事業費を充てることは出来ませんでしたが、本学の経費を充当し、平成 22 年 2 月、大阪府、大阪市と姉妹都市協定を結んでいる中国の上海市に「大阪大学上海教育研究センター」を設置しました。中国への拠点設置は国立 7 大学中最も遅れてしまいましたが、今後、本センターを先行拠点のノウハウも吸収しながら活用し、中国との緊密な交流ネットワークの確立へ向けて着実に前進してゆきたいと考えています。これで本学本部直轄の海外拠点は、サンフランシスコ（米国）、グローニンゲン（オランダ）、バンコク（タイ）と合わせ世界で 4 か所となりました。センターの開所式は平成 22 年 10 月 21 日(木)に行われる予定です。多くの方々の参加を期待しています。

ハイッ！こちら PMO準備室です！

PMO準備室は、全学的な課題に対応するために、昨年４月に設置された組織で、６名の職員が外部コンサルタントの支援を受けながら事務改革などいろいろなことに取り組んでいます。

PMOって何？

この１年間で最も多い質問が、「PMOって何？」でした。

PMOとは、Project Management Office※1（プロジェクト マネジメント オフィス）の略なのですが、それを聞いてもピンとくる方は少ないと思いますので、用語の説明やPMO準備室の目的、この１年間の取り組みなどをご説明していこうと思います。

ところで、みなさんも普段から業務上の課題や上司からの宿題を、期限を設けて取り組んでいると思いますが、一つの係や課などで解決できない課題が発生して困った、というような経験はありませんか？

「こうすればより良くなる」と思っていることがあっても、他の職員・係・課・部・部局と一緒に取り組む必要が出てきて、情報を共有して計画的に進めるのが難しいことから、日々の業務で忙しい中、諦めていることはありませんか？このような場合、プロジェクトマネジメントによる課題解決が必要となります。

PMO準備室は、学内の課題、特に全学的な課題に対応するために、プロジェクトマネジメント機能を担う組織として設置されました。

さて、ここまで読まれた方は、「プロジェクトマネジメントって何？」という疑問が出てきたのではないでしょうか。

プロジェクトマネジメントって何？

そもそもプロジェクト※2とは、NHKの「プロジェクトX」をご覧になっていた方も多いと思いますので、イメージしやすいと思いますが、始期・終期がなく継続して行われる通常業務とは違って、決められた期間内に成果を出す組織体とその活動を指すものです。

次に、プロジェクトマネジメント※3とは、課題が期限内に解決できるようサポートすること、また、解決策の実施後、当初の目標が達成されているかを確かめることを言います。

「PDCAを回す必要がある。」という話を耳にされたことがあると思いますが、課題に対する解決策を計画（Plan）して、実施（Do）

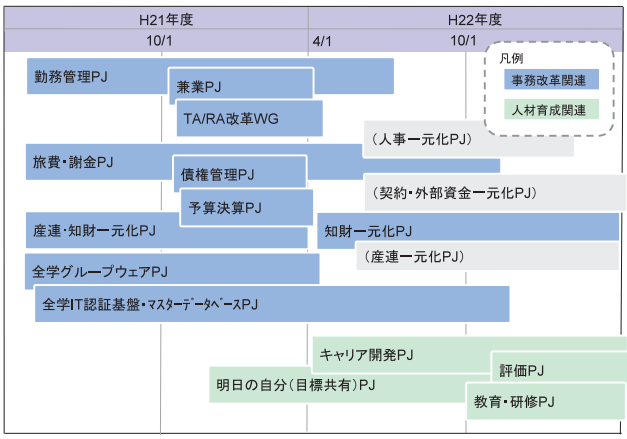
PDCAサイクル、大切です！

するだけではなく、実施の結果を評価（Check）、改善（Action）した上で、更なる改善計画（Plan）に繋げていく、というPDCAサイクルは、プロジェクトマネジメントにおいて重要です。

PMO準備室

PMO準備室は、現在、OJT（On-The-Job Training）でプロジェクト管理手法を学んでいるため、準備室という位置づけになっていますが、将来的には、全学的課題、それも中長期的な課題について、プロジェクトを企画し、運営管理していける組織に成長できたらと考えています。
（PMO準備室で進めているプロジェクト及び今後予定しているプロジェクトは以下のとおり。）

PMO準備室が管理する主要PJ一覧



※1　一般には『組織全体のプロジェクトマネジメント（PM）の能力と品質を向上し、個々のプロジェクトが円滑に実施されることを目的として、プロジェクトの管理業務の支援やプロジェクト間の調整を行う専門部署』と定義されています。
※2　一般には『独自の製品、サービス、所産を創造するために実施される有期性の業務』と定義されています。
※3　一般には『プロジェクトの目標を達成するために、人材・資金・設備・物資・スケジュールなどをバランスよく調整のうえ、計画を立案し、全体の進捗状況を管理する手法のこと。』と定義されています。
※4　一般には『組織が、将来なるべき姿や行動規範の価値観などを含んだ存在意義（ミッション）を定義し、それを実現するための中長期的な戦略や具体的な組織目標や、さらには短期的な日々の行動計画（アクションプラン）まで落とし込むことで、組織の方向性と個人の行動を連携させるようにする体系的な考え方・手法のこと。』と定義されています。

この１年間の取り組み

・プロジェクト管理手法、ミッションマネジメント※4などの学習

プロジェクト管理に必要となるツールや技法、推進のための準備や考え方などをコンサルタント会社が実施する研修などで学習し、プロジェクトに活かしています。

・事務改革に関するプロジェクト

事務改革策定WGの提案をプロジェクトとして立ち上げ（前ページの図）、実施に向けたプロジェクト活動の支援を行い、現在も継続して取り組んでいます。

・職員人材育成のための施策検討会

職員人材育成の観点から、総務部人事課とともに、職員の資質向上・モチベーションアップを目的とした「職員人材育成のための施策検討会」を立ち上げ、職員像の策定、人事諸制度の検討を行いました。

・役員カフェ

“役員と職員との気軽なコミュニケーションの場”として、役員１人と職員５～８人の単位で「大阪大学に足りないもの～こんなんあったらいいのに～」をテーマに、お茶をしながら自由に対話する、文字どおり“カフェ”的な取組です。平成21年度は8回開催し、約50人の方に参加いただきました。

このカフェは、普段なかなか接することのない役員と対話できる場として好評を頂いていることから、今年度も継続していきたいと考えています。

なお、カフェの中で参加者から出された「こんなんあったらいいのに」は、一覧にまとめ、役員へ報告しています。

役員カフェの風景

PMO準備室の今後

・学内におけるプロジェクトの仕組みの構築・定着

大阪大学が今後さまざまな取り組みを行い、発展を目指していく中で、プロジェクト体制を取ることができる“仕組み”の構築と定着はPMO準備室の使命であると考えています。

またそれが同時に、『こんなことやってみたいねん！阪大をよくしていきたいねん！』と、“阪大のあさって”を見つめる職員の思いをかなえられる場につながるものと考えています。

・職員人材育成に係るプロジェクトの推進

職員人材育成では、“目標共有”、“キャリア開発”、“評価”、“教育・研修”を中心にプロジェクトを立ち上げ、『職員が目を輝かせている、明るく活気のある、働いて良かったと思える』、そんな職場を作る人事制度の検討を支援していきます。

みなさんへ

PMO準備室はまだまだ生まれたての子鹿のように足下がおぼついていませんが、みなさんのお役に立てるよう頑張っていきますので、これからもよろしくお願いします。ご提案やご相談がありましたら、PMO準備室へご連絡ください。「ハイッ！こちらPMO準備室です！」の言葉とともにお待ちしています。

役員カフェポスター

総務部秘書課PMO準備室　内線（7157）

デザイン力って何だ？　―報告:ＣＳＣＤ５周年記念シンポジウム

大阪大学の教育目標の一つである「デザイン力」って何でしょう。実は、本学のグラウンドプラン（2008）は、「デザイン力」を「自由なイマジネーションと横断的なネットワーク構成力」だと定義しています。コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）は2005年4月の発足以来、演劇やアートを取り入れた双方向型の「コミュニケーションデザイン科目」の授業を全研究科の大学院生に提供してきました。そのCSCDが設立5周年を記念して企画したのは、大阪大学全体で「デザイン力」を考えるプロジェクトです。まず、全研究科の代表者に「デザイン力」に関するインタビュー調査を行いました。その結果、「デザイン力」のキーワードとして【実践／国際性／幅広い教養／学際性／ネットワーク構成力／基礎的な力／プレゼンテーション能力／構想力／コミュニケーション】が抽出されました。この調査を引き継ぐ形で、2009年12月22日には、シンポジウム「大阪大学におけるデザイン力とコミュニケーションデザイン」を開催しました。公開の場で、各研究科を代表するパネリストの論議がなされたことの意義は、非常に大きいものがあります。詳しい内容は、報告書やCSCDのホームページで4月以降に公表される予定です。ぜひ、みなさんもこれを糸口にして大阪大学の「デザイン力」を一緒に考えていきましょう。

インタビュー調査にご協力いただいた研究科長および副研究科長

（コミュニケーションデザイン・センター）

高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター主催
公開講義「著作権制度見直しの現状と課題～時代の変化を見極める～」

1月14日(木)に、文部科学省大臣官房付の吉田大輔氏を講師としてお迎えし、公開講義「著作権制度見直しの現状と課題～時代の変化を見極める～」を開催しました。

講義では、著作権制度の沿革から最新の法改正と今後の課題まで、わが国の著作権に関する法制度についてお話していただきました。

吉田先生による講義

わが国の著作権制度に長く携わられてきた吉田先生のお話を間近で聞く機会とあり、学生達は皆熱心に耳を傾けていました。著作権制度がいかに時代の変化に機敏に対応していかなる沿革を辿ってきたのか、どのような問題意識から今までの改正が行われてきたのか、そして現在の課題は何か、それはどのような問題意識から生まれ、解決に向け今どのような議論がなされているのかについて、実際にわが国の著作権制度に関わっておられる行政のお立場から、説明をいただきました。中でも講義の最後に語られた「時代の変化を見極め、適切なバランスを探っていく」という旨の言葉は、氏の経験に裏打ちされた大変重みのあるものでした。

講義を通じて参加者からは、著作権制度についての理解を深めるとともに、副題にも挙げられている「時代の変化を見極める」ことの大切さを実感できたといった感想が寄せられました。

（高等司法研究科、法学研究科・法学部）

理学研究科・理学部が『第１１回理学懇話会』を開催

理学研究科・理学部では、1月14日(木)、千里阪急ホテルにおいて、「産学連携時代の阪大理学交流ネットワーク」をテーマに「第11回理学懇話会」を開催しました。

本懇話会は、昨年度に引き続き、企業等の幹部として活躍中の理学研究科・理学部卒業の方々約20名の委員をお招きして、本研究科・学部の教育・研究等について意見交換等を行うとともに、企業等に勤務する理学研究科・理学部OB及び企業の人事担当者を対象に、大学院生等が研究内容に係るポスター発表を行いました。

当日は、理学懇話会学外委員14名、理学研究科OB及び企業の人事担当者46名、本研究科に所属する教授（理学懇話会学内委員、兼任含む）34名、ポスター発表者60名の計154名の出席者を得て開催されました。

東島研究科長・学部長による理学研究科現状報告

大学院生等によるポスター発表

懇話会委員による意見交換会

本懇話会では、実行委員長である渡會　仁評議員の開会の挨拶に始まり、続いて東島清研究科長・学部長から本学研究科・学部の現状について報告が行われた後、隣接したポスター発表会場において、貼り出された60件のポスターをもとに、各研究室で行っている最新の研究について、ポスター発表者である大学院生等と企業等学外出席者との間で、通常の学会等とは異なった視点から活発な質疑応答が行われました。

また、ポスター発表と同時に開催された意見交換会では、佐藤尚弘教授の司会のもと、企業等学外出席者、理学研究科内出席者の双方から、国の方針に基づき「留学生30万人計画」が遂行されている中で、社会が求める外国人留学生像などの話題を中心に、理学研究科・理学部の教育・研究に対する助言・要望等、活発な意見交換が行われ、今後の理学研究科・理学部の発展のために大変有意義なものとなりました。

引き続き行われた懇親会では、和やかな雰囲気のもと活発な意見交換が行われ、いつまでも話が尽きない様子でした。

（理学研究科・理学部）

第18回
理学研究科技術職員研修を開催

高度な専門技術の修得及び自己啓発を目的に、技術部が独自に行う研修として、第18回理学研究科技術職員研修を開催しました。

本研修は例年2日間で行っておりましたが、今年度は「防災と安全衛生」を研修テーマに、学外研修（平成21年8月28日）、学内研修（平成21年11月13日）及び学内演習（平成22年2月3日）の3日間とし、研修の充実を図りました。

学外研修は、神戸大学工学研究科技術部を訪問し、安全衛生に対する技術部の取り組みや職場における対策等について情報交換を行い、また午後からは「阪神・淡路大震災記念 人と未来防災センター」を訪ね、語り部の話、映像、展示物などを通して、地震災害の凄まじさ、減災・防災の

集合写真

演習風景

神戸大学工学研究科技術部との情報交換

大切さ、人のつながりなどについて再認識しました。

学内研修は、東島清理学研究科長の開講の挨拶・講話に始まり、技術賞表彰及び理学研究科佐藤尚弘教授の講義「高分子材料の基礎的理解を目指して」、情報科学研究科坂根由昌特任教授（大阪大学名誉教授）による「ベジエ曲線とベジエ曲面　－美しい曲線、曲面を描くために－」の講義を受講、午後からは西山正夫事務長による『心』を伝える」と題した講話があり、続いて本年度理学研究科技術賞を受賞した尾西克之技術専門職員による「仮想化技術によるサーバの統合」の受賞発表、技術職員による技術発表等が行なわれました。

学内演習は、理学研究科技術部運営委員会委員能町正治教授の挨拶の後、豊中市総務部広報広聴課危機管理室瀬古博也室長による出前講座「災害に備える」を受講、改めて災害に対する心構えや備えの大切さを痛感しました。次に、「安全」という大きなテーマを3班に分かれて、問題解決手法の一つである特性要因図（フィッシュボーン・チャート）を用いた演習を行いました。

午後からは、班毎に午前の演習のまとめの発表を行い、次に、「情報セキュリティリテラシー」等の講義と演習を受けました。最後に、市原敏夫技術長から修了証書が授与されました。

本研修には技術職員全員が参加し、3日間の研修を通じて防災・安全衛生への意識が高まり、充実した研修となりました。

（理学研究科・理学部）

七大学環境安全担当副学長会及び七大学安全衛生管理担当者連絡協議会の開催

2月12日(金)医学部銀杏会館3階大会議室において、七大学環境安全担当副学長会及び七大学安全衛生管理担当者連絡協議会が開催されました。

本協議会は、平成19年1月開催の七大学副学長懇談会で、七大学間で情報交換を行い、大学の実態に即した安全衛生管理体制、法制度等について提言をとりまとめることを目的に設置が決定され、今回が第6回目の開催となりました。本学からは、安全衛生管理部の西田正吾部長（理事・副学長)、山本　仁教授、富田賢吾講師、樽井康員課長をはじめ担当者が出席しました。

今回は、これまでの本協議会における検討内容を中間報告書にとりまとめ、七大学環境安全担当副学長にお集まりいただき、答申することになりました。中間報告書では、大学の安全衛生管理の現状と課題、現行法令適用の問題点、望むべき安全衛生管理体制、大学間連携の重要性等についての提言を盛り込んでいます。

七大学環境安全担当副学長会の様子

開会の挨拶を述べる西田安全衛生管理部長（理事・副学長）

中間報告書の内容は、七大学を通じて各地区の国立大学にもお伝えすることにしています。また、本協議会は今後も活動を継続し、七大学が連携・協力して、大学の安全衛生管理の向上に向けて議論を進めてまいります。

（安全衛生管理部）

日本学生支援機構
優秀学生顕彰事業表彰式の実施

2月16日(火)に日本学生支援機構平成21年度「優秀学生顕彰事業」の表彰式が総長室において行われました。

この優秀学生顕彰事業は、学術、文化芸術、スポーツ活動、社会貢献活動の4分野において優れた業績を挙げた学生を顕彰し、これら活動の一層の促進を奨励・援助し、もって21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的として日本学生支援機構により平成17年度に創設されたものです。

本学からは、学術分野で歯学部5年生の岩崎亮也さんが優秀賞を、文化・芸術分野で外国語学部3年生の藤見知世さんが奨励賞を受賞しました。

岩崎さんの受賞は、マイクロパターニング技術を用いた微少な容器の中で細胞を培養することにより、細胞を球状に凝集させる簡便な方法の確立に成功し、国内学会・国際学会で発表されたことが評価されたもので、藤見さんの受賞は、2009年JAL中国語スピーチコンテストで優勝したことが評価されたものです。

当日は、鷲田清一総長、小泉潤二理事・副学長、米田俊之歯学部長、杉本孝司外国語学部長、大垣一成学生生活委員会委員長、関　昭裕学生部長の列席のもと、鷲田総長から藤見さんに表彰状が授与され（岩崎さんは既に日本学生支援機構から授与済み)、引き続き、鷲田総長から、二人の受賞は、大阪大学の原点である適塾と懐徳堂の精神である「科学的精神とそれに基づく徹底して合理的な知を追求すること、併せて深い徳と豊かな教養を磨くこと」をそれぞれが成し遂げた結果の受賞であると讃えられ、今後も一層の精進を祈念するなどのお祝いの言葉が述べられた後、終始なごやかな雰囲気のうちに閉会となりました。

受賞者を囲んで、左から小泉理事・副学長、藤見さん、岩崎さん、鷲田総長

（学生部学生支援課）

第4期
科学技術基本計画に関する意見交換会

2月19日(金)に、文部科学省　科学技術・学術政策局より柿田恭良計画官をお招きして、第4期科学技術基本計画に関する意見交換会を医学部銀杏会館大会議室において開催しました。

柿田計画官による解説

意見交換会は、西尾章治郎理事・副学長の司会のもと、本学から部局長会議構成員を中心に56名が参加しました。

柿田計画官より、まず、平成21年4月に第4期科学技術基本計画に向けた検討を行うため、文部科学省科学技術・学術審議会の下に設置された基本計画特別委員会において、平成21年12月にとりまとめられた報告書「我が国の中長期を展望した科学技術の総合戦略に向けて」について次期科学技術基本計画に向けた基本認識、また、今後の科学技術政策の方向性を示す「目指すべき国の姿」、「3つの基本的方針」等について解説がなされた後、意見交換を実施しました。

意見交換では、第4期科学技術基本計画及び新成長戦略に期待すること、博士課程の就職、人文社会科学の科学技術への活用等について熱心な意見交換がなされ、盛会のうちに終了しました。

（研究推進部研究推進課）

意識改革に関する講演会を開催

大阪大学職員研修「大学に関する諸課題についての研修」の一環として、意識改革に関する講演会が、2月22日(月)に銀杏会館阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて開催されました。

本講演会は、今後の大学事務職員が大学の理念を理解・共有し、教員と共にその理念を達成していくべき存在となりうるために、職員一人一人の意識を変えることを目的として実施したものです。

株式会社リアセック・キャリア総合研究所所長の角方正幸氏を講師に迎え、「阪大事務職員のキャリアを考える」と題し、大学を取り巻く環境の変化、社会構造の変化による新たな人事制度及び大学の経営戦略と人材育成について、ご講演いただきました。

講演会では、大学以外の民間会社の例をもとにわかりやすく説明いただき、参加した220名は意識改革の必要性について考える、良いきっかけになりました。また、講演会終了後には活発な質疑応答が行われ、大変有意義なものとなりました。

（総務部総務課）

中国石油天然気集団公司と大阪大学の産学連携に関する意見交換会

2月25日(木)、中国石油天然気集団公司の章欣・外事局局長以下6名の訪問団が来学され、医学部銀杏会館2階会議室において西尾章治郎理事・副学長（産学連携推進本部長）ならびに辻毅一郎理事・副学長（国際企画推進本部長）らと面談しました。本学からは、西條辰義社会経済研究所教授、下田吉之工学研究科教授から環境管理・温室効果ガス削減分野に関する研究の御紹介をいただいた他、兼松泰男産学連携推進本部イノベーション創出部長・教授、正城敏博産学連携推進本部総合企画部長・知的財産部長・教授などが同席し、本学で積極的に取り組んでいる環境分野全般の協議や今後の協力関係構築についての積極的な意見交換が行われました。

（研究推進部産学連携課）

附属図書館で「洋古書取扱い研修会」を開催

附属図書館では、近畿地区国公私立大学図書館職員を主な対象として、研修会「古典資料の取扱いにチャレンジ－洋古書編－」を2月26日(金)に開催しました。

研修会には、学内の図書館等職員29名のほか、近畿地区の大学図書館・博物館の職員、教員ら計87名が参加しました。

今回の研修は、古文書・書籍の修復を専門とする吉備国際大学文化財学部文化財修復国際協力学科の鈴木英治教授を招へいし、大学図書館職員が取り扱う機会の多い「洋古書の修復・保存」をテーマに企画されました。

研修会の様子

前半の講演で、資料保存とは資料の持つ情報を保存することであり、現代の資料保存は修復から保存へ、「治す」から「防ぐ」へと保存の概念が変化していること、また、保存環境の管理、予防的なケアの重要性や、図書館等での日常の取扱いにより図書の損傷が低減することを知ると共に、19世紀英国のウイリアム・ブレインズが著書で書物の敵10項目の8番目に製本家、修復家、図書館員をあげているとの話に参加者は妙に納得していました。

後半は、大阪大学の図書館職員が過去に応急修理をした洋古書を見本に、講師から適切な処置なのか、または不適切な処置なのか詳しい説明が行われました。

阪大では、一昨年から「図書関係業務研修会」として、図書館職員が継承するべき知識をテーマにして研修会を企画し、近畿地区国公私立図書館職員等に広く公開をしています。今回は4回目にあたるが、大学図書館等にとって取り扱う機会の多い洋古書は大きなテーマであるため、今までで一番多くの参加を得ると共に、第二弾を希望する声が多くありました。

（附属図書館）

「脳情報通信融合研究キックオフ・シンポジウム」の開催

3月10日(水)、東京国際フォーラム5階B5ホールにおいて、独立行政法人情報通信研究機構（NICT)、株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）及び大阪大学の主催、財団法人大川情報通信基金の共催による「脳情報通信融合研究キックオフ・シンポジウム」が開催されました。本学からは鷲田清一総長、西尾章治郎理事・副学長、門田守人理事・副学長他多数の教職員が参加しました。本シンポジウムは、NICT、ATR及び大阪大学による脳機能を応用した新たな情報通信の実用化に向けた「脳情報通信融合研究」を開始することを記念して、本融合研究の代表者と世界的に著名な脳研究者を招待してご講演いただいたものであり、今瀬真情報科学研究科長の司会により、柳田敏雄生命機能研究科教授による基調講演「脳に学ぶ複雑情報システムの省エネやわらか制御」の他、大岩和弘NICT神戸研究所長、渡邊武郎ボストン大学教授、北澤茂順天堂大学教授による講演が行われました。また、情報・通信分野における研究、技術開発等において顕著な社会貢献をされた研究者を表彰する2009年度大川賞受賞者の川人光男ATR脳情報研究所長及びTomaso Poggioマサチューセッツ工科大学教授による記念講演も行われ、最後にビッグサプライズとして、国会終了後に急遽本会場に駆けつけられた原口一博総務大臣の予定外の来賓挨拶もあり、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。今後の脳情報通信分野における融合研究プロジェクトの研究推進が大いに期待されます。

シンポジウム会場風景

講演を行う柳田教授

来賓挨拶を行う原口総務大臣

（研究推進部産学連携課）

吹田キャンパスで平成２１年度大阪大学防災訓練を実施

３月11日(木)14時から、吹田キャンパス医学系研究科基礎研究棟及び共同研究棟において、平成21年度大阪大学防災訓練を実施しました。

今年度は、杉本　央教授（医学系研究科）、朝野　和典教授（医学部附属病院感染制御部長）、その他の関係者の協力を得て、「地震が発生し、病原微生物（特定病原体等）の保管容器が置かれている室が被害を受け、同様の設置条件を満たしている安全な場所に移送させる」という想定で、適切な対処・措置を行いながら移送させる実働訓練及び学内関係部署等の緊急連絡訓練を行いました。

当日は、医学系研究科以外の関係部局の方にも見学していただき、約20人の参加者がありました。

訓練（関係者以外立入禁止措置）の様子

訓練終了後の講評の様子

（安全衛生管理部）

第15回 企業等との研究懇話会を開催

第15回大阪大学研究懇話会が、3月16日(火)に大阪大学中之島センターで開催されました。

この研究懇話会は、企業等に本学における研究活動の情報を提供するとともに、企業が求める人材あるいは共同研究など大学に対する要望について、幅広く意見交換することを目的に年に一度、開催されています。

当日は、主として関西の企業等の研究開発担当役員及び本学の部局長等、総勢70名以上が集まり、『大学・企業の環境問題への取り組み』というテーマのもと、鷲田清一総長の開会の挨拶の後、西日本電信電話株式会社　代表取締役副社長 伊東則昭氏から「NTT西日本における環境経営に向けた取り組みと大学との連携について」と題するご講演をいただき、引き続き、辻　毅一郎理事・副学長、西尾章治郎理事・副学長、小林傳司コミュニケーションデザイン・センター教授から講演を行いました。

鷲田総長による開会の挨拶

伊東副社長による公演の様子

また、講演の後は、今後の大学運営、産学連携及び協力の推進等について、参加された企業等の方と活発な意見交換が行われました。

その後、西尾理事・副学長から、本研究懇話会の今後について、「あらたな形で産業界からご意見をいただける場を検討してまいりたいと考え、今回を最後として閉会させていただきたい」との提案があり了承されました。

（研究推進部研究推進課）

退職教授との懇談会開催

総長主催による平成21年度退職教授との懇談会が3月17日(水)午後6時30分から、医学部銀杏会館で開催されました。

これは、本学を退職または転出される教授の方々の永年のご尽力に感謝するとともに、惜別の意を表すために開催されるもので、今年は対象者49名のうち、20名の退職教授が出席しました。

はじめに、当日出席の退職教授の紹介があり、鷲田清一総長の挨拶のあと、退職教授を代表して歯学研究科の雫石聰教授から謝辞が述べられました。

引き続き、小泉理事・副学長の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

(総務部総務課)

「科学・技術政策について地域からご意見を聞く会」開催

内閣府の科学技術政策担当大臣と総合科学技術会議有識者議員との会合の初の地方開催として、「科学・技術政策について地域からご意見を聞く会」が平成22年3月20日(土)に大阪大学中之島センターにおいて開催されました。

この会合は、第4期科学技術基本計画策定や科学・技術政策に関連して地域から広く意見を聴き、科学・技術政策立案の参考にするとともに、政府の科学・技術政策の考え方を地域に発信することを目的としています。

当日は、始めに、総合科学技術会議有識者議員から科学・技術政策の立案に関する新たな動きなどについて説明があり、続いて、若手研究者育成、産業界の期待する人材育成、評価の多様性、知識や異分野間を結びつける基盤づくり、科学・技術政策のあり方等について、招待者(西尾章治郎大阪大学理事・副学長ほか、大阪市、立命館大学、関西経済連合会、地元企業、若手研究者等)から意見が述べられた後、川端達夫科学技術政策担当大臣、津村啓介同政務官、総合科学技術会議有識者議員、招待者により活発な意見交換が行われました。一般来場者からの質疑応答では、科学技術と社会を結びつけるコミュニケーションの推進等について熱心な議論が行われ、盛会のうちに終了しました。

平松邦夫大阪市長(左)と西尾章治郎理事・副学長(右)

川端達夫科学技術政策担当大臣(左)と
津村啓介政務官(右)

(研究推進部研究推進課)

将棋大会「第９回学生団体最強戦」、プロ将棋棋士「糸谷哲郎五段トークサロン」開催

3月20日(土)、21日(日)の2日間にわたり、将棋大会「学生団体最強戦」をイ講堂で開催。京阪神間の小学生から大学生までの5人制12チームが各5局を戦いました。見学に訪れた一般の方には阪大将棋部員がお相手を申し出るなど、将棋を通じて交流を深めました。

3月21日には文学部在学中のプロ棋士糸谷哲郎五段を迎え、21世紀懐徳堂ギャラリーにてトークサロンを開催。この日は偶然にも第59回NHK杯テレビ将棋トーナメント決勝戦放映と重なり、テレビで今まさに羽生善治名人と優勝を争っている本人が目の前にいるという稀な状況に（NHK杯は収録）。棋士として公式戦を戦いながら受験勉強をした高3時代の逸話や、対局中のエピソード、人気戦法「糸谷流右玉」の展望や弱点（!）についてなど、「質問に答えてもらったというよりプロと楽しくお話しできた非常に幸せなひと時でした」と、後日参加者の半数以上から感激メールが届くほどの、笑いを交えた、あっという間の一時間でした。

左から、大阪府中・高等学校将棋連盟事務局長中村教諭、阪大将棋部顧問山本准教授、糸谷五段、神戸新聞社塩田記者

イ号館イ講堂で熱戦が繰り広げられた

糸谷五段が次の仕事に向かった後も参加者全員が会場に残り、NHK杯を最後までテレビ観戦。糸谷五段は残念ながら準優勝となりましたがデビュー4年目で強豪相手に勝ち上がり、羽生名人との決勝をよく戦ったと自然と拍手がわきおこりました。

（21世紀懐徳堂）

平成２１年度工学研究科
「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成プログラム・博士前期課程　修了式挙行

経済産業省・文部科学省による平成21年度「アジア人財資金構想」高度専門留学生育成事業に採択された上記プログラム修了式が、3月23日(火)に、医学部銀杏会館内阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて挙行されました。

式は、小泉潤二理事・副学長、馬場章夫研究科長、谷口研二評議員を始め、留学生所属指導教員並びに来賓として経済産業省近畿経済産業局から須山　稔次長、内海美保課長、三浦佳子調査官の列席のもと、座古勝特任教授（副プロジェクトリーダ）の司会により進められました。初めに、小泉理事・副学長および馬場研究科長から留学生修了の祝辞が、また、須山次長からアジア地域と我が国の産業発展を支える人材として今後の活躍期待がそれぞれ述べられました。その後、谷口評議員よりプログラム修了認定者の氏名発表があり、修了証書の授与式が執り行われました。最後に、留学生9名（中国6名、韓国2名、ネパール1名）を代表して、環境・エネルギー工学専攻の方　美那さんより文部科学省、経済産業省をはじめプログラム関係各位に対する謝辞と「アジア諸国と日本を支える人材」になるように今後とも精進したいとの表明があり、修了式を閉会しました。

（工学研究科・工学部）

中国・北京航空航天大学一行が来訪、部局間学術交流協定締結

3月24日(水)、中国・北京航空航天大学の懐　進鵬学長、国際交流協力処長の馬　進喜副教授、科技研究協力副処長の朱　穎副教授、物理学院長の孟　傑教授らが本センターを訪問し、部局間学術交流協定の調印式を行いました。

握手を交わす孟物理学院長（左）と岸本センター長（右）

北京市内に位置する北京航空航天大学は、8つの工学系の大学を統合することによって1952年に設立された大学で航空科学技術を中心とした研究をしています。

最近では工学分野に加え基礎科学も含めた28の専攻を有し、基礎物理学の強化を図る一環として核物理研究センターとの協定を制定するにいたりました。

席上では、岸本忠史センター長、コンタクトパーソンである保坂　淳准教授、土岐　博教授、谷畑勇夫教授を交えて、お互いの大学の現状を披露することによって、相互の理解を深めることからはじまり、協定に基づいて今後の具体的な交流の実現にむけた活発な議論がなされました。

本協定の締結により、本センターと北京航空航天大学との協力関係は益々推進されるものと期待されます。

（核物理研究センター）

平成２１年度
退職時永年勤続者表彰式挙行

平成21年度退職時永年勤続者表彰式が、3月26日(金)午前11時からコンベンションセンター1階会議室1において、被表彰者51名のうち43名の出席のもとに挙行されました。

式は、鷲田清一総長から被表彰者一人一人に表彰状が授与された後、祝辞が述べられ、続いて、被表彰者を代表して産業科学研究所事務部長の仲田　昇氏が謝辞を述べ閉式しました。

今年度表彰された方は、次のとおりです。

中　原　洋　一（本部）
古　泉　清　次（本部）
吉　原　一　男（本部）
辻　内　寿　一（本部）
藤　井　　博（本部）
北　本　昇　一（本部）
竹　中　博　美（本部）
川　端　重　男（本部）
野　元　　猛（本部）
村　上　忠　詩（経）
西　山　正　夫（理）
福　塚　通　廣（理）
山　本　哲　生（理）
安　達　　廣（理）
和　田　榮　史（医）
京　力　深　穂（医病）
平　林　髙　子（医病）
佐　藤　美代子（医病）
河　野　総　江（医病）
前　川　　哲（医病）
土　井　トクヱ（医病）
米　谷　良　美（医病）
仲　島　道　子（医病）
松　岡　千恵子（医病）
野　村　益　美（医病）
岡　村　澄　子（医病）
中　村　幸　夫（医病）
伏　見　　了（医病）
澤　﨑　憲　夫（医病）
筏　　早　男（医病）
溝　渕　　薫（医病）
市　川　　順（医病）
髙　村　佳　孝（歯）
平　井　　満（歯）
藤　田　久美子（歯病）
竹　田　経　子（薬）
向　山　　彰（工）
三　神　正　明（工）
川　村　良　雄（工）
大　西　啓　二（工）
加賀谷　洋　一（基）
河　﨑　　清（基）
松　本　敬　一（言）
佐々木　幹　夫（言）
石　井　　寛（生）
仲　田　　昇（産）
山　本　　保（産）
上　田　次　男（蛋）
大　橋　邦　茂（社）
長　崎　太　志（社）
冨　永　健　一（核）

（総務部人事課）

学生関係施設等の整備・充実

平成21年8月から本年3月にかけて、平成21年度大学基盤推進経費により、課外活動施設や学寮等の補修・改修及び備品の更新、並びに、学生への貸出物品の整備等を広く実施することができました。

今回の整備・充実は、老朽化等により危険性が懸念された箇所や使用に支障を来していた箇所を中心に行い、さらに学生からの要望が高かった事項についても取り入れる形で実施いたしました。

具体的には、課外活動施設では損傷の激しかった各キャンパスのテニスコートの改修や豊中キャンパス旧ボイラー棟の音楽練習室への改修をはじめとした様々な施設を改修するとともに、清明寮や箕面キャンパス体育館に設置したトレーニング機器や豊中キャンパス学生交流棟の備品等を整備するなどし、体育系、文化系ともに課外活動環境の向上を図ることができました。

学寮に関しては、荷物の移動等で居住する学生の協力も得つつ、各寮とも様々な改修や備品等を整備することができ、寮生の住環境の向上を図ることができました。

また、学生関係施設において盗難等が発生している現状に鑑み、同施設での犯罪等を抑止する目的から、体育会、文化会や寮生の了解のもと、キャンパスの各所に防犯カメラやセンサーライトを設置いたしました。

以上のとおり、今回、様々な改修等により学生関係施設等の整備を行いましたので、学生の皆さんもこれらを大いに活用し、充実したキャンパスライフを送ることを期待いたします。

予算的な制約はあるものの、今後も引き続き学生支援に取り組んでいきますので、学生関係施設の改修等の要望がありましたら、学生センターまでお申し出下さい。

課外活動施設

○ 吹田テニスコート（クレーコート）・豊中第3テニスコート・箕面テニスコート改修
○ 吹田体育管理棟2階ミーティングルーム等内装改修
○ 吹田課外活動施設備品更新
○ 豊中旧ボイラー棟音楽練習室への改修
○ 豊中学生交流棟会議室備品等整備
○ 清明寮・箕面第二体育館トレーニング機器等更新
○ 箕面サークル共用施設改修工事
など

【更新前】 → 【更新後】

清明寮トレーニングルーム

学寮

○ 刀根山寮、新稲寮、箕面地区学生寄宿舎便器取替
○ 清明寮共用部内壁その他塗装工事
○ 箕面地区学生寄宿舎自動火災報知設備取替
○ 箕面地区学生寄宿舎共通部改修
○ 箕面地区学生寄宿舎共用棟内装改修
○ 豊中・箕面地区学生寄宿舎備品等更新
など

【改修前】 → 【改修後】

箕面地区学生寄宿舎共用部廊下

その他・共通

○ 課外活動施設・学寮防犯カメラ及びセンサーライト設置
○ 吹田・豊中・箕面地区学生貸出物品の整備
○ 薬学部食堂空調設備更新
○ 山の家浴室用給湯器更新
など

【更新前】 → 【更新後】

薬学部食堂空調設備

（学生部学生支援課）

レーザー研研究棟に身障者対応スロープ完成

レーザーエネルギー学研究センター研究棟（I 棟）北側の出入り口に身障者対応のスロープ設置工事が行われ、3月末に完成しました。併せて、出入り口の自動扉への改修も行われたことにより、車椅子の方でも簡単に研究棟に入れるようになり、シンポジウム等が開催される大ホールの利用も容易になります。

今回のスロープ設置工事に係る費用の一部は、大学の障害者雇入れ計画推進に伴い部局に配分された奨励金が使われ、障害者雇用を推進するとの趣旨を生かすものです。

（レーザーエネルギー学研究センター）

平成２１年度
卒業式、大学院学位記授与式挙行

平成21年度卒業式・大学院学位記授与式が3月23日(火)に、大阪城ホールで挙行され、学部生3,435名が卒業し2,092名に修士の学位が、88名に法務博士（専門職）の学位が、659名に博士の学位が授与されました。

式では、まず、学士学位記が各学部の受領代表者に授与され、続いて、楠本長三郎第2代総長の退官を記念して創立された楠本奨学会から各学部の優秀な卒業生に贈られる「楠本賞」が23名に授与されました。

続いて、修士、法務博士（専門職）、博士の順に学位記が授領代表者に授与され、鷲田総長からの式辞がありました。

また、「記念講話」として、今年度は山崎正和名誉教授から「大阪大学を卒業、修了するにあたっての責任、自覚」に関するスピーチをいただきました。その後、卒業及び修了を祝し、本学男声合唱団が「大阪大学学生歌」、「オールド・ラング・ザイン」を、交響楽団がエルガー作曲「威風堂々」を演奏し、閉式となりました。

（総務部総務課）

平成２１年度卒業式・学位授与式総長式辞

本日ここに集われた3435名の学部卒業生のみなさん、2092名の大学院修了生のみなさん、そして博士の学位を授与された659名のみなさん。卒業ならびに修了おめでとうございます。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々に対しても、ここに深く敬意を表したく存じます。

みなさんは、大阪大学におけるさまざまな専門の勉学と研究を、今日を一区切りとして終え、これから社会のさまざまな現場に出てゆかれます。そしてそのなかでさらに、何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆかれることでしょう。プロフェッショナルへのそういう道に就かれる前に、みなさんが学ばれたその大学を代表する者として、ここにあらためてみなさんに申し上げておきたいことがあります。それは、「教養」と「責任」の意識とをしっかりもったプロフェッショナルになっていただきたいということです。ともに擦り切れるくらいによく口にされてきた言葉ですが、みなさんを送るにあたって、この「教養」と「責任」についてわたくしなりの考えをあらためてお伝えしておきたいと思います。

「オリエンテーション」という言葉があります。この言葉、みなさんは大学入学のときにも聴かれたはずです。大学はどのようなところか、大学ではどのように学び、またどのように課外活動をおこなうか、その仕組みや機会、あるいは手続きなどについて、一通りの説明を受けたことと思います。

「オリエンテーション」というのは、もともと、方向を定めること、つまりいま自分がどこにいるかの見当をつけることを意味しています。そして、生きるということは、とりもなおさず、自分が生きようとしているこの世界のどういう場所にいま自分がいるかを知ることから始まります。世界のなかに自分を位置づけること、つまり世界のなかに自分をマッピングすることからです。何をどうしたらいいのか分からないという状態、つまりまごついたり、途方に暮れたりしていることは、反対に、「ディスオリエンティッド」と言います。方向を見失うこと、自分の位置が分からないこと、そして居場所がないということ、英語でいう「ディスオリエンテーション」とは、そういうことです。

「ディスオリエンテーション」。これはたしかに危機的な状況を意味します。が、それはじつはチャンスでもあります。「ディスオリエンテーション」は、いうまでもなく破局や崩壊への道であるのですが、それは同時に再創造の道でもあるのです。自分のいままでの生き方を根本から変えるチャンスでもあるのです。

赤ちゃんは誕生の際、お母さんの体内でお母さんから臍の緒を通じて栄養を送られていた状態から、自分で呼吸し、栄養をとる状態へと、いのちの仕組みを大変換します。その変換のさなか、つまり産道をくぐり抜けるあいだ、いわば窒息状態にあります。いのちの仕組みを大変換するためには、こうした無呼吸の状態に耐える力が要るのです。

これまでとは違う新しい「オリエンテーション」に至る過程でも同じことが言えます。ここでは当然、以前の「オリエンテーション」はもはや役に立たないのですから、わたしたちは赤ちゃんと同じように無呼吸状態に耐えなければなりません。それに耐えうるだけのタフさがないと、生き方を変えるということはできないのです。

このことは個人としての生き方のみならず、社会的な事業や企業での事業についても言えます。これらの事業にあっても、ゴールまで一直線でたどり着けるものなど、めったにありません。たいていは途中で何度も挫折するものですし、軌道修正も一回では済みません。もちろん、いったん撤退を余儀なくされることもよくあることです。

このような場面では、いったん立ち止まり、事態を正確に見定めること、自分の正確な位置づけをおこなうこと、つまり「オリエンテーション」が必要になります。この「オリエンテーション」にもっとも必要なもの、それは「複眼をもつ」ということです。一つの光を当てるより二つの光を当てたほうが世界はより立体的に見えてくるのと同じように、一つの事業をおこなうにも、それを内から見るだけでなく、同時に外からも見るほうが、進むべき道がより正確に見えてきます。

「複眼をもつ」ということがどういうことか、〈外〉からの視線をもつということがどういうことか、いま少し詳しく述べておきたいと思います。

一般に、専門を究めるというのは、研究であれ業務であれ、より細かく精緻な領域に入ってゆくということです。みなさんも大学に入るときに学部を選び、大学に入れば専

攻を選び、さらに専門の研究課題を選ぶというふうに、関心の対象をより狭めていったはずです。そうするなかで、そのごく限られた研究領域のなかで、世界の先端の研究水準というものを知り、それに合流し、さらにそれを凌駕することに向学心を燃え上がらせたはずです。その筋のプロフェッショナルになろうとして、です。

けれども、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の知識だけではどうにもなりません。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。一つのアイディアを制度として定着させようとするとき、一つの発見を医療の現場で活かそうとするとき、さらには一人の画家の仕事をまとめ展覧会を開こうとするとき、法律や経理、調達や広報といった別のプロフェッショナルたちとしっかり組まなくてはなりません。

別の領域のプロフェッショナルと同じ一つの課題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家（つまりそれについてのまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門についてイメージ豊かに説明することがまずは必要です。そして彼らにその気にならせねばなりません。そのためには、異なる分野のプロフェッショナルたちのこだわりをよく理解し、また深く刺激するような対話をできなければなりません。そうした技を身につけるためには、常日頃から、異分野の人たちと深く交わっている必要があります。将来、医師になろうとしている人、法曹界に進もうとしている人、教職につこうとしている人、研究者や技術開発者になろうとしている人たちが、同じ一つの問題について侃々諤々議論するトレーニングを、日頃よりしている必要があります。じっさい、一つの包括的な視点からすべて論じきれるような問題は、現実にはほとんどないのですから、自分の専門領域の、内輪の符丁でしか語れない人は、そもそも専門家としても失格なのです。

とすれば、専門家にはその知識が「知の総体」のなかでどのような位置を占めるか、いいかえると、みずからの知を社会のより大きな枠組みのなかにいかにマッピングできるかが、強く問われることになります。自分が何を知っていて何を知らないか、自分に何ができて何ができないか、それを見通せていることが「教養」というものにほかなりません。

「教養」というのは、先ほども言ったような「複眼をもつ」ことで身についてゆきます。異文化に学ぶことも歴史に学ぶことも、いまここではない別の場所からいまここを見つめなおすことにつながります。そのような複眼のなかでこそ、世界はある奥行きをもって浮かび上がってくるのです。

この奥行き、それは「価値の遠近法」と言いなおすこともできるでしょう。「価値の遠近法」とは、なくてはならないもの、つまり絶対に見失ってはならないものと、あってもよいけどなくてもよいものと、端的になくてよいもの、そして最後に絶対にあってはならないこと。この四つを、どんな状況にあってもそのつど区分けできるということです。

これから社会のさまざまなセクターで活動してゆかれるみなさんは、予想もしない苦境に何度も立たされるでしょう。そのようなときに生きてくるのが「教養」というものです。それをしかと身につけるため、みなさんの学びはこれからもずっと続きます。そのとき、かつて大学で学んだ多様な学問の方法や世界の見方というものが、あなたがたにもう一つの眼を与えてくれることもあるでしょう。もしさらに学びが必要なときには、いつでも大学に戻ってきてください。大阪大学はそうした学びの場をいつでも開いておきます。

もう一点、「責任」について次にお話しします。

もはや旧聞に属することですが、米国のオバマ大統領がその就任演説の最後のところで、「新しい責任の時代」というスローガンを口にし、「米国民一人ひとりが自身と自国、世界に義務を負うことを認識し、その義務をいやいや引き受けるのではなく喜んで引き受ける機会をとらえること」を訴えたことは、みなさんもご存じでしょう。

「責任」と「義務」。なんとも古めかしい「倫理」の徳目が持ちだされているようにみえますが、この言葉は、1961年のジョン・F・ケネディ大統領の就任演説を踏まえています。それは「祖国があなたに何をしてくれるかを問うてはなりません。あなたが祖国のために何ができるかと問おうではありませんか」というものです。この言葉によってケネディ大統領は、自分がなすべきことを、自分が何をしてほしいかではなく、自分が何を求められているかというほうから考えようと呼びかけたのです。

オバマ大統領が掲げた「責任」という言葉、英語ではリスポンシビリティ（responsibility）です。ここには日本語の「責任」という言葉からは感じられない独特の含意があります。リスポンシビリティとは、直訳すれば、リスポンドできるということ、つまり、他者からの求め、訴えに応じる用意があるということです。さらに遡って、リスポン

ドとはラテン語のre-spondere、つまり「約束し返す」という言葉に由来します。欧米のひとたちは伝統的に、ひととしての「責任」を、他者からの呼びかけ、うながしに応えるという視点からとらえてきたのです。この他者はかれらにとっては神でもありうる。だから職業のことを、とくに使命や天職の意味を込めて、コーリング（calling）と呼びもしてきたのです。まさに神からの呼びだしに応じるということです。

日本語の「責任」にそのような含意はありません。「責任」といえば、国家の一員としての責任、企業の一員としての責任というふうに、組織を構成する一員として果たさねばならない事柄を思い浮かべます。それは匿名の役柄における責任であって、まぎれもなくこのわたしがいまだれかから呼びかけられているという含みはそこにはありません。

考えようによっては、阪神淡路大震災のあと、空前のボランティア・ブームが起こったときにひとびとがとっさに抱いたのは、この、いま自分が呼びだされているという感覚ではなかったのかと、わたくしは考えています。仮設の避難所に遠くから赴いたひとたちは、自分はだれも知らないちっぽけな存在だけれど、そして会社でもいつも何をやっても「あたりまえ」、とくに評価されるわけではないけれど、ここでは「ああ、また来てくれたんやね」と、他とは違うこの〈顔〉として認められ、たどたどしいけれどまぎれもなくこのわたしの言葉で話すことができる。ねぎらいあうことができる。そのとき、ひとびとがもしその動機を訊かれたら、「責任」という言葉は持ちだしにくくても、「リスポンシビリティ」という言葉に対応する言葉が日本語にあれば、きっとそれで表現したことでしょう。

もちろん、名ざしで呼びだされている者として自分を意識するということには、危うい面もあります。他のだれでもなくこの自分が何者かからとくに召喚されているという意識が過大なまでに膨らんで、自分を他に優って嘱望された人間、つまりはエリート（選良）と考えて、うぬぼれてしまうからです。あるいは逆に、つねに他人による評価と称賛を求め、ときに卑しいばかりに他人に取り入ろうとするからです。ここでは、このじぶんという意識が方向を誤って、そうオリエンテーションを間違って、他者の否定につながってしまっています。

重要なのは、自分とは異なる他者たちの、声にならぬ叫びや訴えにリスポンドできるということです。他者の消えそうな声を聴く耳をもつこと、その小さな声に“Can I help you?”と応じることができることです。みなさんには、労働者としてでも消費者としてでもなく、聴衆としてでも顧客としてでもなく、一人の「市民」として、そのような鷹揚さ、気前のよさ、つまりは「リベラリティ」を身につけていただきたいのです。

その際に大切なことは、ひとびとのニーズにただちに応えるというのではなく、そのニーズが応えるべきものなのかどうか、そしてわたしたちにとって何がほんとうのニーズであるかを考えつつ応えるということです。そしてそういう判断をするときに生きてくるのが、先にも申し上げた「教養」なのです。

みなさんは一人の個人として、人生においてこれからさまざまな危機に直面しもするでしょう。何のためにここにいるのか分からなくなったり、そもそも自分のような人間がここにいることに意味があるのかと、人生への深い疑問を抱くようなこともきっと少なからずあることでしょう。そんなときほんとうに親身になって応えてくれるのは、もちろんまずは自分の存在を気遣ってくれる友人たちでしょうが、それとともに、同じような困難に直面してきた未知の先人たちの言葉であり、メッセージでもあります。

未知の先人たち、それは、たとえば人としてここにあることの意味を極限にまで問いつめてきた思想家たちであり、同じ時代の過酷な運命を憂え、そして一人でもそういう不幸な人の存在を許すまじと社会の運営に身を砕いてきた企業家たちであり、わたしたちの心をそのもっとも深い部分で慰めてくれる芸術家たちであり、そして市井で無名のまま他のひとびとの困窮を気遣い、無言で支え続けてきた人たちです。そういう未知の人たちの言葉、行為、あるいは作品が、将来、あなたの危機を救ってくれるはずです。みなさんには、大学を離れても、そういう叡智にふれつづけることを忘れないでいただきたいと思います。

そして、みなさんが将来、周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあいつがいたらなあ」と言ってもらえる人になられたとき、そのときはじめて、あなたがたを送りだした大阪大学は、胸を張って、その存在理由を確認できるでしょう。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。

3／23 挙行卒業式・大学院学位記授与式　学士学位記受領代表者

学部名	学科名	氏　名
文　学　部	人 文 学 科	鈴　木　翔　子
人間科学部	人間科学科	井　上　友　希
外国語学部	地域文化学科	菅　沼　健太郎
法　学　部	法　学　科	赤　星　　聖
経 済 学 部	経済・経営学科	SIM DARA
理　学　部	物 理 学 科	杉　本　高　大
医　学　部	保 健 学 科	大久保　絵　美
歯　学　部	歯　学　科	久保田　実木子
薬　学　部	薬 科 学 科	町　谷　充　洋
工　学　部	電子情報工学科	小　島　世　誠
基礎工学部	情報科学科	堀　池　譲　立

3／23 挙行卒業式・大学院学位記授与式　修士学位記受領代表者

研究科名	専攻名	氏　名
文学研究科	文化表現論専攻	逢　坂　文　哉
人間科学研究科	人間科学専攻	上野山　裕　士
法学研究科	法学・政治学専攻	安　藝　　悟
経済学研究科	経営学系専攻	堀　岡　　亮
理学研究科	生物科学専攻	越　村　友　里
医学系研究科	保健学専攻	井　上　直　哉
薬学研究科	応用医療薬科学専攻	島　田　佳代子
工学研究科	環境・エネルギー工学専攻	安　野　裕　介
基礎工学研究科	物質創成専攻	森　　一　也
言語文化研究科	言語社会専攻	後　藤　　篤
国際公共政策研究科	国際公共政策専攻	森　本　　舞
情報科学研究科	情報基礎数学専攻	吉　田　夏　海
生命機能研究科	生命機能専攻	末　友　寿　実
言語社会研究科	国際言語社会専攻	山　路　佳　恵
連合小児発達研究科		

法務博士（専門職）学位記受領代表者

研究科名	氏　名
高等司法研究科	松　本　　諭

3／23 挙行卒業式・大学院学位記授与式　博士学位記受領代表者

研究科名	専攻名	氏　名
文学研究科	文化表現論専攻	多　田　英　俊
人間科学研究科	人間科学専攻	永　吉　希久子
法学研究科	法学・政治学専攻	何　　佳　芳
経済学研究科	経済学専攻	張　　佳　楽
理学研究科	宇宙地球科学専攻	内　田　裕　之
医学系研究科	外科系臨床医学専攻	西　田　健太郎
歯学研究科	分子病態口腔科学専攻	JIRA CHINDASOMBATJAROEN
薬学研究科	分子薬科学専攻	山　口　朋　子
工学研究科	生命先端工学専攻	村　上　元　信
基礎工学研究科	物質創成専攻	VU, Huong Thi
言語文化研究科	言語文化専攻	西　口　純　代
言語社会研究科	言語社会専攻	ヤマーフー　バダムハンド
国際公共政策研究科	国際公共政策専攻	宮　﨑　麻　美
情報科学研究科	マルチメディア工学専攻	荒　瀬　由　紀
生命機能研究科	生命機能専攻	田　中　慎　吾
連合小児発達研究科		

楠本賞受賞者

部局名	学科名	氏　名
文　学　部	人文学科	平　岡　　謙
人間科学部	人間科学科	松　前　菜津美
外国語学部	国際文化学科	山　中　栄　子
	地域文化学科	金　谷　由美子
法　学　部	法　学　科	北　村　幸　也
経済学部	経済・経営学科	川　端　知　基
理　学　部	数　学　科	早　野　健　太
	物理学科	増　田　　寛
	化　学　科	広　崎　真　司
	生物科学科	北　沢　美　帆
医　学　部	医　学　科	吉　原　正　仁
	保健学科	森　合　　梢
歯　学　部	歯　学　科	大　家　香　織
薬　学　部	薬科学科	綾　部　有里香
工　学　部	応用自然科学科	佐々木　　晃
	応用理工学科	納　富　隼　人
	電子情報工学科	福　田　達　也
	環境・エネルギー工学科	中　西　拓　也
	地球総合工学科	久　保　尚　子
基礎工学部	電子物理科学科	速　水　　賢
	化学応用科学科	川　村　和　司
	システム科学科	池　戸　隆　人
	情報科学科	堀　池　譲　立

平成２２年度
個別学力検査等実施

平成22年度個別学力検査等は、吹田キャンパス及び豊中キャンパスで実施し、各学部等関係者の方々のご協力により、無事終了いたしました。

また、危惧された新型インフルエンザの流行も、年明けには徐々に沈静化し結果的には、前期・後期両日程共追試験の申請者がありませんでしたので個別学力検査等における追試験は実施しませんでした。

一般入試の志願者数及び志願倍率は、前期日程7,265名（2.8

平成22年度　大阪大学入学者選抜試験（前期日程）合格者数等調

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文　学　部	人文学科	125	442	3.5倍	434	137
人間科学部	人間科学科	100	298	3.0倍	296	110
外国語学部	外国語学科 中国語専攻	30	89	3.0倍	88	32
	外国語学科 朝鮮語専攻	13	64	4.9倍	39	14
	外国語学科 モンゴル語専攻	13	52	4.0倍	39	14
	外国語学科 インドネシア語専攻	7	32	4.6倍	21	8
	外国語学科 フィリピン語専攻	9	36	4.0倍	27	10
	外国語学科 タイ語専攻	11	48	4.4倍	33	12
	外国語学科 ベトナム語専攻	11	41	3.7倍	33	12
	外国語学科 ビルマ語専攻	13	59	4.5倍	36	14
	外国語学科 ヒンディー語専攻	13	54	4.2倍	39	14
	外国語学科 ウルドゥー語専攻	13	67	5.2倍	39	14
	外国語学科 アラビア語専攻	19	54	2.8倍	54	21
	外国語学科 ペルシア語専攻	13	60	4.6倍	38	14
	外国語学科 トルコ語専攻	13	53	4.1倍	39	14
	外国語学科 スワヒリ語専攻	13	54	4.2倍	39	14
	外国語学科 ロシア語専攻	19	85	4.5倍	56	21
	外国語学科 ハンガリー語専攻	11	62	5.6倍	33	12
	外国語学科 デンマーク語専攻	13	52	4.0倍	39	14
	外国語学科 スウェーデン語専攻	13	60	4.6倍	39	14
	外国語学科 ドイツ語専攻	26	95	3.7倍	77	28
	外国語学科 英語専攻	45	127	2.8倍	123	48
	外国語学科 フランス語専攻	19	52	2.7倍	52	21
	外国語学科 イタリア語専攻	13	58	4.5倍	39	14
	外国語学科 スペイン語専攻	26	84	3.2倍	78	28
	外国語学科 ポルトガル語専攻	23	115	5.0倍	69	25
	外国語学科 日本語専攻	22	69	3.1倍	66	22
	外国語学部　計	421	1,622	3.9倍	1,235	454
法　学　部	法学科	145	336	2.3倍	333	152
	国際公共政策学科	68	161	2.4倍	161	73
	法学部　計	213	497	2.3倍	494	225
経 済 学 部	経済・経営学科	185	648	3.5倍	639	206
理　学　部	数学科	38	121	3.2倍	118	42
	物理学科	58	232	4.0倍	228	64
	化学科	60	201	3.4倍	195	65
	生物科学科 生物科学コース	25	84	3.4倍	82	28
	生物科学科 生命理学コース	10	28	2.8倍	27	11
	理学部　計	191	666	3.5倍	650	210
医　学　部	医学科	85	239	2.8倍	222	87
	保健学科 看護学専攻	68	157	2.3倍	147	74
	保健学科 放射線技術科学専攻	35	87	2.5倍	84	39
	保健学科 検査技術科学専攻	30	57	1.9倍	55	35
	医学部　計	218	540	2.5倍	508	235
歯　学　部	歯学科	54	117	2.2倍	111	56
薬　学　部	薬学科	20	77	3.9倍	69	20
	薬科学科	50	100	2.0倍	99	54
	薬学部　計	70	177	2.5倍	168	74
工　学　部	応用自然科学科	173	361	2.1倍	357	187
	応用理工学科	198	419	2.1倍	416	208
	電子情報工学科	129	286	2.2倍	279	137
	環境・エネルギー工学科	60	152	2.5倍	151	65
	地球総合工学科	94	201	2.1倍	198	101
	工学部　計	654	1,419	2.2倍	1,401	698
基礎工学部	電子物理科学科	74	179	2.4倍	175	76
	化学応用科学科	63	189	3.0倍	183	64
	システム科学科	127	324	2.6倍	315	130
	情報科学科	62	147	2.4倍	142	64
	基礎工学部　計	326	839	2.6倍	815	334
合　計		2,557	7,265	2.8倍	6,751	2,739

注①　理学部、工学部、基礎工学部は、第1志望学科の志願者数である。　注②　複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

倍)、後期日程6,729名（10.1倍）で両日程を合わせると13,994名（昨年度13,709名）でした。

前期日程試験は、2月25日(木)及び26日(金)に行われ、6,751名が受験し欠席率は全体で7.1%（昨年度2.1%）でした。合格者発表は3月8日(月)に行われ、合格者数は2,739名（昨年度2,726名）でした。

続いて、後期日程試験が3月12日(金)、13日(土)及び14日(日)に行われ、3,032名が受験し欠席率は全体で54.9%（昨年度52.7%）でした。合格者発表は3月22日(月)に行われ、合格者数は751名（昨年度766名）でした。

なお、両日程合わせた合格者数は3,490名でした。

平成22年度　大阪大学入学者選抜試験（後期日程）合格者数等調

学部	学科・専攻		募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文　学　部	人文学科		40	389	9.7倍	210	45
人間科学部	人間科学科		30	235	7.8倍	131	32
外国語学部	外国語学科	中国語専攻	10	79	7.9倍	44	12
		朝鮮語専攻	5	45	9.0倍	27	6
		モンゴル語専攻	5	98	19.6倍	18	7
		インドネシア語専攻	3	42	14.0倍	14	4
		フィリピン語専攻	3	62	20.7倍	14	5
		タイ語専攻	4	41	10.3倍	16	5
		ベトナム語専攻	4	51	12.8倍	20	5
		ビルマ語専攻	5	65	13.0倍	20	6
		ヒンディー語専攻	5	65	13.0倍	25	7
		ウルドゥー語専攻	5	51	10.2倍	27	8
		アラビア語専攻	6	43	7.2倍	20	8
		ペルシア語専攻	5	75	15.0倍	19	6
		トルコ語専攻	5	65	13.0倍	21	7
		スワヒリ語専攻	5	63	12.6倍	25	6
		ロシア語専攻	6	101	16.8倍	19	7
		ハンガリー語専攻	4	43	10.8倍	13	6
		デンマーク語専攻	5	64	12.8倍	21	6
		スウェーデン語専攻	5	64	12.8倍	15	6
		ドイツ語専攻	9	83	9.2倍	39	10
		英語専攻	15	133	8.9倍	62	17
		フランス語専攻	6	39	6.5倍	17	7
		イタリア語専攻	5	63	12.6倍	20	6
		スペイン語専攻	9	77	8.6倍	41	11
		ポルトガル語専攻	7	60	8.6倍	33	8
		日本語専攻	8	62	7.8倍	33	10
	外国語学部　計		149	1,634	11.0倍	623	186
法　学　部	法学科		25	310	12.4倍	123	26
	国際公共政策学科		12	93	7.8倍	60	13
	法学部　計		37	403	10.9倍	183	39
経 済 学 部	経済・経営学科		35	403	11.5倍	160	35
理　学　部	数学科		9	100	11.1倍	51	10
	物理学科		18	242	13.4倍	130	19
	化学科		17	200	11.8倍	107	20
	生物科学科	生物科学コース	—	—	—	—	—
		生命理学コース	20	142	7.1倍	107	20
	理学部　計		64	684	10.7倍	395	69
医　学　部	医学科		15	198	13.2倍	30	15
	保健学科	看護学専攻	10	58	5.8倍	18	11
		専門高校卒業生選抜(看護学専攻)	2	0	0.0倍	—	—
		放射線技術科学専攻	5	29	5.8倍	19	5
		検査技術科学専攻	10	90	9.0倍	33	11
	医学部　計		42	375	8.9倍	100	42
歯　学　部	歯学科		6	68	11.3倍	26	9
薬　学　部	薬学科		5	37	7.4倍	15	5
	薬科学科		5	38	7.6倍	16	7
	薬学部　計		10	75	7.5倍	31	12
工　学　部	応用自然科学科		44	535	12.2倍	256	50
	応用理工学科		50	648	13.0倍	323	60
	電子情報工学科		33	354	10.7倍	183	34
	環境・エネルギー工学科		15	186	12.4倍	100	15
	地球総合工学科		24	212	8.8倍	118	25
	工学部　計		166	1,935	11.7倍	980	184
基礎工学部	電子物理科学科		20	107	5.4倍	34	21
	化学応用科学科		17	142	8.4倍	49	19
	システム科学科		34	170	5.0倍	69	39
	情報科学科		17	109	6.4倍	41	19
	基礎工学部　計		88	528	6.0倍	193	98
合　　計			667	6,729	10.1倍	3,032	751

注①　理学部、工学部、基礎工学部は、第1志望学科の志願者数である。　注②　複数の募集単位（学科・専攻）のある学部には、計を設けている。

アンドロロジー — 昨日、今日、明日 —

大学院医学系研究科教授　奥　山　明　彦

アンドロロジーは男性生殖器の発生、分化、生理、病理に関係した総合科学で1960年代の前半に日本に導入された。

1970年代の研究は分子生物学に程遠く、テストステロン、LH、FSHのRIAを用い性腺機能障害例の間脳下垂体精巣系の内分泌動態解明に着手、hCG負荷試験法を開発した。1980年代に入り新しい実験手技を導入、ラットや人の精巣でのFSHやhCG受容体の同定と生物学的特性、Y染色体長腕上やHLA関連遺伝子に近接して存在する精子形成や精子成熟関連遺伝子の同定、精子形成と温度環境、血液精巣関門の調節因子をテーマとし、臨床的には精巣静脈血中のレニン活性、停留精巣や精索静脈瘤の生殖機能を検討した。

1990年以降は不妊モデルマウスの開発や精子機能の解析を進めた。白血病ラット精巣組織より正常な生殖細胞を抽出し化学療法後の精巣へ移植、精子への分化を計り産仔を得た。臨床的には、高度に障害された精巣より精子を抽出する術式を開発。さらに前立腺癌の腫瘍マーカーを目指し前立腺幹細胞を同定した。男性更年期障害の診療に着手、男性ホルモンやメタボリックシンドロームとの関係を検討。国際的にもアジア太平洋地域との共同研究を進めた。

おくやま・あきひこ　**プロフィール**

略歴：昭和46年3月大阪大学医学部卒業。泌尿器科医を志し、同附属病院泌尿器科において医師実地修練を開始、関連病院にて臨床研鑽を積む。昭和50年5月に帰学、医学博士号を取得後、講師、助教授を経て、平成3年5月大阪大学教授に就任。大阪大学附属図書館生命科学分館長、医学系研究科博士号資格審査委員長、生殖医療センター長、前立腺センター長のほか、多数の学部内委員を務める。
学外では、社団法人日本泌尿器科学会理事長、日本アンドロロジー学会理事長、社団法人日本生殖医学会副理事長および学術総会長など、関連学会の役員を歴任。
国際的には日本とアメリカ泌尿器科学会、ヨーロッパ泌尿器科学会との合同企画を発案し、アジアオセアニア諸国とも連携を図って「日本-ASEAN男性の加齢と健康学会」を設立、昨年10月には第5回アジア太平洋男性更年期学会を主催。
本年3月末日をもって大阪大学を定年退職、現在は愛染橋病院長。

ライフスタイル医学の愉しみ

大学院医学系研究科教授　森　本　兼　曩

近代医学は感染症制御に尽力したが、今先進国での21世紀医学の課題は、ライフスタイルと健康維持動態の包括的理解に立脚した生活習慣病制御である。

1992年から約40万人の健康な勤労者の追跡集団（コホート）を創設し、平均値から個体差8つの健康習慣で定量化したライフスタイルの変容と健康度変化・疾病発症の動的な関係を明らかにしてきた。包括的健康度が良いほど、尿中変異原物質濃度が低く、染色体変異が少なく、がん免疫力（NK活性）が高いこと、また、遺伝素因でがんの死亡率・DNA損傷の修復力が異なるなど、環境刺激に対する応答感受性の個体差を決定する要因として遺伝素因の機能的な役割を実証した。

さらに、精神的なストレス負荷による唾液中コルチゾールの上昇、音楽のコルチゾール低減効果、ストレス指標とNK活性の関連性、ストレス反応としての遺伝子発現様態について解明した。脳機能イメージングにより、環境からの感性情動刺激と包括的Quality of Lifeの関連動態を解明し、生活習慣病予防の理論化・実践方法を確立した。

今後の医学研究は、健康価値意識の社会での醸成を目指し、安寧のライフスタイルと自然共生コミュニティを志向することの重要性を述べた。

もりもと・かねひさ　**プロフィール**

学歴：昭和46年東京大学工学部原子力工学科卒業。昭和53年－55年カリフォルニア大学サンフランシスコ校（大学院）（フルブライト委員会・日本学術振興会米国大学院派遣）。昭和55年東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻修了　医学博士。
職歴：昭和56年東京大学医学部助手。昭和59年同医学部助教授。昭和62年大阪大学医学部環境医学教室教授。
受賞歴：昭和62年日本環境変異原学会奨励賞。平成5年第30回ベルツ賞。平成11年第一回日本衛生学会学会賞。
主な役職：日本医学会幹事（Japan-CDC創設作業部会委員長）。日本学術会議連携会員（生活習慣病対策分科会委員長）。
主な歴任：国際労働保健会議（ICOH）アレルギー科学委員会委員長。日本衛生学会理事長／編集委員長。厚生労働省健康日本21策定委員会委員。文部科学省学術審議会専門委員。経済産業省化学品審議会専門委員。大阪大学医学部将来計画委員長、医学科教育センター長。

NMRに魅せられて42年 ― MRIに輝く未来を感じて ―

大学院医学系研究科保健学専攻教授 藤 原 英 明

昭和51年に薬学部赴任以来、34年間大阪大学にお世話になりました。赴任当時からNMR（核磁気共鳴）を中心に教育研究に携わってきましたが、その後、高感度化の種々の技法が発展してきたので、超偏極希ガスNMRに手を染めることとなり、平成7年に保健学科に移ってからは、超偏極希ガスMRIの導入と医療分野への展開に腐心しました。幸い、学生・院生・職員の協力に恵まれ、阪大方式の偏極装置の開発はじめ、COPDのような呼吸器疾患を念頭に、MRI撮像法の開発やモデルマウスを使っての種々のバイオマーカー（病態指標）の開発まで進むことができました。その他のテーマとしては、液晶NMRにおけるマジック角近くでの試料回転を利用するNMAS法の提案、包接反応のエントロピーの考察から反応の際に開放される包接水の分子数の決定、医薬品の構造活性相関に重要な疎水性パラメーターをエンタルピー項とエントロピー項に分けた二元的疎水性定数の提案、さらに、Xeガスを利用した吸着等温線における化学シフトと信号強度の同時解析の提案、などNMRからMRIそして構造活性相関やナノ素材解析に関する分野で仕事をすることができました。

今後は、これまでの成果の社会還元（産学連携）に努める所存です。これまでお世話になった皆様に心から感謝申し上げます。

ふじわら・ひであき **プロフィール**

略歴：昭和44年名古屋工業大学工業化学科卒業、昭和49年東北大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了（理学博士）、昭和52年大阪大学助手（薬学部）、昭和55年同助教授、昭和57年文部科学省在外研究員（1年間、California大学A. Pines教授）、平成4年大阪大学教授（薬学部）、平成7年大阪大学教授（医学部）。専門は、医用磁気共鳴（特に超偏極希ガスMRI）、構造活性相関．日本磁気共鳴医学会超偏極スタディグループ代表、呼吸機能イメージング研究会世話人、日本薬学会医薬化学部会役員（国際会議担当）・構造活性相関部会常任幹事、日本分析化学会近畿支部参与・欧文誌Analytical Sciences編集委員。

金属物性基礎研究から歯科臨床応用研究まで走り続けた四十年

大学院歯学研究科教授 荘 村 泰 治

私は基礎工学研究科物性学分野、藤田研究室で金属物性の基礎研究を行いましたが、ポスドクを経て企業で働いていた昭和57年に、思いもよらず歯学部歯科理工学講座の助手のポジションを紹介して頂きました。大学で研究が続けられることを切望していたので、歯科とは全く縁がありませんでしたが歯学部に着任し、今日まで28年間過ごしました。歯学部に来てからは、研究面では基礎研究から臨床応用研究に方向転換し、日本における歯科用CAD/CAM研究の黎明期にそのシステム開発に取り組みました。その後、仮想現実感触力覚デバイスに着目し、これを用いてインプラントの埋入位置決定のシミュレーションと手術支援のためのサージカルガイドをCAD/CAM法で作製するシステム“BoneNavi”を開発しました。この開発においてはJST科学技術振興信仰機構より“委託開発”の助成を和田精密歯研（株）と共同で獲得し、それを活用して開発を成功させることができました。現在この事業はベンチャー企業“Bionic（株）”に受け継がれ、すでに一千症例を経験しています。

一方、触力覚デバイスの歯科教育への応用にも取り組み、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援（現代GP）の助成を獲得して“VR歯科ハンドスキルトレーニングシステムHAP-DENT”の開発を進めました。この開発は大阪電気通信大学、“（株）テイジイエル”をはじめ歯学部の関連臨床講座の協力を得て進め、現在臨床実習に応用される段階に達しています。

振り返ると、大阪大学にほぼ40年、歯学部に28年間お世話になりました。全く歯科に関係がなかった私が、歯学部を定年退職することになるとは想像もつかなかったことです。

振り返って歯学部で研究、教育をさせていただき非常に良かった、幸せだったと思っています。これは、偏に私を導いて下さり、支えてくださった多くの恩師、先輩、同輩、そして後輩の方々のお陰と心より感謝しています。

プロフィール

略歴：昭和44年兵庫県立姫路工業大学（現・兵庫県立大学）工学部機械工学科卒業、昭和45年大阪大学大学院基礎工学研究科物理系修士課程入学、昭和50年同大学大学院基礎工学研究科博士課程単位取得退学、昭和51年工学博士取得。昭和57年大阪大学歯学部助手（歯科理工学講座）、平成6年同講師、平成11年同助教授を経て平成18年同 教授 （顎口腔機能再建学講座）、平成20年同歯学部附属歯科技工士学校校長を兼任。学内では、学生生活委員、科学教育機器リノベーションセンター運営委員、適塾管理運営委員、職員集会所「さわらび」運営委員、大学教育実践センター兼任教員など、学外では日本歯科理工学会理事、同近畿・中・四国支部長、同DMJ誌編集委員などを歴任した。また、平成17年に大学発ベンチャー企業バイオニック（株）を設立し、取締役を兼任している。

人々の口の健康を目指して ― 予防歯科学と苦楽を共にして39年 ―

大学院歯学研究科教授　雫石　聡

学生時代より、無歯科医地区活動に参加し、「予防に優る治療なし」という考えから予防歯科学教室に入局した。そして、恩師松村敏治先生からは予防歯科臨床の重要性を、常光旭先生からは研究の厳しさを教えていただいた。教授になってまず考えたことは、予防歯科学は、あくまでも臨床歯科医学の一分野であり、臨床応用を念頭においた研究をすべきであり，人々の口の健康への貢献を絶えず念頭におかなければならないということであった。デンタルバイオフィルムに関する基礎研究を継続するとともに、疫学研究を行い、その仮説から導かれるメカニズムを基礎研究により証明し、最終的にはその知見を臨床に応用することを目標とした。バイオフィルム研究では、歯周病原性細菌のバイオフィルム形成や増殖メカニズムについて、早期定着菌や唾液タンパク質との相互作用および鉄獲得機構などの面から明らかにした。これらの知見を基にバイオフィルム形成を抑制する機能性食品の開発に結びつけた。一方、歯周病のリスクファクターであるライフスタイル要因として、喫煙や飲酒習慣についての因果関係を解明し、保健指導への応用を実践した。また、口臭外来を新たに開設し、電子嗅覚装置を用いた新たな口臭検査法を開発するとともに、科学的根拠に基づいた口臭治療法の確立を行った。このように、人々の口の健康を目指して、予防歯科学に携わり、人々が心豊かに明るく生活を送ることに微力ではあったが貢献できたと思っている。

しずくいし・さとし　**プロフィール**

略歴：昭和46年大阪大学歯学部を卒業後，同年7月歯学部助手に採用。昭和53年歯学博士の学位を取得。昭和53年歯学部附属病院講師、テキサス大学オースチン校生物医学研究所研究員として2年間留学，昭和56年歯学部助教授を経て，平成4年歯学部教授（予防歯科学講座）に就任後、大学院重点化に伴い、平成12年大学院歯学研究科教授に配置換。学内では，平成13年大阪大学大学院歯学研究科長補佐、平成14年大阪大学歯学部附属歯科技工士学校長、平成14年大阪大学評議員、平成18年大阪大学歯学部附属病院長を併任。学外では、歯科医師国家試験委員、薬事・食品衛生審議会専門委員、日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員、同科学研究費委員会専門委員、医薬品医療機器総合機構専門委員、日本口腔衛生学会常任理事、日本歯科医学会理事、国際歯科研究学会日本部会会計理事、Journal of Dental Research編集委員、国際歯科研究学会（IADR）Nominating Committee委員、IADR Constitution Committee委員等々を歴任。

演劇学の視点によるギリシア・ローマ演劇研究の可能性

大学院言語文化研究科教授　木　村　健　治

ギリシア・ローマ演劇研究は従来「戯曲」としての演劇を研究するというのが一般的であり、実際に舞台の上で起こっていることを考察する視点を欠いていた。しかし、近年この欠落を演劇学の視点の導入によって補うことによりギリシア・ローマ演劇研究の見直しが行われるようになってきている。本最終講義では主として演劇記号論に依拠しながら、ギリシア・ローマの俳優と演技について若干の考察を行った。アリストテレス『詩学』によって、ギリシアの俳優の演技に世代間の差があることが分かり、演技に様式性を尊ぶ俳優と写実を求める俳優がいることが確認できた。このことを念頭におきながらローマのfabula palliataの俳優で検証してみると、fabula palliataは喜劇であり、したがって、わずかに知られる資料からは俳優がいかにリアルに演技できるかということに重点があり、様式性の問題は、アリストテレスが扱っていた悲劇の俳優に関わることではないかとの推測が可能になった。喜劇における様式性についてはテレンティウスの写本の挿絵が参考になるが、ここでも身振りにおける型については限定的なものではなかったかと思われる。

きむら・けんじ　**プロフィール**

略歴：昭和44年3月京都大学文学部文学科西洋古典語学・西洋古典文学専攻卒業、昭和46年3月京都大学大学院文学研究科言語学（西洋古典語学・西洋古典文学）専攻修士課程修了、昭和50年5月米国ミシガン大学大学院古典学専攻修士課程修了、昭和51年3月京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、昭和51年4月大阪樟蔭女子大学学芸学部英米文学科講師、昭和56年4月同助教授、平成2年4月大阪大学言語文化部助教授、平成4年4月同教授、平成17年4月大阪大学大学院言語文化研究科に配置換。研究の対象はギリシア・ローマ演劇であるが、演劇学の視点による論文の他にローマ演劇、オウィディウス『悲しみの歌・黒海からの手紙』（本邦初訳）、キケロー（共訳）の飜訳があり、さらに、京都新聞で「新劇時評」を担当するという活動も行った。

生と芸術あるいは知との親和性 ― 生の新たな可能性 ―

大学院言語文化研究科教授　金　子　元　臣

共同体や国家という枠組みの中で、個としての人間主体に先立って、人を生命体としてとらえ、身体・生・生命というレヴェルでの関係性を知の対象とした動きが強まり広がっていきますが、ドイツの世紀転換期、「生」（Leben）「生活世界」（Lebenswelt）ととらえられるものと芸術や文化との関連をめぐる主張、創作、運動が展開されます。この時期の現象は、その現象の強さのゆえに、「存在する世界」ではない「生成する世界」へ、「現実」の認識へと向かう経験的「知」へと、知の転換を促進しました。そして世紀転換期の「文化」の特質である「多様性」「複合性」という現象は、「力」の作用としての「生」というものの表れとして捉えられました。サブカルチュアの領域で現れる、人間の身体的なもののパフォーマティヴな運動を創造のメディア化する動きは、いわば生命体としてのヒトという即物的なレヴェルを機能させる、言葉をかえると「剥き出しの生」であるゾーエーの解放に、類としてのヒトの自由と幸福をかけるということでした。

かねこ・もとおみ　**プロフィール**

略歴：昭和 44 年金沢大学法文学部文学科卒業、昭和 49 年北海道大学大学院文学研究科修士課程独文学専攻修了、同年 8 月同博士課程退学、昭和 49 年大阪府立大学教養部助手、昭和 56 年大阪府立大学総合科学部講師、平成 2 年大阪大学言語文化部助教授、平成 6 年大阪大学言語文化部教授、平成 17 年大阪大学大学院言語文化研究科教授、研究テーマは世紀転換期のドイツ・オーストリアの芸術・文化。

地球人として誇れる日本をめざして ― 日米関係からの洞察と提言 ―

大学院国際公共政策研究科教授　松　田　　武

米国の戦略につき従うことが自動的に日本の国益にかなうと言い張れた時代は過ぎ去ろうとしている。戦後の日本は、米国と同盟関係を結び、政治・経済・軍事の面で「対米依存」を続けてきたが、日米安保条約改定 50 周年を契機に「日本は国際社会で何をしたいのか」「国際社会にどう貢献したいのか」を明確にする必要があろう。松田の提言する「自立と共生」のグランド・デザイン、それが人類の幸福に貢献し、対等で平和な日米関係の構築をめざす 21 世紀の日本のプログラムである。それは、「良心的兵役拒否」の思想と「高次の道義的現実主義」に基づいている。前者は、日本が国単位で平時において軍隊の派遣以外の方法により国際貢献を行うこと、後者は、民生支援を必要とする世界の国々や地域を対象に、民生支援活動を持続的に行い、それにより、日本を攻撃しようという気持ちが世界のどの国にも起きない国へと日本が様変わりすることを意味する。そのために「若者」を中心とする地球民生支援部隊の創設を提言したい。「地球民生支援部隊」を通して上記の思想を平時に持続的に実践することにより、国民は地球人としての義務と責任を果たし、世界に誇りうる人間に様変わりすることが期待される。

まつだ・たけし　**プロフィール**

略歴：昭和 44 年米国ウィスコンシン大学卒業、昭和 45 年大阪外国語大学英語学科卒業、昭和 49 年ウィスコンシン大学大学院修士課程修了、M.A.（米国史）を取得、昭和 54 年同大学大学院博士課程修了、Ph.D.（米国史）を取得、平成 2 年大阪外国語大学外国語学部教授、平成 15 年同大学副学長、平成 16 年同大学理事・副学長、平成 19 年大阪大学国際公共政策研究科教授、昭和 60 年メリーランド大学客員研究員、昭和 61 年テキサス大学サンアントニオ校、フルブライト客員教授、平成 7 年ケンブリッジ大学ウルフソン・カレッジ、同年ハーバード大学エドウィン・ライシャワー日本研究所客員研究員、平成 13 年ウッドロー・ウィルソン国際学術研究センター客員研究員、日本アメリカ学会評議員、編集委員、理事、監事、日本国際交流基金日米センターのアベ・フェローシップ・プログラム委員および委員長、関西アメリカ史研究会代表幹事、関西日米交流フォーラム会長、幹事。

保証責任制限の将来

大学院高等司法研究科教授　小　杉　茂　雄

保証債務が履行請求された場合、その保証金額によっては、当該保証人は、何らの利得を得ないにもかかわらず、全財産を失うことになることがある。保証人の責任が顕在化した場合の保証責任の減縮の動きがやっと2004（平成16）年の民法の改正により、部分的な分野ではあるが、保証人の責任制限の規定がおかれることになった。それでも、保証債務の危険性に対する対応は、十分といえるものではないと考え、保証人の資力（担保価値。原則、保証契約締結時）に応じた責任を認めるべきで、信義則や身元保証法5条の類推適用などのほかに、本来、逆の立場である債権者保護のための規定である民法450条などを根拠に責任制限の解釈論を以前から提唱していた。さらに、全般的な責任制限の立法を期待し、その理由とその将来を考えた。

こすぎ・しげお　プロフィール

略歴：昭和22年生まれ。昭和50年大阪大学大学院法学研究科民事法学専攻修士課程修了（法学修士）、昭和52年最高裁判所司法修習修了（第29期）。同年上原綜合法律事務所勤務弁護士。昭和56年西南学院大学法学部専任講師。翌年助教授。昭和62年姫路獨協大学法学部教授。同年弁護士再登録。翌年上原綜合法律事務所勤務。平成16年大阪大学大学院高等司法研究科教授。
研究テーマ：担保法一般、物権法など。所属学会は日本私法学会、金融法学会、比較法学会。
最近の論文：「保証の改正をどのように考えるか」椿寿夫ほか編『民法の改正を考える』法律時報増刊。「破綻した有名百貨店の代表取締役の個人保証の効力」（判例研究）銀行法務「21」641号。「消費者金融業者の全取引経過開示」（判例研究）西口ほか編『文書提出等をめぐる判例の分析と展望』金融・商事判例増刊1311号など。

パイ中間子とともに歩んで

核物理研究センター教授　土　岐　　博

パイ中間子は湯川博士が原子核を形成する力を与える粒子としてその存在を予言した素粒子である。それにもかかわらず、パイ中間子は原子核の記述に陽には扱われてこなかった。その原因は多体理論においてパイ中間子を取り扱う方法が確立されていないことに起因する。

南部博士によれば全ての粒子の質量は相互作用により真空が超伝導のように相転移を起こすことによって生じる。そのさいに擬スカラー粒子である質量を持たないパイ中間子が生まれる。そのパイ中間子は素粒子及びそれらが集まって出来る物質の構造に深くかかわっているはずである。 パイ中間子は擬スカラー粒子であるが故にその取り扱いが難しく、今日まで正確に扱う方法が無かったと言える。

思えば、ドイツでポスドクとして本格的に研究を始めて以来、パイ中間子の不思議な挙動を追跡し続けてきたように思うし、これからもその物理を追い続けているような気がしている。これまで多くの研究者との議論を楽しみ共同研究を楽しんできた。その全ての人たちから多くのことを学んできたし、それぞれの人の発想の違いに驚きを感じてきた。それにもまして、自然が呼びかける声に耳を傾け、その動きに目を奪われてきた。環境と自然体でつき合ってきた。気どらず自然にしたがって、研究を続けてこれたことを全ての人に感謝したいと思っている。

最終講義では私自身のパイ中間子とともに歩んで来た道のりの話をした。

多体理論の方法で自然にパイ中間子を扱う理論ができたと思っている。

とき・ひろし　プロフィール

略歴：昭和44年に大阪大学理学部物理学科を卒業。昭和49年に大阪大学で理学博士を修得した。その後、3年間西ドイツのユーリッヒ原子核研究所、さらに3年間レーゲンスブルグ大学でポスドクとして研究に専念した。昭和55年にアメリカのミシガン州立大学で助教授として研究・教育に従事した。昭和58年に東京都立大学に助教授として帰国し、後に教授となる。平成6年に大阪大学核物理研究センターの教授に就任し今日に至っている。その間6年間センター長もつとめた。大阪大学では総長補佐も務める一方で、物理学会の理事としても国際交流関係の仕事に従事した。原子核を理論的に研究することを主とするが、クォークの物理や超新星爆発、環境と結合した電界回路理論などを研究してきた。

第6回（平成21年度）日本学術振興会賞受賞

この賞は、「我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルにおいて発展させるためには、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を早い段階から顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援していく必要がある。」という趣旨から平成16年度に創設された賞です。対象は、人文・社会科学及び自然科学の全分野における45歳未満の研究者です。

授賞式は、平成22年3月1日に秋篠宮同妃両殿下御臨席の下、日本学士院において行われました。

工学研究科生命先端工学専攻の菊地和也教授が、「生体内分子を可視化する化学プローブのデザイン・合成・生物応用の研究」について、その研究業績を評価されて第6回日本学術振興会賞 を受賞しました。受賞理由は、「同氏の業績は、化学、生物学、薬学、医学の分野において基礎的研究を応用研究や臨床研究の発展に結びつけることで多彩な貢献を果たすものであり、今後のさらなる発展が期待される。」とのことです。

（工学研究科・工学部）

医学系研究科感染免疫医学講座免疫制御学の竹田潔教授が、第6回日本学術振興会賞を受賞しました。今回の受賞は、「自然免疫系による腸管粘膜免疫系の制御機構の解明」が評価されたものです。竹田潔教授は、腸内細菌による自然免疫系の恒常的活性化が、これまで発症の原因が不明とされていた炎症性腸疾患の発症に深く関与していることを、遺伝子改変マウスを用いて明らかにしました。さらに腸管粘膜局所に特有の自然免疫系細胞が存在することをつきとめ、この細胞が腸内細菌依存性に炎症を引き起こすT細胞の分化を誘導することを明らかにしました。このように、腸内細菌と自然免疫系による腸管粘膜免疫系の制御機構の理解に貢献してきました。これらの成果は、現在難治性疾患とされる炎症性腸疾患の病態解明、さらには新規治療法の開発に光明をともすものとして注目されています。

（医学系研究科・医学部）

医学系研究科神経科学講座分子神経科学の山下俊英教授が、第6回日本学術振興会賞を受賞しました。今回の受賞は、「損傷中枢神経回路の再生と可塑性を制御する分子機構の解明」が評価されたものです。脳の虚血や外傷により中枢神経のネットワークが破壊されると、回復は困難となります。これらの疾患による神経症状からの回復を図るためには、神経回路損傷の分子機構を理解することが必要であります。　山下教授はこれまで機能が不明であったニューロトロフィン受容体であるp75が、細胞骨格の調節を介して軸索伸展を制御すること、また軸索の再生を阻害するタンパク質の受容体であることを解明し、p75が中枢神経再生阻害の中心的役割を果たしていることを明らかにしました。一連の研究により、損傷された中枢神経がなぜ再生しないのかという古くからの疑問に回答を与えることとなりました。さらに特筆すべきは、再生阻害のシグナル伝達を抑制することで、中枢神経疾患による神経症状を回復させうる薬剤を開発していることであり、極めて有望な中枢神経の再生治療薬として海外を含め各方面より注目を集めています。

（医学系研究科・医学部）

藤原守准教授「アメリカ物理学会・American Physical Societyフェロー（APS Fellow）授与」

核物理研究センターの藤原　守准教授に2009年のアメリカ物理学会（会員数4万人）フェロー（APS Fellow）の称号が授与されました。APS Fellowはアメリカ物理学会での顕著な学術的功績があった者に対して授与されるものです。アメリカ物理学会・審査委員会の推薦を経て、評議会の承認を受けて称号が授与されます。今回の授与理由は「For many and continuing contributions to nuclear physics involving innovative use of high resolution spectrometers for charge-exchange reactions, and leadership in wide-ranging international collaborations and activities」です。核物理研究センターでの高分解能磁気スペクトロメーターの建設や、その実験装置を用いた原子核物理学分野での国際共同研究、アメリカやヨーロッパの研究者と共に行った独創的アイデアの国際的研究成果が高く評価されました。

（核物理研究センター）

塩田陽一君国際会議「11th joint MMM-Intermag Conference」でBest Poster Awardを授賞

基礎工学研究科　物質創成専攻　物性物理工学領域　電子相関物理博士前期課程1年の塩田陽一君が、2010年1月に開催された米国物理学協会及びIEEE主催の国際会議・「11th joint MMM-Intermag Conference」において発表をし、BestPoster Awardを受賞しました。

この賞は、本国際会議において最も優れたポスター発表を行った者に対して授与されるものであり、今回ポスター発表総数160件の中からベストポスターに選出されました。

授賞対象となった研究は、「Voltage induced magnetic anisotropy change in an ultrathin Fe_80 Co_20 / MgO junctions」であり、強磁性金属の磁化方向を電界によって制御することを目指したものです。今回の研究では、Au/超薄膜FeCo/MgO/ポリイミド/ITO接合においてアシスト磁界下での電界誘起磁化反転の観測に室温で成功しました。さらに、より応用に近い系である磁気トンネル接合においても同様の電界誘起磁気異方性制御に成功し、強磁性共鳴測定を利用して磁気異方性変化の定量評価を行いました。

磁化方向を電界で制御することは、低消費電力性を有するデバイスの実現に繋がり、次世代の固体磁気メモリーなどへの応用が期待されます。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

阿部真之准教授「ファインマン賞」受賞

工学研究科の阿部真之准教授と杉本宣昭特任講師がファインマン賞を受賞しました。アジア人では初めての受賞となります。ファインマン賞は、現在のナノテクノロジーを提唱したと言われるリチャード・P・ファインマン（ジュリアン・S・シュウィンガー、朝永振一郎とともに1965年ノーベル物理学賞を受賞）にちなんだ賞です。阿部准教授と杉本特任講師は原子間力顕微鏡の技術を用い、個々の原子を見て・識別して・動かすという実験を室温で行ったことで受賞に至りました。授賞式は、1月16日(土)米国カリフォルニア州シェラトンホテル・パロ・アルトで行われました。

授賞式にて（左端が阿部真之准教授）

（工学研究科・工学部）

恵比須繁之教授「歯科医学会会長賞」受賞

歯学研究科の恵比須繁之教授が、平成21年度日本歯科医学会会長賞（研究部門）を受賞されました。

この賞は、日本歯科医師会会員（65,327名）および歯科医学研究・教育者（27,931名）から構成されている日本歯科医学会の最高顕彰として、歯科医学研究（研究部門）、歯科医学教育（教育部門）、地域歯科医療（医療部門）に顕著な功績のあった者に授与されます。

恵比須教授は、歯科保存学領域を中心とした歯科医学研究に取り組み、多大な成果を国内外に発信し、日本の歯科保存学研究を国際的に高められました。特にう蝕（虫歯）および歯周病の原因因子であるデンタルプラークの実態の解明と予防・治療に係る研究では、プラークのバイオフィルムとしての特性を明らかにするとともに、口腔細菌の定着機構を詳細に解析し、エビデンスに基づいたプラークの臨床的排除法を提唱されました。今回の受賞はこれらの業績が高く評価されたものです。

授賞式は1月22日(金)日本歯科医師会館（東京）にて行われました。

（歯学研究科・歯学部）

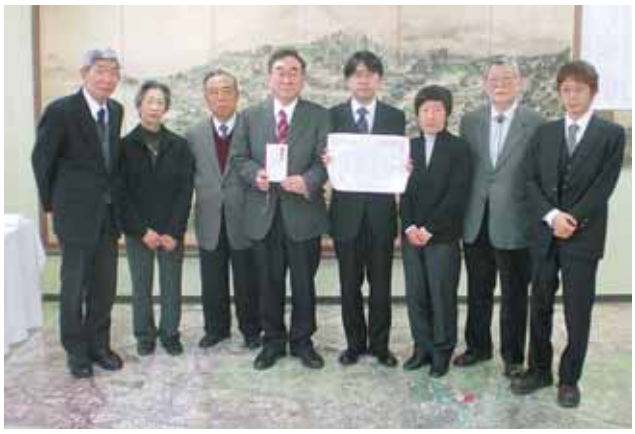
外邦図研究グループ(代表　小林　茂　教授)が日本国際地図学会特別賞を受賞

文学研究科文化動態論専攻共生文明論講座（文化形態論専攻人文地理学講座兼任）の小林茂教授が代表を務める外邦図研究グループが日本国際地図学会特別賞を受賞しました。

この日本国際地図学会特別賞は、地図学に特別な貢献があった人や団体を対象とする賞で、数年前に同学会に表彰制度ができて以後、最初の受賞となりました。今回の受賞は、外邦図研究ならびに外邦図デジタルアーカイブの構築が評価されたことによるもので、日本の地図史料の保存と活用、地図文化の継承を図り、地図学の発展に大きく貢献するものであると認められました。

表彰式は、日本国際地図学会　平成22年度通常総会中の2月27日(土)に、日本地図センターにおいて行われ、出席していた外邦図研究関係者とともに記念撮影を行いました。

（文学研究科・文学部）



左から4人目　小林教授

江口太郎教授「平成21年度の日本化学会･化学教育賞」受賞

総合学術博物館の江口太郎教授は、「広範な世代への化学的思考の伝達手法の設計と啓発の実践」により、平成21年度の日本化学会･化学教育賞を受賞されました。

江口教授は、「ふつうの言葉で化学を語る」ことに常に腐心され、大学教育においては文科系・理科系を問わず、「古い理化学機器」の教育への有効活用や体験的課題追求型授業の構築など、「思考を長引かせる」ためのしかけを工夫されてこられました。また、初等中等教育や生涯教育においては、大学博物館での常設展示・企画展や小学校連携授業、子ども科学教室、サイエンスカフェなどに取り組まれ、大学博物館の「サイエンス・インタープリタ」としての機能を最大限に活用したわかりやすい教育活動を長年にわたって実践し、まさに「広範な世代への化学コミュニケーション・デザイン」に貢献してこられました。今回、このようなユニークな化学教育活動が評価され、第34回目の歴史ある同賞を受賞されることとなり、日本化学会第90春季年会において記念講演ならびに表彰式がおこなわれました。

大阪大学公式HP「だれもが使えるウェブコンクール」入賞

大阪大学公式HPが「だれもが使えるウェブコンクール」で入賞しました。

このコンクールは、高齢者や障害者などをはじめとする多くの人々が多様な環境でも使える（アクセスできる）ウェブを表彰し、利用者の視点を重視し、ほんとうに役立つウェブが広がることを目的としています。

今回の受賞は、本学ホームページの見やすさ、構成、表現などの観点から、多様な環境で使えることが評価されたものです。

3月26日(金)に毎日ホール（毎日新聞東京本社）で開催された授賞式には、ウェブデザインユニット伊藤雄一准教授が出席し、賞状が授与されました。受賞の際のスピーチでは、昨今の大学のおけるウェブを通じた情報発信の重要性とその取り組みについて触れ、受賞団体のうち唯一の「大学」であったことからも注目を集めました。

〈参考〉

だれもが使えるウェブコンクール
http://daremoga.jp/

（ウェブデザインユニット）

新役員紹介

尾　山　眞之助　（おやま　しんのすけ）　理事・副学長

【略歴】
昭53. 4　文部省入省
平 7. 7　文部省初中局企画官
8. 7　文部省生涯局青少年教育課長
10. 7　文部省助成局教職員課長
12. 6　文化庁芸術文化課長
14. 4　文部省科政局政策課長
15. 7　文化庁政策課長
16. 7　文部省スポーツ局スポーツ・青少年統括官
17. 4　国立教育政策研究所次長
18. 7　官房審議官（官房担当）
19. 1　文化庁文化部長
20. 7　（独）日本学生支援機構理事（奨学金担当）
22. 4　国立大学法人大阪大学理事・副学長

新総長補佐紹介

大　竹　文　雄　（おおたけ　ふみお）　社会経済研究所教授

【略歴】
昭58. 3　京都大学経済学部経済学科卒業
60. 3　大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了
60. 6　大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程退学
60. 7　大阪大学助手経済学部
63. 4　大阪府立大学経済学部講師
平 2. 4　大阪大学助教授社会経済研究所
13. 5　大阪大学教授社会経済研究所
16. 4　大阪大学教授社会経済研究所附属行動経済学研究センター
17. 4　大阪大学社会経済研究所副所長（平19.3まで）
19. 4　大阪大学社会経済研究所長（平21.3まで）

中　田　一　博　（なかた　かずひろ）　接合科学研究所長

【略歴】
昭47. 3　大阪大学工学部溶接工学科卒業
49. 3　大阪大学大学院工学研究科（修士課程）溶接工学専攻修了
52. 4　大阪大学大学院工学研究科（博士課程）溶接工学専攻単位取得退学
52. 5　大阪大学助手溶接工学研究所
平 5. 9　工学博士（大阪大学）
6. 4　大阪大学助手溶接工学研究所附属高エネルギー溶射研究センター
6. 5　大阪大学助教授溶接工学研究所附属高エネルギー溶射研究センター
8. 5　大阪大学助教授接合科学研究所附属再帰循環システム研究センター
9. 1　大阪大学助教授接合科学研究所
14.10　大阪大学教授接合科学研究所
21. 4　大阪大学接合科学研究所長（平23.3まで）

新総長補佐紹介

福　澤　正　洋　（ふくざわ　まさひろ）　医学部附属病院長

【略歴】

昭50. 3	大阪大学医学部医学科卒業
50. 4	大阪大学医学部附属病院第一外科において研究・診療の補助に従事
50. 7	医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）（昭51.6まで）
51. 8	市立芦屋病院診療局医師
52. 8	医療法人川崎病院診療部外科外科医員
54. 7	大阪大学医学部研究生（外科学第一教室）
54.11	医員（大阪大学医学部附属病院）
56. 7	医療法人錦秀会阪和病院（小児外科）
57. 3	医員（大阪大学医学部附属病院）
58. 5	大阪大学助手医学部
60.12	医学博士（大阪大学）
63. 1	大阪府立母子保健総合医療センター病院周産期第三部診療主任
63. 4	大阪府立母子保健総合医療センター病院周産期第三部医長
平元.10	大阪大学助手医学部
6. 1	日本赤十字社下伊那赤十字病院副院長兼第二外科部長
7. 5	大阪大学助手医学部
10. 1	大阪大学助教授医学部
10. 2	学校法人日本大学医学部外科学講座外科1部門教授
15. 6	大阪大学教授大学院医学系研究科
16. 4	大阪大学医学部附属病院外科系医長（平18.3まで）
22. 4	大阪大学医学部附属病院長（平24.3まで）

新部局長紹介

片　山　　剛　（かたやま　つよし）　大学院文学研究科長・文学部長

【略歴】

昭52. 3	東京外国語大学中国語学科卒業
55. 3	東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専門課程修士課程修了
56. 9	東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専門課程第1種博士課程退学
56.10	高知大学講師人文学部
59. 4	高知大学助教授人文学部
平元. 4	大阪大学助教授文学部
8. 4	大阪大学教授文学部
11. 4	大阪大学教授大学院文学研究科
18. 4	大阪大学大学院文学研究科副研究科長（22.3まで）
20. 4	大阪大学教育研究評議員（22.3まで）
22. 4	大阪大学大学院文学研究科長・文学部長（24.3まで）

福　澤　正　洋　（ふくざわ　まさひろ）　医学部附属病院長

【略歴】

昭50. 3	大阪大学医学部医学科卒業
50. 4	大阪大学医学部附属病院第一外科において研究・診療の補助に従事
50. 7	医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）（昭51.6まで）
51. 8	市立芦屋病院診療局医師
52. 8	医療法人川崎病院診療部外科外科医員
54. 7	大阪大学医学部研究生（外科学第一教室）
54.11	医員（大阪大学医学部附属病院）
56. 7	医療法人錦秀会阪和病院（小児外科）
57. 3	医員（大阪大学医学部附属病院）
58. 5	大阪大学助手医学部
60.12	医学博士（大阪大学）
63. 1	大阪府立母子保健総合医療センター病院周産期第三部診療主任
63. 4	大阪府立母子保健総合医療センター病院周産期第三部医長
平元.10	大阪大学助手医学部
6. 1	日本赤十字社下伊那赤十字病院副院長兼第二外科部長
7. 5	大阪大学助手医学部
10. 1	大阪大学助教授医学部
10. 2	学校法人日本大学医学部外科学講座外科1部門教授
15. 6	大阪大学教授大学院医学系研究科
16. 4	大阪大学医学部附属病院外科系医長（平18.3まで）
22. 4	大阪大学医学部附属病院長（平24.3まで）

新部局長紹介

森　崎　市治郎　（もりさき　いちじろう）　歯学部附属病院長

【略歴】

昭49. 3　大阪大学歯学部卒業
53. 8　大阪大学助手歯学部
59. 5　大阪大学講師歯学部附属病院
平元. 2　大阪大学助教授歯学部附属病院
4.10　大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部長（平12.11まで）
12.11　大阪大学教授歯学部附属病院
12.11　大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部長（平13.4まで）
13. 4　大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部長
16. 4　大阪大学歯学部附属病院副病院長（平18.3まで）
18. 4　大阪大学教育研究評議員（平20.3まで）
20. 4　大阪大学歯学部附属病院副病院長（平22.3まで）
22. 4　大阪大学歯学部附属病院長（平24.3まで）

木　村　茂　雄　（きむら　しげお）　大学院言語文化研究科長

【略歴】

昭53. 3　東京大学文学部卒業
53. 4　東京大学大学院人文科学研究科博士前期課程入学
56. 3　同上修了
56. 4　東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程入学
58. 3　同上退学
58. 4　大阪大学助手言語文化部
60. 4　大阪大学講師言語文化部
平 2. 7　大阪大学助教授言語文化部
14. 4　大阪大学教授言語文化部
17. 4　大阪大学大学院言語文化研究科副研究科長（平21.3まで）
18. 4　大阪大学教育研究評議員（平21.3まで）
22. 4　大阪大学大学院言語文化研究科長（平 24.3まで）

難　波　啓　一　（なんば　けいいち）　大学院生命機能研究科長

【略歴】

昭49. 3　大阪大学基礎工学部生物工学科卒業
51. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻前期課程修了
51. 3　工学修士（大阪大学）
55. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻博士課程修了
55. 3　工学博士（大阪大学）
55. 4　日本学術振興会奨励研究員
56. 4　大阪大学基礎工学部三井利夫研究室研究生入学
56.10　ブランダイス大学ローゼンスティール基礎医科学研究センターリサーチアソシエイト採用
59. 1　ヴァンダビルト大学分子生物学科リサーチアソシエイト採用
60. 7　同上リサーチインストラクター採用
61. 3　ブランダイス大学ローゼンスティール基礎医科学研究センターシニアリサーチアソシエイト採用
61.11　新技術事業団（現：科学技術振興機構）創造科学技術推進事業（ERATO）宝谷超分子構造 プロジェクト基本解析グループ グループリーダー
平 3. 4　同上技術参事兼任
4. 1　松下電器産業株式会社先端技術研究所リサーチ・ディレクター採用
9.10　新技術事業団（現：科学技術振興機構）創造科学技術推進事業（ERATO）難波プロトニックナノマシンプロジェクト総括責任者兼任
14. 4　大阪大学 教授 大学院生命機能研究科採用
22. 4　大阪大学大学院生命機能研究科長（平24.3まで）

新部局長紹介

谷　口　勢津夫　（たにぐち　せつお）　大学院高等司法研究科長

【略歴】

昭56. 3　京都大学法学部卒業
58. 3　京都大学大学院法学研究科公法専攻修士課程修了
59. 4　甲南大学法学部助手
61. 3　京都大学大学院法学研究科公法専攻博士後期課程研究指導認定退学
61. 4　甲南大学法学部講師
63. 4　甲南大学法学部助教授
平 6. 4　甲南大学法学部教授
14. 4　甲南大学大学企画室室長（平15.3まで）
14.10　甲南大学法曹養成高等教育研究所所長（平15.3まで）
16. 4　大阪大学教授大学院高等司法研究科
22. 4　大阪大学大学院高等司法研究科長（平24.3まで）

長　谷　俊　治　（はせ　としはる）　蛋白質研究所長

【略歴】

昭49. 3　大阪大学理学部生物学科卒業
51. 3　大阪大学大学院理学研究科生理学専攻前期課程（修士課程）修了
52. 3　大阪大学大学院理学研究科生理学専攻後期課程（博士課程）退学
52. 4　大阪大学理学部教務職員
54. 4　大阪大学助手理学部
54.12　理学博士（大阪大学）
62. 3　名古屋大学助教授農学部
平 4. 1　大阪大学教授たんぱく質研究所
22. 4　大阪大学蛋白質研究所長（平成24.3まで）

栖　原　敏　明　（すはら　としあき）　超高圧電子顕微鏡センター長

【略歴】

昭48. 3　大阪大学工学部電子工学科卒業
50. 3　大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻（修士課程）修了
53. 3　大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻（博士課程）修了
53. 3　工学博士（大阪大学）
53. 4　大阪大学助手工学部
平 2.12　大阪大学講師工学部
3.12　大阪大学助教授工学部
10. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
14. 8　大阪大学教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学超高圧電子顕微鏡センター長（平24.3まで）

新部局長紹介

菊　野　　亨　（きくの　とおる）　国際教育交流センター長

【略歴】
昭45. 3　大阪大学基礎工学部制御工学科卒業
47. 3　大阪大学基礎工学研究科物理系専攻修士課程修了
50. 3　大阪大学基礎工学研究科物理系専攻博士課程修了
50. 3　工学博士（大阪大学）
50. 4　広島大学講師工学部
54. 4　広島大学助教授工学部
62.10　大阪大学助教授基礎工学部
平 2.10　大阪大学教授基礎工学部
9. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科
12. 4　大阪大学評議員（平14.3まで）
14. 4　大阪大学教授大学院情報科学研究科
16. 4　大阪大学中之島センター長（平17.12まで）
20. 4　大阪大学留学生センター長（平22.3まで）
22. 4　大阪大学国際教育交流センター長（平24.3まで）

松　村　道　雄　（まつむら　みちお）　太陽エネルギー化学研究センター長

【略歴】
昭47. 3　大阪大学基礎工学部合成化学科卒業
49. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻修士課程修了
51. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻博士課程退学
51. 4　大阪大学助手基礎工学部
55. 1　工学博士（大阪大学）
60.12　大阪大学講師基礎工学部
平元. 2　大阪大学助教授基礎工学部
元. 4　日本チバガイギー株式会社国際科学研究所新素材研究部部長
4.10　大阪大学教授有機光工学研究センター
13. 4　大阪大学教授太陽エネルギー化学研究センター
22. 4　大阪大学太陽エネルギー化学研究センター長（平24.3まで）

赤　井　久　純　（あかい　ひさずみ）　ナノサイエンスデザイン教育研究センター長

【略歴】
昭46. 3　大阪大学理学部物理学科卒業
46. 4　大阪大学理学部聴講生
49. 3　大阪大学大学院理学研究科修士課程物理学専攻修了
52. 3　大阪大学大学院理学研究科博士課程（後期課程）物理学専攻修了理学博士（大阪大学）
52. 4　日本学術振興会奨励研究員
53. 4　奈良県立医科大学助手
54.11　奈良県立医科大学講師
60. 4　奈良県立医科大学助教授
平 6. 3　大阪大学教授教養部
6. 4　大阪大学教授理学部
8. 4　大阪大学教授大学院理学研究科
15. 4　大阪大学理学研究科物理学専攻長（平17.3まで）
16. 4　大阪大学理学部物理学科長（平17.3まで）
22. 4　大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター長（平24.3まで）

新部局長紹介

青　江　秀　史　（あおえ　ひでふみ）　知的財産センター長

【略歴】

昭54. 4　富士通株式会社入社
平 3.12　富士通株式会社渉外本部第一企画部プロジェクト課課長
4.12　富士通株式会社ブリュッセル駐在員事務所所長
10. 4　富士通株式会社広報室室長
13.10　富士通株式会社経営戦略室主席部長
14.10　富士通株式会社CS経営推進室室長
16. 4　大阪大学教授大学院高等司法研究科
18. 4　大阪大学総合計画室員（平22. .3まで）
大阪大学大学院法学研究科附属法政実務連携センター長（平22.3まで）
22. 4　大阪大学知的財産センター長（平24.3まで）

新施設長紹介

矢　谷　博　文　（やたに　ひろふみ）　歯学部附属歯科技工士学校長

【略歴】

昭55. 3　大阪大学歯学部卒業
59. 3　広島大学大学院歯学研究科単位習得退学
62. 4　岡山大学助教授歯学部
平12. 4　岡山大学教授歯学部
15. 4　大阪大学教授大学院歯学研究科
17. 4　大阪大学歯学部附属歯科技工士学校長（平18.3まで）
18. 4　大阪大学歯学部附属病院副病院長（平19.3まで）
21. 4　大阪大学大学院歯学研究科副研究科長（平22.3まで）

植　松　利　夫　（うえまつ　としお）　大学院法学研究科附属法政実務連携センター長

【略歴】

平 5. 3　東京大学法学部卒業
5. 4　大蔵省主計局総務課
6. 5　大蔵省主計局調査課
7. 6　フランス留学
9. 7　大蔵省大臣官房調査企画課
11. 7　内閣官房内閣内政審議室（内閣総理大臣秘書官補）
12. 7　厚生省保険局国民健康保険課課長補佐
13. 1　厚生労働省保険局国民健康保険課課長補佐
14. 7　金融庁総務企画局信用課課長補佐
16. 7　財務省主計局主計官補佐（厚生労働第六、七係主査）
17. 7　財務省主計局主計官補佐（厚生労働第五係主査）
18. 7　財務省主計局主計官補佐（厚生労働第三係主査）
20. 7　財務省主計局主計官補佐（厚生労働第一、二係主査）
21. 8　大阪大学教授大学院法学研究科
22. 4　大阪大学大学院法学研究科附属法政実務連携センター長（平24.3まで）

新施設長紹介

山　中　伸　介　（やまなか　しんすけ）

大学院工学研究科附属フロンティア研究センター長

【略歴】

昭54. 3	大阪大学工学部原子力工学科卒業
56. 3	大阪大学大学院工学研究科原子力工学専攻（前期課程）修了
58. 5	大阪大学大学院工学研究科原子力工学専攻（後期課程）退学
58. 6	大阪大学助手工学部
平元.11	工学博士（大阪大学）
6.12	大阪大学助教授工学部
10. 4	大阪大学助教授大学院工学研究科
10. 5	大阪大学教授大学院工学研究科
19. 4	大阪大学評価・広報室員（平21.3まで）
21. 4	大阪大学評価室員（平23.3まで）
22. 4	大阪大学大学院工学研究科フロンティア研究センター長（平24.3まで）

谷　池　雅　子　（たにいけ　まさこ）

大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター長

【略歴】

昭58. 3	大阪大学医学部医学科卒業
58. 4	大阪大学医学部（小児科学教室）において研究に従事
58. 5	大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
58. 7	医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
59. 6	大阪警察病院小児科医員（～61.6.30）
60. 7	大阪大学医学部研究生（小児科学教室）
平元. 7	医員（大阪大学医学部附属病院）
4. 5	米国ノースカロライナ大学医学部病理学教室研究員 Postdoctoral Fellow
6. 6	大阪大学助手医学部
9. 1	医学博士（大阪大学）
11. 4	大阪大学助手大学院医学系研究科
14. 4	大阪大学講師大学院医学系研究科
16.11	大阪大学助教授大学院医学系研究科
18. 4	大阪大学特任教授（常勤）大学院医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター
21. 4	大阪大学教授大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科
22, 4	大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター長

岡　部　　勝　（おかべ　まさる）

微生物病研究所附属生体応答遺伝子解析センター長

【略歴】

昭46. 3	大阪大学薬学部製薬化学科卒業
48. 3	大阪大学大学院薬学研究科応用薬学専攻修士課程修了
50.10	大阪大学助手薬学部
平 4. 4	大阪大学助教授薬学部
4.10	大阪大学助教授微生物病研究所附属感染動物実験施設
10. 6	大阪大学教授遺伝情報実験施設
17. 4	大阪大学教授微生物病研究所附属遺伝情報実験センター
22. 4	大阪大学教授微生物病研究所附属生体応答遺伝子解析センター

新施設長紹介

安　蘇　芳　雄　（あそ　よしお）　産業科学研究所附属産業科学連携教育推進センター長

【略歴】

昭52. 3　大阪大学理学部化学科卒業
54. 3　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程修了
56. 2　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士課程退学
56. 2　名古屋大学教務職員化学測定機器センター
58. 3　理学博士（大阪大学）
58. 4　広島大学助手工学部
平 6. 5　広島大学助教授工学部
10. 4　九州大学助教授有機化学基礎研究センター
12. 4　広島大学助教授工学部
13. 4　広島大学助教授大学院工学研究科
15. 2　大阪大学教授産業科学研究所
20. 4　大阪大学産業科学研究所附属材料解析センター長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学教授産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長（平24.3まで）
22. 4　大阪大学産業科学研究所附属産業科学連携教育推進センター長（平24.3まで）

菅　沼　克　昭　（すがぬま　かつあき）　産業科学研究所附属国際共同研究センター長

【略歴】

昭52. 3　東北大学工学部原子核工学科卒業
54. 3　東北大学工学系大学院原子核専攻（修士課程）修了
57. 3　東北大学工学系大学院原子核専攻（博士課程）修了
57. 4　大阪大学助手産業科学研究所
62. 5　防衛大学校助教授応用物理学教室
平 8. 4　大阪大学教授産業科学研究所
18. 4　大阪大学産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属総合解析センター長（平23.3まで）
22. 4　大阪大学産業科学研究所附属国際共同研究センター長（平24.3まで）

新教授紹介

伊　東　信　宏　（いとう　のぶひろ）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻芸術学講座
専門分野：音楽学

【略歴】
昭59. 3　大阪大学文学部音楽・演劇学専攻卒業
59. 4　大阪大学文学部研究生（～60.3まで）
62. 3　大阪大学大学院文学研究科前期課程芸術学専攻修了
平 2. 4　日本学術振興会特別研究員（～4.3まで）
3. 3　大阪大学大学院文学研究科後期課程芸術学専攻単位修得退学
4. 4　ハンガリー国立リスト・フェレンツ音楽院研究員（～5.4まで）
5. 6　大阪教育大学助教授教育学部
16. 4　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

岡　島　昭　浩　（おかじま　あきひろ）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻国文学・東洋文学講座
専門分野：国語学

【略歴】
昭58. 3　九州大学文学部文学科卒業
61. 3　九州大学大学院文学研究科（修士課程）国語学・国文学専攻修了
62. 3　九州大学大学院文学研究科（博士後期課程）国語学・国文学専攻退学
62. 4　九州大学助手文学部
平元. 4　京都府立大学女子短期大学部講師
4. 4　京都府立大学女子短期大学部助教授
7.10　福井大学助教授教育学部
11. 4　福井大学助教授教育地域科学部
14.10　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

岡　田　禎　之　（おかだ　さだゆき）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻西洋文学・語学講座
専門分野：英語学

【略歴】
昭62. 3　大阪大学文学部英文学専攻卒業
平元. 3　大阪大学大学院文学研究科博士前期課程英文学専攻修了
3. 3　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程英文学専攻退学
3. 4　大阪大学助手文学部
5. 4　岡山大学講師教養部
6.10　岡山大学講師文学部
8.10　金沢大学文学部助教授
10. 4　神戸市外国語大学助教授
13. 9　博士（文学）（大阪大学）
17.10　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

新教授紹介

木　村　涼　子　（きむら　りょうこ）　大学院人間科学研究科

所　　属：大学院人間科学研究科教育環境学講座
専門分野：教育社会学

【略歴】
昭60. 3　大阪大学人間科学部人間科学科卒業
62. 3　大阪大学大学院人間科学研究科前期課程教育学専攻修了
学術修士（大阪大学）
平 2. 3　大阪大学大学院人間科学研究科後期課程教育学専攻修得退学
2. 4　大阪大学助手人間科学部
7. 4　大阪女子大学学芸学部助教授
11. 4　大阪女子大学人文社会学部助教授
16. 3　大阪大学助教授大学院人間科学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院人間科学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院人間科学研究科

山　中　浩　司　（やまなか　ひろし）　大学院人間科学研究科

所　　属：大学院人間科学研究科社会環境学講座
専門分野：医療社会史、技術社会学

【略歴】
昭57. 3　京都大学経済学部経済学科卒業
59. 3　京都大学大学院経済学研究科（修士課程）経済政策学専攻修了
経済学修士（京都大学）
63. 3　京都大学大学院経済学研究科（博士課程）経済政策学専攻学位修得退学
平 2. 4　大阪大学講師教養部
6. 4　大阪大学講師人間科学部
8. 4　大阪大学助教授人間科学部
12. 4　大阪大学助教授大学院人間科学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院人間科学研究科
21. 1　博士（人間科学）（大阪大学）
22. 4　大阪大学教授大学院人間科学研究科

渥　美　公　秀　（あつみ　ともひで）　大学院人間科学研究科

所　　属：大学院人間科学研究科人間行動学講座
専門分野：集団力学、社会ボランティア論

【略歴】
昭60. 3　大阪大学人間科学部人間科学科卒業
62. 3　大阪大学大学院人間科学研究科前期課程修了
平 5. 5　ミシガン大学大学院（心理学）修了
Ph.D.（ミシガン大学）
ミシガン大学集団力学研究センターリサーチコーディネーター
5. 9　大阪大学大学院人間科学研究科後期課程単位取得退学
5.10　神戸大学助教授文学部
9. 7　大阪大学助教授人間科学部
12. 4　大阪大学助教授大学院人間科学研究科
17. 4　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター助教授（学内派遣21.3.31まで）
19. 4　大阪大学准教授大学院人間科学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院人間科学研究科

新教授紹介

福　田　祐　一　（ふくた　ゆういち）　大学院経済学研究科

所　　属：大学院経済学研究科経済学専攻政策分析講座
専門分野：金融論

【略歴】
平元. 3　京都大学経済学部経済学科卒業
3. 3　大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了
4. 5　大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程退学
4. 6　大阪大学助手経済学部
7. 4　和歌山大学講師経済学部
7.11　博士（経済学）（大阪大学）
9. 4　神戸大学助教授経営学部
11. 4　神戸大学助教授大学院経営学研究科
15. 4　大阪大学助教授大学院経済学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院経済学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院経済学研究科

富　山　憲　幸　（とみやま　のりゆき）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科放射線統合医学講座（放射線医学）
専門分野：胸部画像診断学

【略歴】
昭62. 3　大阪大学医学部医学科卒業
62. 7　医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
平 5. 3　大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
5. 3　博士（医学）（大阪大学）
5. 4　大阪船員保険病院　医務職採用（平7.12まで）
8. 1　大阪船員保険病院　医長
9. 4　大阪大学助手医学部
12.10　国立療養所愛媛病院放射線科医師
14. 7　大阪大学講師大学院医学系研究科
18. 1　大阪大学助教授大学院医学系研究科
22. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

西　田　幸　二　（にしだ　こうじ）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科脳神経感覚器外科学講座（眼科学）
専門分野：眼科学、角膜移植、再生医学

【略歴】
昭63. 3　大阪大学医学部卒業
63. 4　大阪大学医学部（眼科学教室）において研究に従事
63. 5　大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
63. 7　医員（研修医）大阪大学医学部附属病院
平元. 7　大阪大学医学部研究生（～平6.3）
元. 7　大阪厚生年金病院眼科臨床研修医
2. 7　大阪厚生年金病院眼科医員
4. 7　京都府立医科大学助手医学部（～平12.8）
9. 3　医学博士（大阪大学）
10. 9　米国Salk研究所　研究員（～平12.2）
12. 9　大阪大学助手大学院医学系研究科
16. 9　大阪大学講師大学院医学系研究科
16.11　大阪大学助教授大学院医学系研究科
18. 1　東北大学教授大学院医学系研究科
東北大学病院眼科科長を兼任
20. 4　東北大学トランスレーショナルリサーチセンター（未来医工学治療開発センター）副センター長、臨床部門長を兼任
22. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

新教授紹介

小　室　一　成　（こむろ　いっせい）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科内科学講座（循環器内科学）
専門分野：循環器内科学

【略歴】
昭57. 3　東京大学医学部卒業
57. 6　医員（研修医）（東京大学医学部附属病院）
59. 6　医員（東京大学医学部附属病院第三内科）
平元. 9　医学博士（東京大学）
元. 9　ハーバード大学医学部留学ポスドク
5.11　東京大学助手医学部附属病院
10. 5　東京大学講師医学部
12.10　千葉大学助教授医学部
13. 4　千葉大学教授大学院医学研究院
17. 4　千葉大学医学部附属病院副病院長
22. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

南　方　聖　司　（みなみかた　さとし）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科応用化学専攻物質機能化学コース精密合成化学領域
専門分野：有機合成化学、複素環化学

【略歴】
昭63. 3　大阪大学工学部応用精密化学科卒業
平 2. 3　大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
5. 3　大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了
5. 3　博士（工学）（大阪大学）
5. 4　大日本インキ化学工業株式会社総合研究所研究員
7. 4　大阪大学助手工学部
10. 4　大阪大学助手大学院工学研究科
12. 2　大阪大学講師大学院工学研究科
14. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

VERMA PRABHAT（バルマ　プラブハット）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻
専門分野：ナノ分光学、ナノフォトニクス、プラズモニクス

【略歴】
昭61. 6　インドパトナ大学理学部卒業
63. 5　インド工科大学カーンプル校博士前期課程修了
平 3. 8　インド工科大学デリー校パートタイマーシニア科学職員
6. 8　インド工科大学デリー校博士後期課程修了
6. 8　博士（物理）（インド工科大学カーンプル校）
6. 8　インド工科大学デリー校フルタイムシニア科学職員（ポスドク）
7. 3　インド工科大学デリー校フルタイムプロジェクト科学者（ポスドク）
9. 4　ベルガカデミエ工科大学理論物理学研究所物理科学部門ポスドク
11. 6　日本学術振興会（京都工芸繊維大学工芸学部）外国人特別研究員
13. 6　京都工芸繊維大学大学院ベンチャー・ラボラトリー講師（中核的研究機関研究員）
14.10　科学技術振興会特任教員（大阪大学大学院工学研究科）
16. 4　大阪大学大学院工学研究科特任助教授
17. 4　大阪大学特任助教授（常勤）大学院工学研究科
18. 4　大阪大学大学院工学研究科特任助教授
18.10　大阪大学助教授大学院生命機能研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院生命機能研究科
22. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

新教授紹介

榎　本　俊　之　（えのもと　としゆき）　大学院工学研究科

【略歴】
昭63. 3　東京大学工学部産業機械工学科卒業
平 2. 3　東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
2. 3　株式会社リコー生産技術研究所研究員（平16.12.15まで）
11. 3　東京大学大学院工学系研究科博士課程修了
11. 3　博士（工学）（東京大学）
13. 4　東京大学客員助教授生産技術研究所（平16.3.30まで）
16.12　大阪大学助教授大学院工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科機械工学専攻マイクロ機械科学部門
専門分野：精密加工学

宇都宮　　裕　（うつのみや　ひろし）　大学院工学研究科

【略歴】
昭63. 3　大阪大学工学部金属材料工学科卒業
2. 3　大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
5. 3　大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了
5. 3　博士（工学）（大阪大学）
5. 4　大阪大学助手工学部
10. 4　大阪大学助手大学院工学研究科
14. 4　ケンブリッジ大学リサーチアソシエイト工学部
16. 4　物質・材料研究機構主幹研究員
16.10　大阪大学助教授大学院工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科マテリアル生産科学専攻材料機能化プロセス工学講座
専門分野：材料加工学

岡　野　泰　則　（おかの　やすのり）　大学院基礎工学研究科

【略歴】
昭58. 3　早稲田大学理工学部卒業
60. 3　早稲田大学大学院理工学研究科博士前期課程修了
63. 4　早稲田大学理工学部助手
64. 1　東北大学助手金属材料研究所
平元. 2　早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程退学
元. 2　工学博士（早稲田大学）
6. 4　静岡大学助教授工学部
17. 4　静岡大学教授工学部
18. 4　静岡大学教授大学院創造科学技術研究部
22. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所　　属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻化学工学領域環境・エネルギーシステム講座
専門分野：化学工学、移動速度論

新教授紹介

芦　田　昌　明　（あしだ　まさあき）　大学院基礎工学研究科

所　　属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻未来物質領域微小物質ダイナミクス講座
専門分野：光物性、レーザー分光

【略歴】
昭62. 3　京都大学理学部卒業
平元. 3　京都大学大学院理学研究科修士課程物理学第一専攻修了
3.10　京都大学大学院理学研究科博士後期課程物理学第一専攻退学
3.11　京都大学助手理学部
6. 7　理学博士（京都大学）
7. 4　京都大学助手大学院理学研究科
10. 4　科学技術振興事業団五神協同励起プロジェクト研究員
14. 5　独立行政法人通信総合研究所基礎先端部門関西先端研究センターレーザー新機能グループ任期付研究員
15. 4　大阪大学助教授大学院基礎工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院基礎工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科

白　石　誠　司　（しらいし　まさし）　大学院基礎工学研究科

所　　属：大学院基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域固体電子工学講座
専門分野：固体物理（分子スピントロニクス・分子エレクトロニクスなど）

【略歴】
平 3. 3　京都大学工学部原子核工学科卒業
5. 3　京都大学大学院工学研究科原子核工学専攻修士課程修了
5. 4　ソニー株式会社中央研究所
9. 6　マックス＝プランク固体研究所客員研究員（～平10.7ソニー在籍のまま）
10. 7　ソニー株式会社中央研究所Nプロジェクト
11. 4　ソニー株式会社フロンティアサイエンス研究所
14. 4　ソニー株式会社マテリアル研究所
15. 1　工学博士（京都大学）
15. 4　ソニー株式会社マテリアル研究所π電子デバイス研究チームリーダー
16. 4　大阪大学助教授大学院基礎工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院基礎工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科

坂　内　千　里　（さかうち　ちさと）　大学院言語文化研究科

所　　属：言語文化研究科言語文化専攻言語情報科学講座
専門分野：中国字書史、中国文献学

【略歴】
昭57. 3　奈良女子大学文学部文学科卒業
57. 4　京都大学大学院文学研究科博士前期課程入学
59. 3　同上修了
59. 4　京都大学大学院文学研究科博士後期課程入学
61. 9　同上退学
61.10　京都大学助手文学部
平元. 4　大阪大学講師言語文化部
5.10　大阪大学助教授言語文化部
17. 4　大阪大学助教授大学院言語文化研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院言語文化研究科
22. 4　大阪大学教授大学院言語文化研究科

新教授紹介

森　　祐　司　（もり　ゆうじ）　大学院言語文化研究科

所　　属：言語文化研究科言語文化専攻言語文化システム論講座
専門分野：言語文化研究、アウトドア活動におけるコミュニケーション研究

【略歴】
昭57. 3　名古屋大学文学部文学科卒業
57. 4　名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程入学
59. 3　名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了
59. 4　名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程入学
60. 3　名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程退学
60. 4　名古屋大学助手文学部
62.10　大阪大学講師言語文化部
平 5. 4　大阪大学助教授言語文化部
17. 4　大阪大学助教授大学院言語文化研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院言語文化研究科
22. 4　大阪大学教授大学院言語文化研究科

細　田　　耕　（ほそだ　こう）　大学院情報科学研究科

所　　属：大学院情報科学研究科マルチメディア工学専攻ヒューマンインタフェース講座
専門分野：ロボティクス

【略歴】
昭63. 3　京都大学工学部精密工学科卒業
平 2. 3　京都大学大学院工学研究科応用システム科学専攻修士課程修了
5. 3　京都大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程修了
5. 3　博士（工学）（京都大学）
5. 4　大阪大学助手工学部
9. 2　大阪大学助教授工学部
10. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学教授大学院情報科学研究科

保　田　英　洋　（やすだ　ひでひろ）　超高圧電子顕微鏡センター

所　　属：超高圧電子顕微鏡センター
専門分野：構造物性学

【略歴】
昭58. 3　大阪大学工学部金属材料工学科卒業
60. 3　大阪大学大学院工学研究科金属材料工学専攻前期課程修了
60. 4　新日本製鐵株式会社中央研究本部第二技術研究所鋼管研究センター研究員
63. 4　大阪大学助手工学部
平 2. 2　工学博士（大阪大学）
7. 4　大阪大学助手超高圧電子顕微鏡センター
11.12　大阪大学助教授大学院工学研究科
12. 4　科学技術庁・文部科学省金属材料技術研究所精密励起場ステーション高分解能励起場研究ユニットリーダー
13. 4　神戸大学教授工学部
19. 4　神戸大学教授大学院工学研究科
22. 4　大阪大学教授超高圧電子顕微鏡センター

新教授紹介

坂　東　隆　男　（ばんどう　たかお）　大学教育実践センター

所　　属：大学教育実践センター運動健康支援部門
専門分野：体育学（武道）

【略歴】
昭56. 3　福岡教育大学特別教科教員養成課程卒業
58. 3　筑波大学大学院体育研究科修了
61. 4　大阪大学助手健康体育部
平 7. 7　大阪大学講師健康体育部
17. 4　大阪大学講師大学教育実践センター
18. 4　大阪大学助教授大学教育実践センター
19. 4　大阪大学准教授大学教育実践センター
21.10　博士（医学）（大阪大学）
22. 4　大阪大学教授大学教育実践センター

岩　井　康　雄　（いわい　やすお）　日本語日本文化教育センター

所　　属：日本語日本文化教育センター
専門分野：音声学

【略歴】
平元. 3　京都大学文学部言語学科卒業
4. 3　京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了
6. 9　京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻中退
6.10　大阪外国語大学助手　留学生日本語教育センター
9. 1　大阪外国語大学講師　留学生日本語教育センター
14. 1　大阪外国語大学助教授　留学生日本語教育センター
19. 4　大阪外国語大学准教授　日本語日本文化教育センター
19.10　大阪大学准教授　日本語日本文化教育センター
22. 4　大阪大学教授　日本語日本文化教育センター

加　藤　　均　（かとう　ひとし）　日本語日本文化教育センター

所　　属：日本語日本文化教育センター
専門分野：仏教学

【略歴】
昭56. 3　慶應義塾大学法学部政治学科卒業
60. 3　大谷大学文学部仏教学科卒業
62. 3　大谷大学大学院文学研究科修士課程仏教学専攻修了
平 2. 3　大谷大学大学院文学研究科博士後期課程仏教学専攻単位取得退学
2. 4　大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員
5. 2　大阪外国語大学講師 留学生日本語教育センター
8. 3　ミシガン大学客員研究員 アジア言語文化学部（平8.9まで）
10. 1　大阪外国語大学助教授 留学生日本語教育センター
16. 4　大阪外国語大学国際交流室室長代理（併任）（平18.3まで）
19. 4　大阪外国語大学准教授 日本語日本文化教育センター
19.10　大阪大学准教授 日本語日本文化教育センター
22. 4　大阪大学教授 日本語日本文化教育センター

國井和郎名誉教授（法学研究科）逝去

本学名誉教授國井和郎先生は平成22年2月15日に逝去されました。享年68歳でした。

先生は、昭和41年3月大阪大学法学部法学科を卒業され、同年4月同大学大学院法学研究科修士課程に入学、昭和44年3月同課程を修了、同年4月より同研究科博士課程に進学され昭和46年3月に同課程を退学された後、引き続き同年4月に大阪大学法学部助手に採用、昭和50年4月に同助教授を経て、昭和62年4月同教授に昇任されました。平成11年4月からは大学院重点化に伴い、同大学大学院法学研究科教授となられ、平成17年3月に定年退職されましたが、退職後も大阪学院大学で研究教育に携わってこられました。また平成18年3月にはフランス・トゥールーズ第一大学から名誉博士の称号を授与されています。

先生の研究分野である民法、特に不法行為等の民事責任論に関して、数多くの論文を公刊され、学会に先導的・指導的役割を果たされました。また、安全配慮義務の要件事実や証明責任など裁判上の問題についても具体的に提言され、裁判所にも影響を与えられました。

また、比較法学会、日本私法学会、日仏法学会の理事を務められました。さらに、民事法学の泰斗アンドレ・タンク教授などを大阪大学に招聘してフランスとの学術交流を推進されました。

学内において、法学部長、評議員、総長補佐、大学院法学研究科附属法政実務連携センター長のほか、各種枢要の委員会委員を歴任して学内行政に大きく貢献されました。

教育においても学生からのエピソードも多く、何よりも数多くの研究者、実務家を世に送り出した文字通り、阪大法学部の顔であられました。在りしの先生を偲び、ここに哀悼の意を表します。

（法学研究科・法学部）

寺本明夫名誉教授（理学研究科）逝去

本学名誉教授寺本明夫先生は、2月7日(日)腎不全のため逝去されました。享年76歳でした。

先生は、昭和8年石川県小松市にお生まれになり、昭和31年京都大学工学部繊維化学科をご卒業後、同大学大学院工学研究科高分子化学専攻の修士、博士課程に進まれ、昭和36年に同博士課程を修了されました。同年、大阪大学理学部助手に着任され、同講師、助教授を経て、昭和61年に大阪大学理学部教授に昇任され、高分子学科高分子溶液論講座をご担当になられ、平成9年の定年ご退官までの36年間にわたり、大阪大学理学部・理学研究科の発展に尽くされました。ご退官後は、大阪大学名誉教授となられるとともに、平成16年まで立命館大学客員教授として、引き続き教育・研究に携わられました。

先生のご専門は高分子溶液学で、世界的にも卓越した業績を挙げられ、わが国の高分子科学の発展に尽くされました。主要研究テーマは、一次元協同転移を呈する合成ポリペプチド、天然多糖、らせん状の合成高分子の分子形態及び転移現象で、精密な実験データを収集され、そのデータに基づき同現象に関する統計力学理論の有効性を実証されました。特に合成ポリペプチドのヘリックス－コイル転移に関する研究により、昭和50年に高分子学会賞を受賞されました。さらにこの研究を発展され、液晶性を有する非屈曲性高分子の溶液系の熱力学的性質、等方－液晶相平衡、並びに同溶液中での高分子ダイナミックスについての研究に力を注ぎ、精密かつ系統的な実験データの蓄積とそれらの統計力学理論による解析を精力的に行われました。この功績により、平成8年には高分子学会・高分子科学功績賞を受賞されています。

教育面では、長年にわたり学生の教育・研究指導に力を注がれ、多数の有能な研究者を育成されました。また、国際交流にも熱心に取り組まれ、現在外国で活躍する研究者を多数育成するとともに、多くの外国の大学との交流協定締結にコンタクトパーソンとして協力され、また大阪大学で高分子科学に関する国際シンポジウムを継続的に開催されるなど、大阪大学の国際化に尽力されました。

ここに謹んで寺本明夫先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（理学研究科・理学部）

須田信英名誉教授（工学研究科）逝去

本学名誉教授 須田信英先生は、病気療養中の平成22年2月6日(土)、食道癌のため急逝されました。享年76歳でした。永年のご功績に対し、正四位に叙せられました。

先生は、昭和31年東京大学工学部機械工学科をご卒業後、同年4月に新三菱重工業（現三菱重工業）株式会社に入社、昭和32年4月に日本原子力研究所に入所され、昭和41年4月に大阪大学基礎工学部助教授に着任されました。昭和50年3月に同教授に就任し、制御工学科制御系構成学講座を担当され、平成8年3月に退職されました。退職後、平成12年3月まで法政大学工学部教授を、また同年4月から3年間、原子力安全委員会委員を務められました。

この間、先生は、原子力工学および制御工学分野の発展に大きく貢献されるとともに、後進の指導育成に努められ、学界および産業界に優れた人材を送り出されました。

原子力工学の分野では、国産一号炉の計測制御系の基本設計に参画され、原子炉の動特性モデリングと制御に関する基礎研究を通じて、我が国の原子炉開発の黎明期に原子炉制御分野で指導的な役割を果たされました。

制御工学の分野では、主に線形システム、線形制御、ボンドグラフの各理論研究を通して優れた貢献をされました。特に、線形システム理論では、線形システムの入出力構造を反映する基本概念を初めて導入されるなど、線形システムの入出力構造とその関連研究で重要な貢献をされました。教育面では、システム制御に関する多くの著書と講習を通して、この分野の教育・啓蒙に貢献されました。以上のような制御工学への貢献に対し、計測自動制御学会より論文賞、著述賞とフェローの称号を授与されました。

学内では、開放講座運営委員会委員長をはじめ適塾管理運営委員会委員や国立民族学博物館共同研究員などを歴任されるとともに、平成4年度の基礎工学部制御工学科のシステム工学科への改組拡充にも尽力されました。特に、平成6年から2年間大阪大学評議員および総長補佐として、また平成8年度からの基礎工学部大学院重点化に向けて評議員、教務委員長として、大阪大学および基礎工学部の発展に大きく寄与されました。

学外では、日本学術会議の自動制御、原子力工学に関する研究連絡委員会委員、原子力安全委員会の原子炉安全審査会会長や原子力安全委員などを歴任され、我が国の原子力安全行政で重要な役割を果たされました。それに対して科学技術庁長官賞を受賞されるとともに、平成16年春には、原子力工学や制御工学に関する永年の研究と教育および、原子力安全委員会委員として社会に大きく貢献された功績により、瑞宝中綬章を授与されました。

先生の学会活動は、計測自動制御学会を中心に幅広く、同学会の会長ならびにシステム制御情報学会の副会長を務められ、両学会の名誉会員になっておられます。そのほか、日本原子力学会理事、関西支部長などを務められ、国内での制御工学と原子力工学分野の発展に大きく貢献されました。さらに、国際自動制御連盟の自動制御教育に関する専門委員会副委員長、第3回制御教育の発展に関する国際シンポジウムなどの国内組織委員長や委員として国際会議の開催運営にも尽力されました。

以上のように先生は、専門分野はもとより、学界や大阪大学の発展および社会に対して幅広くかつ大きな貢献をされました。　ここに、謹んで哀悼の意を表します。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

平成22年度いちょう祭

いちょう祭は、本学の創立記念日（5 月 1 日）を祝し、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的に毎年開催しています。

今年も、教職員・学生の方のほか、高校生、地域の皆さまをはじめ学外の方に本学の教育・研究の内容を知っていただくため、以下の日程により開催します。

皆さまの積極的な参加をお待ちしています。

日　程

4月30日(金)　・　5月1日(土)

- **大学主催の各種行事（学内施設開放、展示会、映画会、講演会など）**
- **学生団体による協賛行事（スポーツ大会、園遊会など）**
- **模擬店**

問い合わせ先：総務部総務課総務係（TEL06 － 6879 － 7014）

（総務部総務課）

第5回大阪大学ホームカミングデイ

本学卒業生及び教職員 OB 等の方が年に一度キャンパスにお運びいただき旧交を温めるとともに、「今」の大阪大学をご覧いただき本学に一層の関心をお寄せいただく日として、「第 4 回大阪大学ホームカミングデイ」を本年も下記により開催いたします。

なお、当日は、「いちょう祭」（4 月 30 日～5 月 1 日）の開催期間でもありますので、キャンパス内の各種催し、展示等もご見学いただければ幸いです。どうぞお友達、ご家族お誘い合せのうえ、お気軽にお越しくださいますようご案内申し上げます。

主　催　　大阪大学
協　賛　　大阪大学同窓会連合会

開催日　　平成 21 年 5 月 1 日（土）
場　所　　大阪大学豊中キャンパス
次　第

一、挨拶と講演（10：00 ～ 11：15　於：共通教育本館（イ号館）・2 階イ講堂）

- 大阪大学総長挨拶　　鷲田　清一　総長
- 大阪大学同窓会連合会会長挨拶　　熊谷　信昭　元総長
- 卒業生による講演　（財）大阪大学後援会理事長
  株式会三井住友銀行顧問　西川　善文　様（法学部卒）

一、レセプション（11：30 ～ 13：00　於：附属図書館下生協食堂 ）

〈お問い合わせ先〉
大阪大学企画部広報・社学連携事務室（TEL06 － 6879 － 7151）
大阪大学同窓会連合会事務室　　（TEL06 － 6879 － 7152）

同窓会連合会ホームページ　https://alumni.jim.osaka-u.ac.jp/alumni/

（企画部広報・社学連携事務室）

大阪大学総合学術博物館第11回企画展・適塾特別展示
緒方洪庵生誕200年記念・大阪大学創立80周年プレイベント
えがかれた適塾

会期　2010年4月27日(火)～6月26日(土)（日祝休館　ただし4月29日・5月2日・5月5日は開館）
10時30分～17時　入場無料
【会場】大阪大学総合学術博物館　待兼山修学館
【主催】大阪大学総合学術博物館・適塾記念会
【共催】大阪大学附属図書館・大学院文学研究科・外国語学部
【協力】手塚プロダクション・司馬遼太郎記念館・大阪大学21世紀懐徳堂

2010年は、緒方洪庵（1810-1863）の生誕200年にあたります。洪庵が先導した種痘やコレラ予防の教えは、感染症予防の先駆けとして高く評価されています。適塾は蘭学塾として、近代日本の国家形成に重要な役割を果たした福澤諭吉・大鳥圭介・長与専斎ら、医師にとどまらない多様な人材を輩出しました。適塾門下生、手塚良仙光亨（良庵）を祖先にもつ漫画家手塚治虫（1928-1989、1951年本学附属医学専門部卒業）は、適塾門人の若き日の群像を作品『陽だまりの樹』に生き生きとえがいています。

現在、適塾は懐徳堂とともに大阪大学の源流と位置づけられています。こうした認識は、小説家司馬遼太郎（1923-1996、1943年大阪外国語学校＝現在の本学外国語学部卒業）が、小説『花神』（1969年）の冒頭で、適塾を大阪大学の前身、洪庵を「校祖」であると述べたことにはじまります。

緒方洪庵と適塾は、どのように漫画や小説、映画などにえがかれ、歴史のなかに位置づけられてきたのでしょうか。本展覧会は、適塾記念会と大阪大学総合学術博物館が共同で開催し、この節目に適塾という歴史的存在の〈えがかれ方〉をみなさんとともにたどります。2011年の大阪大学創立80周年記念を前にして、わたしたちの生きている〈歴史的現在〉を考えるこころみです。

ミュージアムレクチャー
【第23回】5月1日（土）　14：00～15：30
司馬遼太郎と適塾のあった大坂
上村洋行（司馬遼太郎記念館館長）　イ号館イ講堂　定員300名
【第24回】5月15日（土）　13：30～15：00
『陽だまりの樹』と蘭方医手塚良仙
深瀬泰旦（順天堂大学医学部医史学研究室・日本医史学会理事）　待兼山修学館　3階セミナー室　定員60名
【第25回】5月29日（土）　13：30～15：00
近世大坂の学問と適塾
橋本孝成（適塾記念会資料専門員）　待兼山修学館　3階セミナー室　定員60名
【第26回】6月19日（土）　13：30～15：00
適塾と都市大坂の医療環境
海原亮（住友史料館研究員）　待兼山修学館　3階セミナー室　定員60名

映画上映　洪庵と1000人の若ものたち
洪庵没後100年記念、木村荘十二監督、1969年　約60分　於セミナー室
会期中待兼山修学館3階セミナー室で常時上映します。（但しミュージアムレクチャー等開講中は除く）

会場　大阪大学総合学術博物館　待兼山修学館
〒560－0043　大阪府豊中市待兼山町1－20　Tel 06－6850－6284
阪急宝塚線「石橋駅」下車、徒歩10分
※公共交通機関をご利用ください。
また、当館はバリアフリーですので、障害者向駐車場スペースをご活用ください。
http://www.museum.osaka-u.ac.jp/

「学生支援コミュニティスペース」の取り組み

前号（2010年2月号）では、教育・情報室のもと、学生支援ステーションを設置したことをお知らせしました。その活動のひとつとして、3月1日から豊中地区学生交流棟2階に学生支援コミュニティスペースを開設しています。開室時間は平日の正午から17時まで（火曜日を除く）、スペースの利用受付や各種の相談に応じた案内を行うインテーカーが常駐しています。また、水曜日と金曜日は学生生活相談員（臨床心理学を学んでいる大学院生）がおり、日常生活や大学生活のことについて、気軽に話ができる環境を整備しています。

学生支援ステーションは、コミュニティスペースを中心に、学生・教員・職員の三者が協力して、次の3つの機能を果たすことを目指しています。はじめに、①ピア・サポートやグループ活動を通して、学生のみなさんにコミュニティ（居場所）そのものを提供する機能です。自分自身の大学生活やキャリアを考えるきっかけとなる書籍を配架するとともに、現在、映画の鑑賞やフィンガーペインティング等の行事を予定しています。また、②必要に応じて学内の相談室と連携し、コミュニティの再編と創造を行う機能です。各学部・研究科等にある何でも相談室や学生相談室の担当スタッフとのミーティングを定期的に実施し、学内にあるコミュニティの現状について情報の共有を進めていきます。さらに、③学内外のコミュニティどうしのつながりを促すインタフェイスとしての機能です。地域・ボランティア活動等に携わる団体に関する情報の提供や相互の交流を促し、ネットワークを広げるための拠点となるべく努めていきます。

「なんだかやる気がわかない」「人間関係がわずらわしくなってきた」「授業がつまらない」といったものだけでなく、「授業のほかにも何かしてみたいけれど、モヤモヤしていて困っている」「自分が打ち込める活動のきっかけがほしい」といったポジティブなものまで、気軽に立ち寄れて話ができるオープンな環境を準備しています。コミュニティスペースの隣には、話の内容に応じた相談室が併設してありますので、個別の相談も可能です。みなさまのご理解とご協力をいただき、学生支援の層を増していくとともに、学生自身が学生支援に携わることを通じて、自らが成長する機会を創出していく予定です。ぜひいちど学生支援コミュニティスペースへお立ち寄りください。

（教育・情報室）

大阪大学室内楽アンサンブル第10回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル（OUCE）は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として年2回（春・秋）、MOホールにおいて演奏会を開催し、毎回多くの方にご来聴をいただいております。

このたび第10回演奏会を下記の通り開催いたしますので、皆様、お誘い合わせの上、ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくは、OUCEのホームページ（http://orchestra.musicinfo.co.jp/~ouce/）*をご覧下さい。（*当ホームページは、クラシック音楽情報センター（http://www.musicinfo.com）より、サーバーの無償提供を受けています。）

〈問い合わせ先〉shinomiya@chem.eng.osaka-u.ac.jp

日　時：平成22年5月2日（日）　開場：13：30　開演：14：00
場　所：大阪大学コンベンションセンター　MOホール
入場無料

（演奏曲目）
モーツァルト／クラリネット三重奏曲
ゴーベール／古代のメダル
チャイコフスキー／ピアノ三重奏曲イ短調作品50　より第1楽章
ブラームス／ピアノ三重奏曲第1番ロ長調作品8　より第1楽章
ブラームス／弦楽四重奏曲第2番　第1楽章
オンスロウ／NONET　作品77　より第1楽章、第2楽章

休憩時間にはリコーダー演奏もあります。

訂正とお詫び

阪大NOW　No.116（2010年2月号）の掲載内容に一部誤りがありましたので、下記のとおり訂正するとともにお詫び申し上げます。

P.28「創立80周年記念事業」の表中
募金活動の主体　（誤）募金室　　（正）基金室

P.36「大阪大学特志解剖追悼法会実施」文末
部局名　　（誤）歯学系研究科　　（正）歯学研究科

大阪大学　春日丘ハウス
（研究者宿泊施設）

OSAKA UNIVERSITY

利用案内

設置目的

海外から優秀な人材を招くに相応しいクオリティーの宿泊施設の整備とともに、学内の共同利用研究員・病院ニーズをカバーすることを目的として建設されました。

利用者の範囲

- 大阪大学で研究に従事するため長期滞在する外国人研究者及びその家族
- 短期滞在の共同利用研究員
- 阪大病院外来患者及び関係者
- その他

外国人研究者・共同利用研究員のための長期・短期宿泊施設

2010年.6月
供用開始予定

■ オフィス ■

大阪大学本部事務機構　施設部企画課専門職員（春日丘ハウス担当）

TEL：06-6879-7948　FAX：06-6879-7139

E-mail：kasugaoka-house@office.osaka-u.ac.jp

Information

名　　称
大阪大学　春日丘ハウス

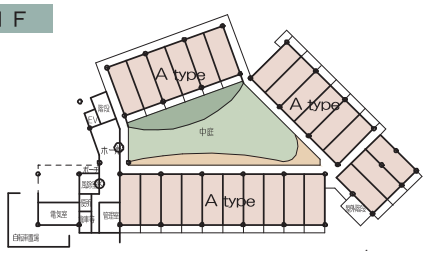
所 在 地
大阪府茨木市南春日丘7丁目

構造・規模
鉄筋コンクリート造・3階建

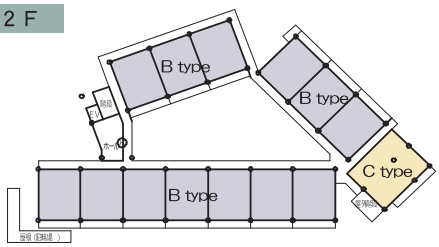
交　　通
大阪モノレール
阪大病院前駅下車　徒歩約5 分
阪急バス
千里中央発「阪大本部前行」
「茨木美穂ヶ丘行」
北千里発　「阪大病院線」
近鉄バス
阪急茨木市駅発「阪大本部前行」
※阪急バス・近鉄バスとも
阪大病院前下車　徒歩5分

平面計画・間取り

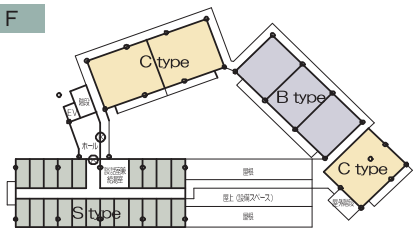
1 F



2 F



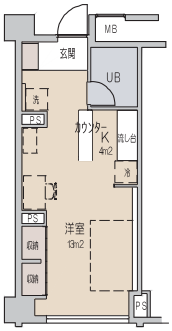
3 F



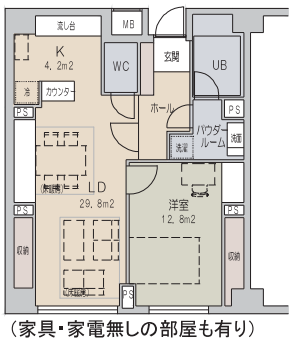
Quality & Support

家具・家電付 ※ （※TV、洗濯機、冷蔵庫、エアコン、食洗機等）	居住者の集いの場としての中庭を整備	英語によるスタッフの対応
大阪モノレール阪大病院前駅まで徒歩5分	インターネット回線完備（ご利用契約は別途）	セキュリティー対策オートロック完備

A type

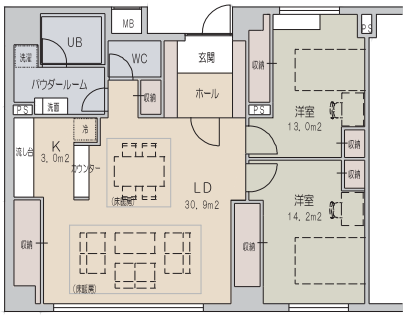


B type

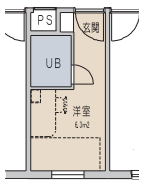


（家具・家電無しの部屋も有り）

C type



S type
（短期利用）



建物概要

室種類	Atype（家具・家電付）	Btype（家具・家電付）	Btype（家具・家電無）	Ctype（家具・家電付）	Stype（短期利用）
室面積	32㎡	65㎡	65㎡	97㎡	12㎡
室数	25室	9室	7室	4室	21室
間取り	1K　洋室 13㎡ K 4㎡	1LDK　洋室 13㎡ LDK 34㎡	1LDK　洋室 13㎡ LDK 34㎡	2LDK　洋室 14㎡ 洋室 13㎡ LDK 34㎡	1　洋室 6㎡
宿泊料等	月額（共益費込） ¥70,000	月額（共益費込） ¥120,000	月額（共益費込） ¥100,000	月額（共益費込） ¥180,000	日額 ¥3,000
	光熱水料・通信料等は別途実費				光熱水料・通信料等込

金額は変更の可能性有り

上海教育研究センターが活動を開始しました

上海教育研究センター長
末　永　敏　和

センターが設置された申通信息広場ビル
（Sun Tong Infoport Plaza）

大阪大学は平成22年2月1日に「上海教育研究センター」を開設し、活動を開始しました。

本部直轄による全学共同利用の海外拠点としては、サンフランシスコ教育研究センター（米国：2004年設置）、グローニンゲン教育研究センター（オランダ：2005年設置）、バンコク教育研究センター（タイ：2006年設置）についで4番目の海外拠点となります。

大阪大学は、現在、中国の大学・研究機関と8件の大学間交流協定及び41件の部局間交流協定を締結して、積極的に研究者・学生交流を展開しておりますが、中国からの留学生数は、他大学に比較してむしろ少ないと言え、中国の大学との学生交流の加速的推進は本学にとって極めて重要な喫緊の課題であります。そこで、G30（国際化拠点整備事業）構想の中で、現在の留学生受入数1,455名を平成25年度に2,000名、平成32年度末には3,000名とし、同時に留学生受入重点国の一つである中国からは、現在の受入数443名（全体の約3割）を平成32年度末には全体の4割程度とする目標を掲げており、上海教育研究センターの活動の本格化及び全学的利用により、中国との国際交流がより一層、推進されるものと期待します。

設置後の活動状況は以下のとおりです。

■上海教育研究センター（仮）開所式を挙行

2010年3月21日(日)16:00～16:45　上海教育研究センターにおいて大阪大学上海同窓会から16名、咲耶会（大阪外国語大学同窓会）上海支部から7名の同窓生有志を招待して上海教育研究センター（仮）開所式を挙行しました。末永センター長の開会の辞に始まり、辻理事・副学長が大阪大学を代表して挨拶を行い、大阪大学への支援に対する謝辞、センター設置の経緯、中国を含む国際交流の実施状況、同窓会への積極的支援への抱負を述べました。また、大阪大学上海同窓会の東　和男氏、咲耶会上海支部の中浦和一氏が各同窓会を代表してセンター開設への祝辞、同窓会の活動状況、中国との交流の活発化を祈念してご挨拶をいただきました。大阪大学上海同窓会には約70名、咲耶会上海支部には約90名の同窓生の登録があるそうです。

セレモニー終了後はセンター近郊のレストランにおいて懇親会を開催し、出席者全員の自己紹介や学生時代の思い出話に時間を忘れて花が咲き、盛況に終了いたしました。

両同窓会のOB・OGに対して大阪大学を代表して
挨拶を述べる辻理事・副学長

セレモニー終了後の懇親会で

■上海交通大学　厳学長補佐への表敬・懇談

3月21日(日)16:45～17:20　上海教育研究センター（仮）開所式の終了後、辻理事・副学長、末永センター長他が上海市内の上海交通大学徐匯キャンパス内で厳　良瑜（YAN

（写真左から）古川教授、末永センター長、辻理事・副学長、
厳学長補佐（SJTU）、許国際交流課長（SJTU）、門脇国際連携課長

Liang Yu）学長補佐への表敬・懇談を行いました。辻理事・副学長から、センター設置に係る上海交通大学側の支援に対する謝辞並びに本年10月21日開催予定のセンター開所記念式典への案内を行いました。また、G30を始めとする英語による学部・大学院コースの情報提供や短期交流プログラムの促進について意見交換を行いました。

■ 在上海日本国総領事館への訪問

3月22日(月)9:05～9:45　在上海日本国総領事館　前川　光領事（新聞文化處主任）【写真左端】及び徳増　香領事（文化交流・日本語教育）【右端】への表敬を行いました。懇談会では辻理事から上海教育研究センターの設置報告、G30による活動や中国との国際交流の実施状況について説明を行い、更に本年10月21に開催予定の同センター開所記念式典への出席案内を行いました。

■ 上海教育研究センター運営支援WG及び現地スタッフとの懇談会

3月22日(月)10:00～10:30　上海教育研究センター会議室にて、末永センター長から辻理事・副学長、並びに上海教育研究センター運営支援WG委員である山内教授（国際公共政策研究科）、斗内教授（レーザーエネルギー学研究センター）、古川教授（言語文化研究科）に現地スタッフの姜　暁燕（ジャン・ショウエン：右から2番目）さんの紹介があり、全員で今後のセンター運営・活動について懇談会を行いました。

■ 希平会活動への参画

本学は2月8日付けで「希平会」に正式加入しました。希平会（日中高等教育交流連絡会）とは中国に事務所、拠点、同窓会組織等を持つ日本の大学、研究所、政府系機関等34機関からなる情報交換会の総称です。

3月24日(水)希平会の定期総会が北京市内で開催され、本学から古川　裕教授（言語文化研究科）が出席し、上海教育研究センターの設置報告や情報交換を行いました。また、希平会事務局（在JSPS北京研究連絡センター）からは2010年度の実施計画案が示され、加盟校に対して積極的な参加を求められました。さらに、小講演会として孔子学院本部副総幹事・国家漢語弁公室副主任の胡志平氏が「孔子学院の取り組みについて」と題する講演を行い、世界および日本における孔子学院をめぐる現状と今後の展開について詳細な紹介を行いました。

3月24日希平会定期総会の様子（希平会事務局提供）

■ G30海外プロモーションによる深圳(シンセン）大学及び香港大学への訪問

日　程：平成22年3月28日(日)～31日(水)
参加者：末永敏和教授（法学研究科）、山内直人教授（国際公共政策研究科）、古川　裕教授（言語文化研究科）、石川真由美准教授（国際企画推進本部）

3月29日(月)午前に深圳 大学外事処担当者（張さんら）と面会し、懇談。現在は、旧外大との間で学部間協定に基づき学生の交流を行っているほか、レーザーエネルギー学研究センターも研究者交流を行っています。法学院には末永が何度か訪問し、講義を行ったことがあります。話し合いの結果、さらに交流を深め、将来的に大学間協定へと結実させることで意見が一致しました。

その後、法学院副院長と面会。同法学院は、国際学生模擬法廷の中国国内予選でここ2年続けて1位になったという報告を受けました。

午後は、留学説明会を開催しました。出席学生は約120名。こちらの説明に対し、質問も多く発せられ、しかも、多分野の学生が大学への留学を希望していることが分かりました。最後に、大阪大学に交換留学に行ってきた学生から感想が述べられ、有意義なプロモーションになったと思われます。

深圳大学は深圳で唯一の大学でしかも総合大学であるから、優秀な学生が潜在しており、大阪大学へ留学する可能性のある大学として有望であり、大学間協定まで持っていけるよう交流をより積極化していくことが望ましいと感じました。

30日(火)午前に香港大学を訪問。対応は香港大学の国際学生事務所の担当者と文学院副院長（中野嘉子さん）ら5名。香港大学との学生の交流は、学部生が中心となる模様。さらに、大阪大学のフロンティア・ラボに興味を持たれ、これに香港大学学生が参加する可能性があることが分かりました。香港大学は評価ランクが高いため、日本の多数の大学から交流オファーが来ているようであるが、大阪大学としては、留学コースをより丹念にかつ学生に直接に説明すれば、同大からの留学も期待できるし、大阪大学学生としても、英語と中国語が同時に学べる大学として留学に適していると思われ、将来的に大学間交流協定へともって行くことが望まれます。

安全、快適な自転車生活を大阪大学に！

～デービス市に学ぶサイクルタウンの取り組み～

工学部・末澤グループ

近年、環境への意識が高まっており、自転車は環境負荷がなく誰でも手軽に乗れるため、自転車利用を活発化するまちづくりが注目されている。現在、大阪大学は3つのキャンパスをもつ大規模な大学である。各キャンパス周辺に住む下宿生の多くが自転車を利用する。吹田キャンパス周辺では通学、帰宅時には狭い道が混雑し、看板による注意喚起も見過ごされ、坂道ではスピードの出しすぎが目に余る。私達もその一員であった。交通マナーの悪さは地域住民には迷惑である。また豊中キャンパスでは、自転車事故の多さから坂道では自転車を降りて歩くことが規定され、警備員も配置されたが、未だに事故は減っていない。

カリフォルニア大学デービス校のあるデービス市は、市民の約半数が大学生ということもあり、大学をあげての自転車街づくりを重視している。大学中心とした街の取り組み、30年の歴史を持つ環境共生都市のモデルとして多くの調査例があり、同じように規模の大きい大学として学ぶ所は多い。街の構成の違い、学生の意識、街づくりに至るまでの経緯を知るため、この事業を利用しそれらをデービス校現地に調べに行った。研修で得られた知見を活用し大阪大学の自転車の利用形態の改善を目指すことが大きな目的であった。

街の様子としては、自転車道と自動車道の立体交差により接触を防いでいたり、利用者が利用しやすいように店の前に駐輪場が設置されていたりと、整備のされ方が特徴的であった。学校調査では自転車利用者が大変多いにもかかわらず、ルール違反者が少なく、きちんと整備されていることが伺えた。これは、学校に警察が常駐して交通違反者に対し厳しく取り締まりを行っているためである。また管理する組織としてTAPSとBikebarnがある。TAPSは学生課の中に設置されている機関で、違法駐輪を取り締まったり、キャンパス整備をすることに加え、卒業生が置いていった自転車や放置自転車・違法駐輪自転車を集めて年2回の学内オークションに出したりしている。そのオークションでは、年間約220万もの利益があるそうだ。Bikebarnは学生主体の組織で、自転車を修理・点検したり、工具の貸し出しを行ったりしている。

街や学校の調査に加え、専門家へのインタビューや、自転車利用者へのアンケートも行ってきた。デービスには、自転車利用の研究者や、学生課の自転車専門家が多数いる。アンケートは自転車の利用意識を知る目的で、学校の食堂周辺と、毎週土曜の朝市とで、約150人を対象に行ってきた。

この研修で、デービスは自転車の利用形態が整っており、その理由は管理者側が利用者側目線でルールを作ったり整備したりしていること、また利用者側が管理者の意図を知る機会があることだと分かった。そしてこの両者の交流の場があることで、連携は強められている。研修前は、デービスが自転車のまちとして成功しているのは道路や設備などハード面が整っているからだと思っていた。しかし現地に行ってわかったのは、ハード面に加えソフト面もしっかりしていることだった。そして一番重要だと思ったのはそれらが上手く機能するような仕組みがあるということだ。

大阪大学に提案したいことは、自転車のマナー教育を実施し、独自の校則ルールをつくり、公衆などでの呼びかけによって知る場を設けることでソフト面を整えることである。また、デービスのように自転車の運営組織をつくり、

学生主体でキャンパスの整備を行っていくといったことが考えられる。学生が中心となって学生が行動を起こすことで、他の学生への影響も大きく自転車利用に対しての意識改善につながるのではないだろうか。

謝辞

現地では事前にアポイントをとっていた専門家だけでなく、その方々が別の専門家を紹介してくださったり、アンケート調査においてはお手伝いをお願いしていた方に加えそのお友達も手伝ってくださったりと、人との出会いに恵まれた研修であった。この研修を採択してくださった方々、現地でサポートしてくださった方々、多くの方々にこれからの自分たちの活動で感謝の意を表したい。

ヘルスインパクトアセスメントとその運用に係る研修

医学系研究科・岩田グループ

医療は目覚ましい勢いで日々進歩している。数年前なら死に至る病気であっても、現在においては、有効な治療法が確立されている病気は少なくない。今後、医療はさらに進歩を遂げることが予測され、多くの不治の病が完治すると考えられる。しかしながら、その恩恵を享受することができる人は限られている。その上、肉体的な健康だけが健康というわけではない。

健康が連続的であるにもかかわらず、健康施策は縦割り行政に代表されるように非連続的である。健康のためにウォーキングなどの運動が必要であれば、公園や歩道の整備が必要であるが、健康施策は厚生労働省、公園や道路は国土交通省の管轄であり、総合的な施策が打ち出されることは少ない。しかしながら健康を考えるには、多角的にとらえるという考え方が必要である。昨今、健康は保健医療分野だけの問題ではないことが叫ばれている。特に施策は健康に与える影響が大きいため、施策の評価を行い、住民の健康を最大限にする動きがある。そのような施策の評価はヘルスインパクトアセスメント（HIA）と呼ばれ、ヨーロッパを中心に広がりつつある。

イギリスはHIA発祥の地として知られ、街の至る所にHIAの影響を垣間見ることができる。HIAは、意思決定機関に多様な階層の人材を採用することによって、住民のニーズを最大限に反映するしくみでもある。

■健康は施策である

WHOは健康を決定づける社会的要因として、収入、社交性、教育、文化などを挙げている。コミュニケーションにおいて中心と思われている言語よりも非言語の果たす役割が大きいのと同様に、健康においても保険医療分野以外の果たす役割が大きい。これらの社会的要因は施策による影響を受けるため、施策の評価が健康に大きな影響を及ぼす。

■一見関係なさそうな施策であっても…

ノッティンガムでは、路面電車が頻繁に運行されており、駅には大きな駐車場が備え付けられ、街中心部に行くとき

は、パーク＆ライドを利用し、車を止めて電車で中心部に行く。パーク＆ライドは、一見健康とは無縁と思われるが実はそうではない。街中心部の渋滞を緩和することにより、喘息の原因となる排気ガスの削減効果があるだけでなく、救急車両の到着時間を短縮し救命率を上げている。さらには、運転者同士の路上での揉め事を低減している。街中に路面電車を通すという、わが国においては国土交通省の管轄である施策が、実は健康施策にもなっているケースは珍しくない。イギリスにおいては健康はあらゆる面からアセスメントされている。

■ HNA ありき

施策が健康に与える影響が大きいがゆえに、施策の評価である HIA が行われているのであるが、イギリスでは施策を打ち出す前にどのようなニーズがあるか Health Needs Assessment（HNA）が行われている。HNA と HIA を重ねて行なうことは、ダブルチェックの役割を果たし、より住民の意見を反映しやすい形となっている。人間は過ちを犯すものであることに立脚し、チェック機能を設けることは非常に有益である。

健康は医学部だけが関わる独占業務ではない。学際的な協力が必要である。医学部以外の方も、研究と健康の関連を調査してみてはいかがだろうか。

「都市を世界遺産登録する」ことは地域社会にどのような影響を及ぼすのか?

工学研究科・神野グループ

■ なぜ世界遺産か？

グローバル化の中、都市は再開発問題や景観論争など、継承すべき都市の姿が消えつつある。それらの打開策のひとつに現在、都市の世界遺産登録が脚光を浴びている。しかし、世界遺産に登録されることで様々な問題も引き起こされる。例えば石見銀山は世界遺産登録されて注目を集め、直後の 2008 年には爆発的に観光客数を増やしたが、2009 年には激減した。今後安定した観光客数を確保していくことが大きな課題となっている。このように「テーマパーク化」している地域は少なくない。生活環境は悪化し、深刻な都市的問題にもつながっている。そこで、私達は、初期に世界遺産登録され、現在も世界遺産都市として維持され続けているローマに注目し、その理由を探ることで世界遺産都市の在り方に関する知見を得ようと考えた。

■「ローマ歴史地区」における 4 つの観光化の側面

ローマ大学 Andrea Bruschi 教授との調査により、ローマの観光要素として、以下の 4 つがあげられた。

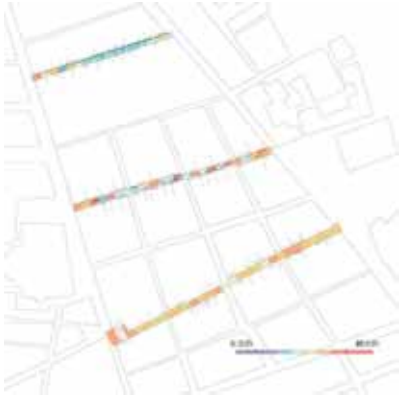
①宗教的要素、②歴史的要素、③ビジネス的要素、④現代的都市としての要素

今までは①〜③の要素が主であったが、それだけでは限界をむかえており、今後は④の要素も組み込みながら観光地としてのローマを作り上げていく必要があると考えられる。

■ 生活の場と観光の場

私たちは、Condotti 通り、Croce 通り、Greci 通りの 3 本を調査対象地として選定した。ここは、スペイン広場、ポポロ広場との間に位置し、観光客の行き交うメインストリートに囲まれている。また、周辺にはコロッセオ、パンテオン、トレヴィの泉など、有名な文化財が存在し、ローマのコアといえる部分である。

生活の場と観光の場、それらが通りにどの程度存在しているのか？その総合的な指標として、通り沿いに存在する「店舗」や「しつらえ」といった要素から「観光化度」を定義し通りごとに視覚化した（図 1、図 2）。Condotti 通りはほとんどしつらえがなく、観光的な用途の建物が非常に多く、Greci 通りは店舗の裏口、地元の音楽学校など、生活を感じる空間となっている。特筆すべきは Croce 通り（図 3）である。土産屋に地元のスーパー、その隣には花屋が立ち並ぶ。スペイン広場とポポロ広場という観光地やショッピングストリートを含むこのエリアにおいて、世界的観光地においても観光と生活がうまく共存していることが証明されたのである。



このエリアもいわゆる「観光化」という危機にさらされつつある。ローマ大学建築学部教授レオーネ・スピタ氏（Condotti通り在住）に、20年間の変遷を伺ったところ（図4）、20年ほど前から徐々に様相が変化していることがわかった。当時は食料品、鍛冶屋、家具屋、古くからあるセレクトショップなどがたくさんあったが、今では、1階が徐々にBVLGARIやGucchiといった高級ブランド店に変わり、住居であった2階に続く階段がショーウィンドウになることで生活の場が侵されつつあるという。少し離れたスーパーに日々の買物をすることが多く、不便である。しかしながら、観光産業や外資の資本に侵食されながらも小学校などが存在し、ローマ内の他の地域と比較すると生活者の環境が守られている地域であることが伺えた。

■ 最後に

都市を世界遺産する際、観光としての都市の側面のみならず、普段の市民生活が混在していることが大切である。それに対して同じ世界遺産都市であるフィレンツェでは観光資源に囲まれたエリアに生活の要素を見出すことはできず、完全に観光地化してしまっている。都市を世界遺産登録する時には、地域産業を育てていくことができるしくみ、古くから存在する地元に資金がまわるしくみなどを考えながら、持続可能な都市を作り上げていくことが必要である。

平成２１年度大阪大学「学生海外研修助成」事業報告会開催

平成21年度大阪大学「学生海外研修助成」事業に採択された学生グループによる報告会が2月5日(金)ICホールで行われました。この事業は、本学学生の積極性と企画力・実行力の向上を目的として、自らの企画により海外で交流・研修活動を行うグループを支援するため、平成14年度から実施されているもので、本年度は、工学部末澤令圭さん他1名による「安全、快適な自転車生活を大阪大学に！～デービス市に学ぶサイクルタウンの取り組み～」、医学系研究科岩田雅彦君他2名による「ヘルスインパクトアセスメントとその運用に係る研修」、工学研究科神野夏子さん他2名による「「都市を世界遺産登録する」ことは地域社会にどのような影響を及ぼすのか？」の3件の研修計画が採択され、各グループから、研修成果ならびに海外での交流体験等について報告が行われました。報告会には、学生及び教職員約15名が出席し、報告内容に関して活発な質疑応答が行われました。

また、2月18日(木)には、総長室で各グループによる鷲田総長に対する報告会が、辻毅一郎国際交流担当理事・副学長、菊野亨留学生センター長、亀岡雄国際部長同席のもとに行われました。1グループ5分という限られた時間の中、緊張した面持ちで研修成果の報告や大阪大学への提案が行われました。報告内容に関する質疑応答の後、総長から各グループに対して、今回の研修成果を無駄にせず、後に続く者のために広報に努めてほしいと激励の言葉がかけられました。

中央大学校（韓国）

Chung-Ang University

中央大学校は、1918年に中央教会に設置された附属幼稚園にルーツをもち、1945年創立の中央女子専門学校を前身として、1948年に設立された韓国屈指の私立総合大学です。ソウルと京畿道安城市にキャンパスがあり、学部学生22,000名、大学院生7,000名が広大なキャンパスで学んでいます。

2010年現在、リベラル・アーツ学部、自然科学部、工学部、教育学部、法学部、政治経済学部、社会科学部、人間生態学部、薬学部、医学部など19の学部を擁し、大学院も充実した研究教育プログラムを提供しています。ユニークなのはメディア・演劇学部、芸術学部、音楽学部、国楽学部など芸術関係の研究教育領域が充実していることで、韓国国内だけでなく、国外からも多くの学生が集い、実技を含めた学びの場となっています。近年ではさらに、韓国の有力企業であるDOOSANグループが大学の経営に参加して、英語で行うプログラムを充実させるなど大学のグローバル化を積極的に推進しています。

本学工学研究科・工学部は中央大学校工学部と1997年に部局間学術交流協定を締結し、以来、研究者と学生の交流、共同セミナーの開催などを積極的に行ってきましたが、このたび、日本の大学のなかでも芸術学関係講座がもっとも充実している本学文学研究科・文学部と連携して、大学間学術交流協定を締結しました。今後は、工学・文学両領域のみならず、幅広い分野における学術交流が展開するものと期待されます。

ウェブサイト：http://www.cau.ac.kr/

編　集　後　記

3月に卒業式・大学院学位記授与式、4月に入学式が挙行され、今回は初めて卒業式と入学式がともに大阪城ホールでの開催となりました。ご家族の出席も大変多く、盛大な式となりました。

4月から卒業生、新入生のみなさんはそれぞのフィールドで新たな生活が始まっていることでしょう。新たな気持ちがんばっていただきたいものです。

また、新入生の方や新たに大阪大学に来られた教職員の方におかれましては、これからも「阪大NOW」をよろしくお願いいたします。

（柿木）

航空部

高度１０００メートルの世界

私たち航空部は、エンジンのない、グライダーという航空機を操縦して自由に空を飛び、部員みんながパイロットになれる部活です。

グライダーにはエンジンがありません。そこで、ウインチや、軽飛行機で引張ることによって上空まで飛ばします。その後は高度を速度に変えて飛行します。上昇気流を上手く捕まえることができれば、いつまでも空の旅を楽しめます。地上では考えられない綺麗な景色に圧倒されます。

最初のうちは２人乗りのグライダーでインストラクターと一緒に操縦練習をします。上手くなっていけば１人乗りのグライダーで飛ぶこともできます。

また活動していく中で、グライダーの操縦免許や無線の免許などを取得することができます。ステップアップしていくことで自分自身の成長を感じることができるのも航空部の魅力の一つです。

普段は、部室で勉強会などを行い、長期休暇には岐阜県の河川敷や福井空港などに行って、合宿をして飛んでいます。他大学と合同で合宿をすることが多いので、他大学の仲間をたくさん作ることができます。

体験搭乗なども随時実施していますので、興味のある方は、気軽に連絡を取って欲しいです。部室にも遊びに来てください。皆さんも一緒に飛んでみませんか？

主将　鹿田　憲吾（工3年）

〈コメント〉
航空部の活動を通して、視野がとても広がりました。皆さんも是非色々なことを楽しんでください。気軽にコンタクトをとってくださいね。

練習場所：豊中キャンパス　明道館 BOX5
　　木曽川滑空場（岐阜県）
練習日時：ミーティング・勉強会　毎週土曜日 10 時～
　　合宿　長期休暇、土日
部 員 数：20 名
連 絡 先：メール：（主務　堀）
　　0yv53m4w387517w@ezweb.ne.jp
　　ホームページ：
　　http://sky.geocites.jp/ougchp_since2007/

OSAKA UNIVERSITY

トピックス

大阪大学本部棟の玄関がリニューアルしました

3月末に大阪大学本部棟玄関のリニューアル工事が完了し、大学への来客者により分かりやすく、より利用しやすいように改善・充実が図られました。

以前は、本部内全館案内サインが受付カウンターで死角に入っていたり、玄関付近では来客者が休憩したり、待ち合わせ時間を調整できる空間が無いなど、大阪大学の本部玄関としてはいくつも問題点がありました。

今回のリニューアルで、受付をフレームで囲むことで分かりやすい受付とし、来客の同線を重視して、受付とエレベーターの間に新しい本部内全館案内サインが設けられました。また、待合スペースは寄木張りのフローリングに現代的なデザインのソファ、テーブルが配置され、大阪大学本部の玄関としての風格と来客者の利便性への配慮が見られます。

（施設部企画課）

阪大 NOW　No.117　2010 4月号　　2010年4月20日発行

編集　大阪大学広報・社学連携室
発行　大阪大学企画部広報・社学連携事務室　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL：06（6879）7017　　FAX：06（6879）7156
ホームページアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail : ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp

この冊子は人類環境浄化のためのエコー認定の再生紙を使用しています。
000530